

725
8



0054540-000

725-8

愛知県伝説集

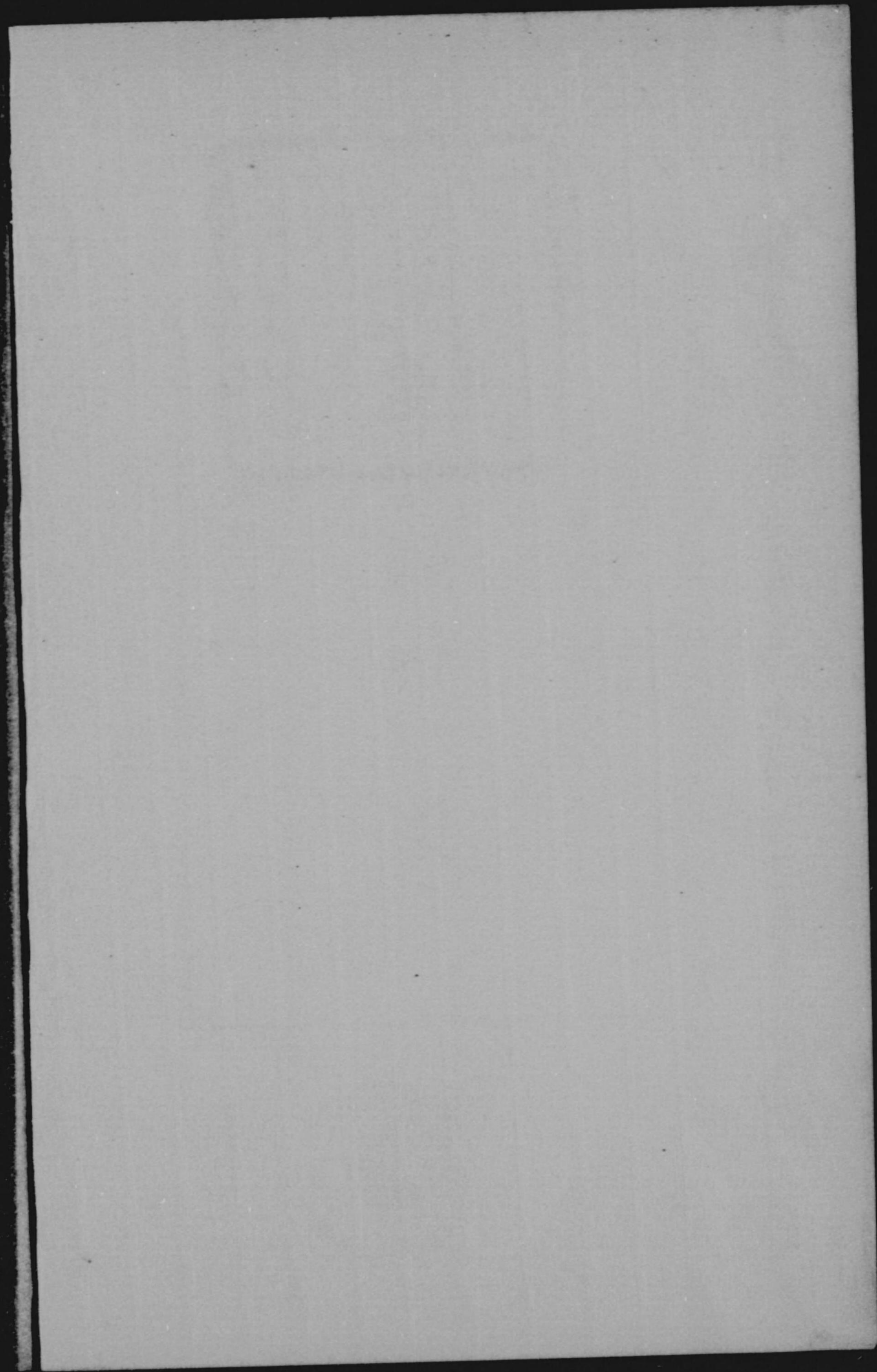
愛知県教育会・編

郷土研究社

昭12

AID

429





愛知縣教育會編

知縣傳說集

東京 郷土研究社版



愛知縣傳説集

本書の編纂について

- 725
8
- 一、本書は昭和七年六月愛知縣教育會が縣下各都市の校長會長に依頼し、各都市各部會毎に纏めて提出していただいた傳説を整理編纂したものである。
 - 二、本書編纂については柳田國男先生の指導を仰いだことが多く、本會の伊奈編纂員を主任とし委員宮本秀吉、安藤直太郎、白井一二、藤森哲也の四氏が分任して編纂した。
 - 三、本書の採録した傳説は七百六十九編で、郡によつて報告の多い處と少い處とあり、本縣に有する傳説を悉く採録し盡したとはいへない。依て今後尙蒐集を續け、續編を編纂したい考である。
 - 四、本書編纂の分類については、山とか河とか、植物とかいふやうに、成るべく土地に即した物

によつて分類し、説話の内容とか、人物とかによる分類はこれを避けた。

五、記述様式については、文を美しくして文學的の價值ある作品とするのが本志でないから、今日行はるゝ口碑の骨子を質實に記載することにつとめ、着色することは力めて避けた。

六、古い名高い文獻にあらはれてゐる有名な傳説は、出典を記して原文のまゝを載せて置いた。

昭和十一年五月廿五日

愛知縣教育會

目次

目次

一、山の話.....一六	
1 尾張富士の石上げ(丹羽).....一	7 御度の丸山(同).....四
2 萬燈山と鈎萬燈(幡豆).....二	8 祇神山(寶飯).....五
3 花圃山(額田).....三	9 親音山(同).....五
4 京が峯(同).....三	10 本宮山と石巻山(寶飯・八名).....五
5 信玄の金山(北設).....四	11 本宮山と吉祥山の争(寶飯・八名).....六
6 木山(同).....四	12 船着山(八名).....六
二、海・島・岬・濱等の話.....七一五	
1 お経をもちつた堤防の根石(知多).....七	7 おりん島(同).....九
2 土左衛門と豊濱(同).....七	8 龍宮(同).....一〇
3 海荒の前兆(同).....八	9 海幽霊の出る日(同).....一〇
4 漁獵禁断の鬼ヶ崎(同).....八	10 龍宮の御神火(同).....一〇
5 大津波(同).....八	11 東島と小磯島と榮造泣かせ(同).....二
6 雷岩(同).....九	12 不正の者を住ませない篠島(同).....二

目次

13	神様御上陸の跡(同).....二
14	南風ヶ崎と清正の枕石(同).....三
15	鯛 濱(同).....三
16	往古の佐久島(幡豆).....三
17	大 島(寶飯).....三
18	佛 島(同).....四
19	姫 島(渥美).....四

三、河・淵・泉・井・池等の話.....一六一

1	高牟の古井(名古屋).....一六
2	濁り池(愛知).....一六
3	安産水(同).....一六
4	機織池(東春).....一七
5	鞍が淵(同).....一八
6	鹿乗が淵(同).....一八
7	子取り池(同).....一八
8	蛇が淵(同).....一九
9	竹藪の冷泉(西春).....二〇
10	蛇池傳説(同).....二〇
11	鞍ヶ淵(丹羽).....二〇
12	城井戸(同).....二〇
13	草の井(葉栗).....二〇
14	鴨ヶ池傳説(同).....二三
15	やろか水(同).....二三
16	血止めの井戸(同).....二四
17	姫取ヶ池(同).....二四
18	藤五郎橋(同).....二五
19	東淺井の池(同).....二五
20	川中の古杭(同).....二七
21	白鷺の寶刀と日光川(中島).....二八
22	笠取沼(同).....二八
23	片葉の芦(同).....二九
24	蛭が池(同).....二九
25	首 池(同).....三〇
26	蛇 池(同).....三〇
46	無縁者の井戸(額田).....三〇
47	釣鐘淵(同).....三〇
48	椀貸池(西加茂).....三一
49	梅ヶ井淵(北設).....三一
50	田峯の鮎(同).....三一
51	くらがへ淵(同).....三一
52	碗かせ淵(同).....三一
53	びわ淵(同).....三一
54	青 淵(同).....三一
55	機織淵(同).....三一
56	萬淵の大蛇(同).....三一
57	機織淵(同).....三一
58	トノ淵(同).....三一
59	御池様(同).....三一
60	お椀淵(同).....三一
61	チンチン淵(同).....三一
62	井の淵(同).....三一
63	お姫井戸(同).....三一
64	古井戸(同).....三一

27	龍 池(同).....三
28	紙柄池(海部).....三
29	甲掛清水(知多).....三
30	血 池(同).....三
31	戀の水神(同).....三
32	粟たきの清水(同).....三
33	北の池(同).....三
34	芦澤の井(同).....三
35	眞古酌井(同).....三
36	生路井(同).....三
37	大日池(同).....三
38	お城下の主(豊橋).....三
39	吉田大橋(同).....三
40	大池の主(同).....三
41	墓 池(碧海).....三
42	息繼ぎの井戸(同).....三
43	龍宮井(同).....三
44	櫻井戸(同).....三
45	小園池の主(幡豆).....三
46	無縁者の井戸(額田).....三〇
47	釣鐘淵(同).....三〇
48	椀貸池(西加茂).....三一
49	梅ヶ井淵(北設).....三一
50	田峯の鮎(同).....三一
51	くらがへ淵(同).....三一
52	碗かせ淵(同).....三一
53	びわ淵(同).....三一
54	青 淵(同).....三一
55	機織淵(同).....三一
56	萬淵の大蛇(同).....三一
57	機織淵(同).....三一
58	トノ淵(同).....三一
59	御池様(同).....三一
60	お椀淵(同).....三一
61	チンチン淵(同).....三一
62	井の淵(同).....三一
63	お姫井戸(同).....三一
64	古井戸(同).....三一

目 次

65	お 瀧 (同).....	五
66	人道瀧 (同).....	五
67	よばり瀧 (同).....	五
68	和倉ヶ瀧 (同).....	五
69	血 澤 (同).....	五
70	座頭岩と座頭瀧 (同).....	五
71	蝦蟇瀧 (同).....	五
72	双子瀧 (同).....	五
73	女郎瀧と辨天瀧 (同).....	五
74	なり瀧 (同).....	五
75	同道のかま (同).....	五
76	膳棚瀧 (同).....	五
77	オホトビ瀧 (同).....	五
78	から池 (同).....	五
79	萬の瀧 (同).....	五
80	櫃 瀧 (同).....	五
81	預り瀧 (同).....	五
82	血の深 (同).....	五
83	牛の瀧 (賣飯).....	五
84	清水弘法 (同).....	五
85	葵ヶ池 (同).....	五
86	権現の池 (同).....	五
87	いづみ澤 (同).....	五
88	流霞清水 (同).....	五
89	鞘ヶ瀧 (同).....	五
90	熊ヶ池の田螺 (同).....	五
91	硯 川 (同).....	五
92	錫杖井戸 (同).....	五
93	三河三水鏡水 (同).....	五
94	貝鞍の瀧 (八名).....	五
95	鐘が瀧 (同).....	五
96	入ッ井戸 (同).....	五

四、治水傳説其他

1	十五の森 (東春).....	六
2	小田井人足 (西春).....	六

3	神明裏の人柱 (葉栗).....	六
4	忠兵衛猿尾 (同).....	六
5	一本松 (中島).....	六
6	水曾川瀧止址 (同).....	六
7	正瑞寺傳説 (同).....	六
8	底なしの池 (海部).....	六
9	堰の工事 (北設).....	六
10	鎌 止 (同).....	六
11	水弘法 (賣飯).....	六

五、石・地蔵・石塔等の話

1	紫式部の墓 (名古屋).....	六
2	龍神石 (一宮).....	六
3	身替地蔵 (愛知).....	六
4	枕貸し岩 (東春).....	六
5	お潮水 (同).....	七
6	疥取り石 (同).....	七
7	雙 石 (同).....	七
8	天狗の踵岩 (同).....	七
9	眼鼻石 (同).....	七
10	因縁墓 (同).....	七
11	阿半長右衛門の墓 (同).....	七
12	海丸の穴 (同).....	七
13	鏡 石 (同).....	七
14	首切地蔵 (西春).....	七
15	唸 石 (同).....	七
16	東岸居士の墓 (同).....	七
17	乙女岩 (丹羽).....	七
18	八王子社内の石 (同).....	七
19	石頭山の鏡岩 (同).....	七
20	天狗岩 (同).....	七
21	夜泣き岩 (葉栗).....	七
22	判官石 (同).....	七
23	胴體岩 (同).....	七
24	七つ石 (中島).....	七

25 親鸞上人腰掛石(海部)..... 九
 26 六地藏(同)..... 九
 27 來迎石(知多)..... 八
 28 弘法の腰掛石(同)..... 八
 29 磯岩と伊勢山(同)..... 八
 30 姥徒谷の姥徒石と金丸足跡石(同)..... 八
 31 いぼ地藏(同)..... 八
 32 五右衛門地藏(同)..... 八
 33 オコリ佛(同)..... 八
 34 無實の難を救はせ給ふ長登上人(同)..... 八
 35 大石燈籠(豊橋)..... 八
 36 東照公御腰石(同)..... 八
 37 天降石(同)..... 八
 38 神石(同)..... 八
 39 首斬地藏(同)..... 八
 40 千體骨地藏(同)..... 八
 41 政入地藏尊(碧海)..... 八
 42 桑子のおこり石(同)..... 八
 43 村積山の毒石(額田)..... 八

44 抱地藏(同)..... 八
 45 うなり石(同)..... 八
 46 石佛(西加茂)..... 八
 47 鷲石(同)..... 八
 48 駒が蹄(同)..... 八
 49 おとば様(北設)..... 八
 50 天狗の手洗鉢(同)..... 八
 51 御所岩(同)..... 八
 52 オシャグリ様(同)..... 八
 53 もち洗石(同)..... 八
 54 休み石(同)..... 八
 55 赤子岩(同)..... 八
 56 行者岩(同)..... 八
 57 物見岩(同)..... 八
 58 大屋地の五輪塔(同)..... 八
 59 成長する石(同)..... 八
 60 鬼の足跡と手跡(同)..... 八
 61 ひめ岩(同)..... 八
 62 じよろう岩(同)..... 八

63 百六岩(同)..... 九
 64 殿岩(同)..... 九
 65 足神様(同)..... 九
 66 よらぎ地藏と入つ田(同)..... 九
 67 赤子石(同)..... 九
 68 女籠石(寶飯)..... 九
 69 贈参河守大江定基出家語(今昔物語)..... 九
 70 神力石(同)..... 九
 71 淨瑠璃姫腰掛石(同)..... 九
 72 彈琴石(同)..... 九
 73 贈師長熱田の社遷遷の事(源平書表記)..... 九
 74 岩窟穴観音(同)..... 九
 75 火穴の石(同)..... 九
 76 腹痛を治した地藏(同)..... 九
 77 焼け地藏(同)..... 九

78 笠神山の石(同)..... 九
 79 人を呼ぶ地藏(同)..... 九
 80 長瀬石採場(同)..... 九
 81 弘法大師御足跡岩(同)..... 九
 82 占石(同)..... 九
 83 鏡岩(渥美)..... 九
 84 五輪の地藏(同)..... 九
 85 石船と腰掛岩(同)..... 九
 86 海上りの地藏(同)..... 九
 87 膳貸岩(同)..... 九
 88 鷲石(同)..... 九
 89 瀧山崩れ(八名)..... 九
 90 田植地藏(同)..... 九
 91 六つ石(同)..... 九
 92 座禪石(同)..... 九
 93 夜泣石(同)..... 九
 94 磔岩(同)..... 九

六、城址・屋敷址等の話……………一三一—一三三

1	師長講居址(名古屋)	一三三
2	頼朝誕生地(同)	一三三
3	池殿屋敷(同)	一三四
4	義經元服の地(同)	一三四
5	景清屋敷址(同)	一三四
6	八百比丘尼(一宮)	一三五
7	沓掛岩址(愛知)	一三六
8	西行堂跡(東春)	一三六
9	道風屋敷跡(同)	一三六
10	甚藏屋敷址(同)	一三七
11	八百比丘尼の生地(同)	一三七
12	山の田の孝女(同)	一三八
13	秀吉の生地(西春)	一三九
14	秀吉の生地(同)	一三九
15	女郎屋敷(同)	一四〇
16	朝日殿の宅址(同)	一四〇
17	晴明屋敷(丹羽)	一四〇
18	八百比丘尼(同)	一三三
19	山王小太郎の屋敷址(葉栗)	一三三
20	小寒神社と八百尼(同)	一三三
21	中島宮跡址(中島)	一三三
22	お高屋敷(同)	一三三
23	備前屋敷(海部)	一三三
24	深田城(同)	一三四
25	御姫屋敷(知多)	一三四
26	鎌田政家の居城址(同)	一三四
27	天神山(同)	一三四
28	在原業平の御所(同)	一三五
29	大草城址(同)	一三六
30	藩士山(同)	一三六
31	杉城(同)	一三六
32	景清の隠れ藪(同)	一三七
33	馬場・城残し(同)	一三七
34	金矮鶏(岡崎)	一三八

35	公文所址(碧海)	一三八
36	長者屋敷(同)	一三九
37	北野慶寺(同)	一三九
38	小野小町の居住址(幡豆)	一三九
39	宮崎城址(額田)	一四〇
40	釜屋敷(北設)	一三〇
41	岩山の城址(同)	一三一
42	宮平の城址(同)	一三一
43	尾藤源内屋敷址(南設)	一三一
44	重松城址(寶飯)	一三一

七、塚の話……………一三一—一七〇

1	爲朝塚(名古屋)	一三五
2	白鳥山(同)	一三五
3	御輿塚(同)	一三四
4	小首塚(同)	一三四
5	おともの塚(同)	一三四
6	鏡塚(同)	一三五
7	金塚(同)	一三五
8	片葉塚(同)	一三五
9	將軍塚(同)	一三五
10	太郎塚(同)	一三六
11	平將門の首塚(同)	一三六
12	小袖塚(同)	一三七
13	お塚様(同)	一三六
14	お猿塚(東春)	一三六
15	帯塚(同)	一三六
16	衣掛塚(同)	一三六
17	白鳥塚(同)	一三六
18	親王塚(同)	一四〇
19	外堀塚(西春)	一四〇
20	小野道風筆塚(同)	一四〇
21	駿河塚(同)	一四〇
22	琵琶塚辨財天(同)	一四〇
23	機織塚(丹羽)	一四〇
24	磨墨塚(同)	一四〇

25	葉森塚(同).....	一五三
26	庚申塚(中島).....	一五四
27	猫塚の金墓(同).....	一五四
28	玉塚(同).....	一五四
29	蛇塚(同).....	一五五
30	尼ヶ塚(海部).....	一五五
31	小町塚(同).....	一五五
32	秀の恩人晴明の塚(同).....	一五五
33	太閤塚(知多).....	一五五
34	塚の越の古墳(同).....	一五五
35	棚姫の墓(同).....	一五五
36	城塚(同).....	一五五
37	業平塚(同).....	一五五
38	今川義元の墓(同).....	一五五
39	惣五郎塚(同).....	一五五
40	正官墳(同).....	一五五
41	六部塚(同).....	一五五
42	山伏塚(豊橋).....	一五五
43	新田義貞の首塚(碧海).....	一五五
44	猿投塚(同).....	一五三
45	美曾塚(額田).....	一五三
46	コタネシヨイの墓(北設).....	一五三
47	ふじ塚(同).....	一五三
48	武田信玄の墓(同).....	一五三
49	比丘尼塚(同).....	一五四
50	信玄塚(同).....	一五四
51	信玄塚(同).....	一五四
52	七人塚(同).....	一五五
53	藤塚(同).....	一五五
54	千人塚(同).....	一五五
55	村境塚(同).....	一五五
56	七人塚(同).....	一五五
57	大倉大明神(同).....	一五五
58	七人塚(同).....	一五五
59	七人塚(同).....	一五五
60	おきくの墓(同).....	一五五
61	落人の墓(同).....	一五五
62	七人塚(同).....	一五五

八、地名の由来.....

93	經塚(同).....	一六〇
64	藤塚(同).....	一六〇
65	犬の墓(同).....	一六一
66	望月様(同).....	一六一
67	高松の無縁塚(南設).....	一六二
68	經塚(同).....	一六三
69	火塚(寶飯).....	一六三
70	牛長左塚(同).....	一六三
71	オンメ塚(同).....	一六三
72	金時塚(同).....	一六三
73	耳塚(同).....	一六三
74	比丘尼塚(同).....	一六三
75	法印塚(同).....	一六五
76	乙葉塚(同).....	一六五
77	四塚(同).....	一六五
78	音羽塚(同).....	一六五
79	風鈴塚(同).....	一六六
80	塚穴(同).....	一六六
81	膳塚(同).....	一六七
82	椀貸塚(同).....	一六七
83	火穴(渥美).....	一六八
84	八人塚(同).....	一六八
85	お犬塚(同).....	一六九
86	火塚(八名).....	一六九
1	鷺谷(名古屋).....	一七一
2	西行法師(同).....	一七一
3	千本松原(同).....	一七一
4	吹上の里(同).....	一七一
5	鐵砲池(同).....	一七一
6	振甫池(同).....	一七二
7	まんのひあひ(同).....	一七三
8	香掛(愛知).....	一七三
9	日本武尊に關する地名傳説(東春).....	一七四
10	庄中(同).....	一七四

目次

11	空蔵ぎの地(同).....	一七五
12	御鶴街道(西春).....	一七五
13	辨慶傳説(同).....	一七五
14	幸野(丹羽).....	一七六
15	馬取池(葉栗).....	一七六
16	物見塚(中島).....	一七六
17	源氏島(海部).....	一七七
18	供米田と米出道(同).....	一七七
19	槍場高根とお成道(知多).....	一七七
20	檜原(同).....	一七八
21	隱戸(同).....	一七八
22	佛ヶ山(同).....	一七八
23	一本木(同).....	一七八
24	業平と御所(同).....	一七八
25	半月(同).....	一七八
26	おしよき場(同).....	一八〇
27	浦島・真龜(同).....	一八〇
28	鐘・鑓(同).....	一八〇
29	堂前と堂前池(同).....	一八〇
30	岩崎(豊橋).....	一八二
31	葦毛(同).....	一八二
32	馬見塚(同).....	一八二
33	手洗(同).....	一八三
34	お弓橋(同).....	一八三
35	二連木(同).....	一八三
36	七つ井の里(碧海).....	一八三
37	鐘池(同).....	一八三
38	釜ヶ淵(同).....	一八四
39	矢作の由来(同).....	一八五
40	三鹿の渡(額田).....	一八五
41	衣文の里(同).....	一八六
42	天ヶ峯(東加茂).....	一八六
43	シヤゲヂの村神(北設).....	一八七
44	トヤネ(同).....	一八七
45	ノノバネと矢落(同).....	一八七
46	鹽津(同).....	一八七
47	王子畑(同).....	一八八
48	蔵(同).....	一八八

49	矢矧川(同).....	一八八
50	川手(同).....	一八九
51	六部峠(同).....	一八九
25	妙殿(同).....	一九〇
53	餅洗場(同).....	一九〇
54	風呂洞と御所屋(同).....	一九〇
55	鍵掛(同).....	一九〇
56	鐵砲焼(同).....	一九一
57	お姫道(同).....	一九一
58	岩屋と馬屋入とかくれ籠(同).....	一九二
59	白山と岩屋窪と日の行場と断食窪(同).....	一九二
60	月(同).....	一九二
61	御殿山(同).....	一九三
62	竹園(同).....	一九三
63	加賀野(同).....	一九三
64	平家澤と源氏アラシ(同).....	一九四
65	浅井(同).....	一九四
66	エギチ(同).....	一九五
67	佛のもと(同).....	一九五
68	矢高(南設).....	一九六
69	徳衛(同).....	一九六
70	釜蓋(同).....	一九六
71	行者越(同).....	一九七
72	袖切橋(寶飯).....	一九七
73	牛窪(同).....	一九八
74	宮井戸(同).....	一九八
75	こだが橋と走川(同).....	一九九
76	篠塚(同).....	一九九
77	伊奈(同).....	一九九
78	馬洗(同).....	二〇〇
79	鐘割坂(同).....	二〇〇
80	萩村(同).....	二〇一
81	座頭歸らす(同).....	二〇一
82	丹野(同).....	二〇一
83	追坂(同).....	二〇一
84	御油(同).....	二〇二
85	繩田(同).....	二〇二
89	鐵砲(同).....	二〇二

87	雀ヶ森(同).....	二〇五
88	五井(同).....	二〇三
89	寶川(同).....	二〇三
90	徒ヶ谷・燦ヶ谷・神座ヶ谷(渥美).....	二〇四
91	船戸・物見塚(同).....	二〇四
92	神別坂(同).....	二〇五
93	行基山(同).....	二〇五
94	夜光石、光岬(同).....	二〇五
95	六助(八名).....	二〇六
96	寄合窪(同).....	二〇六

九、植物の話

1	権現松(一宮).....	二〇七
2	鶴の巢(同).....	二〇八
3	縁結びの木(東春).....	二〇八
4	大横(同).....	二〇八
5	駒繫ぎ松(同).....	二〇九
6	疣取り(同).....	二〇九
7	宮重大根の由来(西春).....	二〇九
8	白山社の大杉(同).....	二一〇
9	天狗の棲む杉の木(丹羽).....	二一〇
10	北折の常紋南天(同).....	二一一
11	金鷄(同).....	二一一
12	かやの木弘法(同).....	二一一
13	子助櫻(同).....	二一七
14	大榎(同).....	二一三
15	公孫樹(中島).....	二一三
16	笠懸松(同).....	二一三
17	おつげの木(同).....	二一三
18	大榎化して竹となる(海部).....	二一四
19	源義朝と捻木の柳(同).....	二一五
20	虚無僧松(同).....	二一五
21	義経の弓懸松(同).....	二一五
22	狂氣松(知多).....	二一六
23	八百比丘お手植の樟(同).....	二一六
24	衣懸の松とあかすの門(同).....	二一六
38	夫婦榎(同).....	二二三
39	綿屋の門松(寶飯).....	二二四
40	羽衣松(同).....	二二四
41	ならすの梅(同).....	二二五
42	聖徳太子御手植の梅(同).....	二二六
43	椋の木様(同).....	二二六
44	二村山の靈木(同).....	二二六
45	春乙櫻(渥美).....	二二七
46	東観音寺の笹(同).....	二二七
47	龍宮の燈のつく松(同).....	二二七
48	車止の櫻(同).....	二二八
49	千貫松(同).....	二二八
50	辨天松(同).....	二二八

一〇、動物・變怪民譚附獵の話

1	狐の話(東春).....	二九
2	多羅々伽池の龍神(同).....	三九
3	なまど神様(同).....	三〇
4	龍徳寺の狸(西春).....	三〇
5	大蛇(同).....	三〇
6	鳩岡(同).....	三三
7	七十五釣の狐の嫁入(同).....	三三
8	思知り狐(同).....	三三
25	天然痘除の楠(同).....	二七
26	檜榎(同).....	二七
27	駒止の櫻(豊橋).....	二八
28	蓮華寺の大楠(碧海).....	二八
29	謎かけ松(幡豆).....	二八
30	婆櫻(額田).....	二八
31	法眼松(西加茂).....	三〇
32	穴瀬の大榎(北設).....	三一
33	花の木(同).....	三一
34	鶯のないた大黒柱(同).....	三一
35	子持カツラ(同).....	三一
36	門松を建てぬ所(同).....	三一
37	弘法栗(同).....	三一
38	夫婦榎(同).....	二二三
39	綿屋の門松(寶飯).....	二二四
40	羽衣松(同).....	二二四
41	ならすの梅(同).....	二二五
42	聖徳太子御手植の梅(同).....	二二六
43	椋の木様(同).....	二二六
44	二村山の靈木(同).....	二二六
45	春乙櫻(渥美).....	二二七
46	東観音寺の笹(同).....	二二七
47	龍宮の燈のつく松(同).....	二二七
48	車止の櫻(同).....	二二八
49	千貫松(同).....	二二八
50	辨天松(同).....	二二八

目次

9	狐火(同).....二五三
10	俺はれすみ(丹羽).....二五三
11	夜半の瓢箪(同).....二五三
12	瑞泉寺鐘樓の猿(同).....二五三
13	おしよもじ様(同).....二五三
14	オケハン狐の正體(同).....二五三
15	大蛇(同).....二五三
16	青い龍(同).....二五三
17	一本杉(同).....二五三
18	真念寺の大松(同).....二五三
19	森林平氏と商標「鶴の丸」(葉栗).....二五三
20	栗温井の金鷄(同).....二五三
21	黒田の狐狸(同).....二五三
22	大杉様(同).....二五三
23	鼠の村(同).....二五三
24	音楽寺の金鳩(同).....二五三
25	天狗火(巾島).....二五三
26	彌左狐(同).....二五三
27	観音寺の五色蛇(同).....二五三
28	天狗の話(海部).....二五三
29	長田蟹・長田貝(知多).....二五三
30	老狐高藏坊(同).....二五三
31	にしの崖(同).....二五三
32	螺側(同).....二五三
33	蟹ヶ島・猿塚(同).....二五三
34	蟻除けのお守(同).....二五三
35	金鷄山(同).....二五三
36	白蛇の祟り(同).....二五三
37	鹽でふせられた雷様(同).....二五三
38	櫻下稻荷の狐(豊橋).....二五三
39	善見寺の狐(同).....二五三
40	宇都宮泰藤の忠犬(碧海).....二五三
41	大藏猫(同).....二五三
42	林松寺水呑龍(幡豆).....二五三
43	山犬の卵(額田).....二五三
44	古城の狐(同).....二五三
45	ぬけ出しの虎と龍(同).....二五三
46	ほら貝穴(同).....二五三

目次

47	眞福長者と青蛇(同).....二五三
48	妙勝寺の龍の由來(西加茂).....二五三
49	地獄に通ふ窟(東加茂).....二五三
50	カシヤ(北設).....二五三
51	御堂山の天狗(同).....二五三
52	牛ころびの佛(同).....二五三
53	天狗の火(同).....二五三
54	天狗(同).....二五三
55	石龜峠の龜(同).....二五三
56	花祭と天狗(同).....二五三
57	狸(同).....二五三
58	山犬(同).....二五三
59	龜淵の河小僧(同).....二五三
60	大蛇の穴(同).....二五三
61	川小僧(同).....二五三
62	大蛇(同).....二五三
63	龍の駒(同).....二五三
64	杉に住む鬼(寶飯).....二五三
65	おくり火(同).....二五三
66	人に化た狐(同).....二五三
67	大池の大蛇(同).....二五三
68	疍の虫(同).....二五三
69	天狗小僧(同).....二五三
70	三足龜(同).....二五三
71	神石の白蛇(同).....二五三
72	左甚五郎の唐猫(同).....二五三
73	茶屋登(同).....二五三
74	大鰻(寶飯).....二五三
75	大螺(同).....二五三
76	章魚と蛇の戦(同).....二五三
77	一本木のごひん様(渥美).....二五三
78	ほいほい鳥(同).....二五三
79	豊島池の白馬(同).....二五三
80	豊島池の大蛇(同).....二五三
81	黒淵の龍(八名).....二五三

一一、神々の祟りと怨霊の話

1	篠木宗八(東春).....	二七五
2	餅をつかない村(西春).....	二七五
3	山田紀内幽霊と契る(同).....	二七六
4	提灯とぼし(同).....	二七七
5	勘五郎火(丹羽).....	二七八
6	白髭大明神(同).....	二七九
7	女人禁制(同).....	二八〇
8	羽黒の敗戦(同).....	二八一
9	舟入の靈松(海部).....	二八二
10	経塚の祟り(知多).....	二八三
11	神戸の塚石(同).....	二八四
12	黄金の神像(同).....	二八五
13	刀の祟り(同).....	二八六
14	小櫻姫の鏡曳(同).....	二八七
15	今川義元の幽霊(同).....	二八八
16	六所神靈不浄を忌まるゝ事(東加茂).....	二八九
17	荒神の祟(北設).....	二九〇
18	ブク田(同).....	二九一
19	生のある三番叟人形(同).....	二九二
20	尹良親王御休所(同).....	二九三
21	徳念佛(同).....	二九四
22	エンキの立日(同).....	二九五
23	神木の祟(同).....	二九六
24	権現の森(同).....	二九七
25	てんげ様と飛入様(同).....	二九八
26	熊を喰べた祟(南設).....	二九九
27	桃の實らぬ村(渥美).....	三〇〇
28	吉祥天祠の怪光(八名).....	三〇一

一二、山人の生活・巨人傳説其他

1	山姥物語(丹羽).....	二九〇
2	大力左市(葉栗).....	二九一—二九六

3	神社の竹(同).....	二九二
4	二十四力士(知多).....	二九三
5	お岩ヶ鼻(同).....	二九四
6	小太郎の怪力(額田).....	二九五
7	白ひげ山(北設).....	二九六
8	段戸山の大坊主(同).....	二九七
9	善盤石山の怪力者(同).....	二九八
10	エレン様(同).....	二九九
11	入道坊主(南設).....	三〇〇
12	だららばち(渥美).....	三〇一
13	山姥の足跡(八名).....	三〇二
14	あまのさゝ(同).....	三〇三
15	ダイダラボツナの足跡(同).....	三〇四

一三、雨乞の話

1	「がくの洞」の雨乞(東春).....	三〇五
2	眞清田神社の龍神(一宮).....	三〇六
3	朝鮮鐘(葉栗).....	三〇七
4	雨乞舞(海部).....	三〇八
5	貴船の水玉(知多).....	三〇九
6	城ヶ淵(同).....	三一〇
7	入ッ頭神事(同).....	三一一
8	雨乞の面(同).....	三一二
9	龍の鱗(豊橋).....	三一三
10	龍宮の雨乞(岡崎).....	三一四
11	馬桶の水(北設).....	三一五
12	三本松(同).....	三一六
13	雨乞淵(同).....	三一七
14	寄せばたの雨乞(同).....	三一八
15	葛の淵の雨乞(同).....	三一九
16	雨乞祭(寶飯).....	三二〇
17	雨乞石(同).....	三二一
18	竹島の龍神(同).....	三二二
19	木履石(渥美).....	三二三
20	白髭明神の雨乞(同).....	三二四

21 雨引天神の雨乞(八名).....三〇七

一四、社と寺の話

.....三〇八—三六五

1 犬御堂(名古屋).....三〇八

2 楊貴妃(同).....三〇九

3 辨慶傳説(同).....三〇九

4 鷹御堂(同).....三〇〇

5 龍燈(一宮).....三〇〇

6 大山三千坊(東春).....三〇〇

7 子福観音(同).....三〇一

8 妻の神(同).....三〇二

9 冬至弘法縁起(同).....三〇二

10 密蔵院縁起(同).....三〇三

11 篠木合宿の起り(同).....三〇四

12 御養子迎へ(同).....三〇五

13 龍泉寺合宿(同).....三〇五

14 曾野稻荷(同).....三〇六

15 お鍛様(西春).....三〇七

16 夕立祭(同).....三〇七

17 オコリバツ様(同).....三〇七

18 庚神の妻問ひ(同).....三〇八

19 鷲峯寺由来(同).....三〇八

20 額面の猿作物を荒す(同).....三〇九

21 ニツ杵神明社(同).....三〇〇

22 寶國寺の阿彌陀如来(同).....三〇〇

23 雨の嫌いな神様(同).....三〇一

24 伊奴神社の女神(同).....三〇二

25 諏訪神社の落雷(同).....三〇二

26 おそ、様の本家(同).....三〇三

27 戸叩き聖天(丹羽).....三〇三

28 今井の氏神(同).....三〇三

29 薬師寺堂(同).....三〇三

30 御光寺(葉栗).....三〇四

31 以覺寺の天火(同).....三〇五

32 來徳寺の朱(同).....三〇五

33 さはりの鐘(同).....三〇六

34 若栗神社と男子御授産(同).....三〇六

35 弘法の井と十字路橋(同).....三〇七

36 雷除け御符(同).....三〇七

37 大明神社の御神威(同).....三〇八

38 櫻の宮(同).....三〇八

39 獅子と能楽(丹羽).....三〇九

40 恩澤寺の聖徳太子像(海部).....三〇九

41 藪香物(同).....三〇九

42 からやくし(知多).....三〇〇

43 一本三體の大日如来(同).....三〇〇

44 醫王寺の薬師如来(同).....三〇一

45 粥占の神事(同).....三〇一

46 白山神社(同).....三〇二

47 岩屋寺(同).....三〇二

48 帆下げの八幡(同).....三〇三

49 雷避の御神札(同).....三〇四

50 紛失物の判る縣神社(同).....三〇四

51 藤原景清の観音經(同).....三〇五

52 堀田の稻荷社(同).....三〇五

53 神明社の鬼祭(豊橋).....三〇五

54 天神社の神像(同).....三〇七

55 石田神明社の御饌(同).....三〇八

56 吉田神社の神輿(同).....三〇八

57 鞍掛神社(同).....三〇九

58 道知邊稻荷(同).....三〇九

59 蓮如上人の鬚(岡崎).....三〇九

60 富永の田植観音(碧海).....三〇〇

61 林松寺不動明王(幡豆).....三〇〇

62 光り佛(同).....三〇〇

63 西尾城内に雷の落ちない事(同).....三〇一

64 田植観音(同).....三〇二

65 薬師の抱地藏(額田).....三〇二

66 片目の不動(額多).....三〇二

67 菅原天満宮(西加茂).....三〇三

68 雪を降らす田峯観音(北設).....三〇四

69 浅草寺観音(同).....三〇四

70 石神(同).....三〇五

71	岩山神社(同).....	三三三
72	徳左観音(同).....	三三六
73	雨を止ます神社(同).....	三三六
74	大村様(同).....	三三七
75	神社を毀く(同).....	三四七
76	子供の好きな観音様(同).....	三四八
77	じやどく様(同).....	三四八
78	飛ぶ御神體(同).....	三四九
79	大金様(同).....	三五〇
80	高松馬頭観世音(南設).....	三五〇
81	若宮社(同).....	三五〇
82	白鳥神社(同).....	三五二
83	白鳥様(同).....	三五二
84	報恩寺(寶飯).....	三五二
85	菟足神社の鐘(同).....	三五二
86	菟足神社の大般若經(同).....	三五三
87	篠東神社(同).....	三五三
88	田植観音(同).....	三五三
89	不動院の鐘(同).....	三五四
90	榮善寺の大日佛(同).....	三五四
91	稻村神社と神石(同).....	三五五
92	神様の引越(同).....	三五五
93	縁結び大黒(同).....	三五六
94	疣神様(同).....	三五六
95	龍織神社(同).....	三五六
96	金剛瀧薬師(同).....	三五七
97	大頭神社(同).....	三五七
98	岩屋堂(渥美).....	三五七
99	岩屋観音(同).....	三五〇
100	岩屋観音の濡佛(同).....	三五〇
101	伊寶石神社(同).....	三五二
102	東観音寺(同).....	三五二
103	牛と紫雲英の嫌ひな氏神(同).....	三五二
104	長興寺観音(同).....	三五二
105	城寶寺辨才天(同).....	三五三
106	今水寺の沈鐘(八名).....	三五四
107	今水寺の舊趾(同).....	三五四

一五、馬鹿噺・切支丹噺其他.....

1	うそこき新左(北設).....	三六六
2	新八つあの算盤(同).....	三六八
3	切支丹傳説(一宮).....	三六八
4	大目小目(知多).....	三七〇
5	編地(豊橋).....	三六六—三七三
6	正月十四日十五日に年を取る家(北設).....	三七一
7	村境を定めた話(同).....	三七二
8	村境をきめた話(同).....	三七二

愛知縣傳說集

一、山の話

尾張富士 (丹羽郡)



本山町五郎丸に、昔八百比丘尼が住んでゐた。或る夜尾張富士の祭神木花咲耶姫命が比丘尼の夢枕に立たれて、「お隣の本山山の峯よりも背が低いから残念でならぬ。どうかして背が高くなりたい。誰でもよい本山の峯の小石一つでも上げて背を高くしてくれ。どんな願でも叶へてやらせてお申されてその重しを立寄りなされた。比丘尼はこのことを里人に告げると、皆は非常に喜んで本山石を上げて色々祈願を致したところ、家内安全無病息災になつた。始めてお山へ石を上げたのが舊暦の六月朔日の未明であつたので、この日が石上げ祭りの行はれる日と定められたといふ。傳説の山は木々、或る神が駿河の富士山を作る爲、近江の土を兩手に持つて東に走る途中指の股からこぼれて出来たのだともいふ。

2 萬燈山と鉤萬燈 (幡豆郡)

連々起伏南走してゐる幡豆連山の西端に萬燈山(三和村)と呼ぶ山がある。高い山ではないが、西尾八面山と相對してゐる恰好のよい山で、其の麓は板倉勝重が幼時味噌摺小僧をして居たと云ふ禪宗の名刹長園寺があるのと、舊盆十四、十五の兩日に鉤萬燈と云つて百八の松火を點するのて有名である。此の萬燈の由來を里人は二様に傳へてゐる。その一説に昔淺井山に天台宗の巨刹があつた。此の寺は西三河同宗の中心道場で數多の僧や僧兵がゐた。當時此の寺と相對峙して常に宗教上の勢力争ひをしたのが、本郡豊坂村須美神社の裏山某寺を中心とする眞言宗の一宗團であつた。此の勢力争ひは年と共に烈しくなつて、遂に淺井、須美兩寺の僧俗數百人が萬燈山麓で鋒をとつて争つた。この時何れも鐘鼓を鳴らし貝を吹いて激しく戦ひ、多くの戦死者を出した。その死者を山頂に合葬して塚を營んだ。其の後此の法難殉死者の亡靈を慰める爲に萬燈を點するのであると云ひ、猶山麓貝吹の地名は此の時から起つたと。他の一説に依れば萬燈山も今は立木も小さくて禿げてゐる部分も少しはあるが、昔雜木や赤松がよく繁茂してゐた頃、此の山を棲家としてゐた一匹の大蛇があつた。此の大蛇が毎年秋の收穫季になると山麓の田畑に出ては作物を

荒して困るので、里人が占者に占つてもらつたら「此の大蛇を神に祀り毎年山頂に萬燈を點すれば大蛇の害が止む」と占つた。此時から萬燈を點して災害を免れて來たもので、若し此の行事を怠る時は必ず大蛇の害を受け凶年を見ると云ひ傳へてゐる。

3 花園山 (額田郡)

岩津町の花園山(現在の村積山)は三河富士とも云ふ。大寶年中、持統天皇三河へ行幸の砌、御登山遊ばされた。時しも百花咲き出で、艶を競ひ、爛熳として行幸を迎へ奉つた。帝深くその風光を賞し給うて、花園山と御命名になつたと。後世、花園山、花染山又は美人山とも稱へた。美人山麓の女は容貌の美を此の山に奪はれたので、此の里に美人は一人も無いと傳へてゐる。

4 京が峯 (額田郡)

幸田村大字坂崎の北部に聳ゆる京ヶ峯は、昔、日本武尊が御東征なされた際に御登山遊ばされ、山頂から遙かに大和の都を御望み遊ばされた所と傳へられてゐる。

5 信玄の金山 (北設楽郡)

上津具村から名倉村へ越す金掘峠に四五ヶ所、武田信玄が軍資金の缺乏を補ふために、金を採つたといふ古い坑道がのこつてゐて、これを信玄の金山といつてゐる。この時用ひたといふ金摺石といふ花崗岩の中央に穴を穿つた石が、附近の農家に二三、手洗石として使はれてゐる。

6 木山 (北設楽郡)

下津具村の木山のほつで村人が神樂歌を歌ひながら木を伐つてゐると、打ちこんだ鉋がどうしてもとれなくなつた。それから村人はどこの山へ行つても神樂歌は決して歌はなくなつたといふ。

7 御度の丸山 (北設楽郡)

岡村大字東蘭目の裏山御度の山の中の丸山には、その頂に一間四方位何も生えないで枯葉が積つてゐる所がある。老人は昔からこの山には主が棲んでゐるといふから、ここに棲んでゐたであらうといふ。夜この附近で何物かにおびやかされたものもある。山の持主はここに山の神を祀つてゐるが人々はそこへよりつかない。

8 祇神山 (寶飯郡)

蒲郡町と三谷と大塚村の境の祇神山は、その形似るとして三河富士の名があるが、天平年間、橘諸兄この麓にある時、一夜夢に白髪の老人現はれ「後の山は靈山なり。我を祀れ。」と告げた。諸兄この山に登り十匹の鹿山を駈けるを見る。そこで十鹿見山と名づけ一字を建てた。後世この前の海を通ふ船がよく難船したので、社殿の向をかへたらこのことがやんだといふ。

9 観音山 (寶飯郡)

八幡村大字財賀の観音山には金が埋めてあつて、その場所は「朝日さし夕日輝く冬木の根」であるといふと傳へられてゐる。

10 本宮山と石巻山 (寶飯郡・八名郡)

寶飯郡一宮村の本宮山と八名郡石巻村の石巻山とは高さを争つた。両方の山の神様がはかつて見たら同じ高さだったので、それからこの山へ登るには石を持って行くと軽々と上れるが、もし山の石をころがすと怪我をするといふ。

尙この附近に昔大男が住んでゐて、両方の山へ足をかけて小便をした。それが兩山の間を流れるその豊川だといふ。

11 本宮山と吉祥山の争 (寶飯郡・八名郡)

寶飯郡一宮村の本宮山と八名郡八名村の吉祥山とは豊川を挟んで高さを争つた。それだからこの山へは石を持って上ると願事がかなふといふ。

12 船着山 (八名郡)

船着村にある船着山は昔大水が出てこのあたり一面泥海になつた時、里人が船に乗つて難をさけ、此の山に船を乗り着けたによつてこの名がある。村名は山の名からとつたものである。

二、海・島・岬・濱等の話

1 お経をもらつた堤防の根石 (知多郡)

鬼崎村の大字西之口と蒲池との境の海岸の堤防はよく切れて困つた。これは何かの祟りであらうとて、南無妙法蓮華經を石に書きつけ、お経をもらつて其れを根石にして堤防を築いた所、それ以後は其の堤防は切れなくなつたといふ。

2 土左衛門と豊漁 (知多郡)

鬼崎村大字蒲池で、昔或漁夫の網へ土左衛門(溺死者)がはいつた。氣の毒に思つて懇ろに弔つたところ其の次の日から出る日もくも大漁続きであつた。これは海神のお助けであらうと爾來今でも土左衛門がはいると豊漁があるとて漁師一同で鄭重に弔ふことになつてゐる。

3 海荒の前兆 (知多郡)

知多郡では海龜が海岸へ上ると、海上の荒れる前兆だとして警戒する。又龜を捕へると酒を飲ませて海へ放ち、御祈禱して大荒れや災難の無いやうにする。

4 漁獵禁斷の鬼ヶ崎 (知多郡)

鬼崎村の鬼ヶ崎の海岸一帯は徳川時代には禁漁區であつた。従つて魚族多く、盜漁する者があつたので見張番を附けた。同村蒲池の水野氏の先祖が其の役を仰付かつてゐた。

或雨の夜、豪雨の中に簑笠に身を固め投網をうつてゐる者がある。番人が「誰か」とがめると其れは尾張公御微行の密漁であつた。水野氏は僻易して恐縮に及ぶと「水野、實直である。職務に忠實なるを嘉す。これより庄屋に取立てる」と申され、以來水野氏は帯刀御免の庄屋であつたと云ふ。

5 大津波 (知多郡)

豊濱町附近に昔大津波があつた。海岸に住んでゐた人々は現在の如く山の麓に移つたのだといふ。現に二町程沖に石倉と稱する土台石もあり、井戸の址だと云はれる所もあり、又俗に云ふ棚ヶ崎、目ヶ崎、海老ヶ島、松葉崎、西ヶ崎等は昔の地名だといはれてゐる。

6 雷岩 (知多郡)

豊濱町大字中洲の海岸に雷岩といふのがある。昔大雷雨があつて火柱の立つた所を調べてみたら、此の岩には雷様の大きな足跡があり、且爪の跡も残つてゐたといふ。

7 おりん島 (知多郡)

豊濱町大字須佐におりん島といふ島がある。昔須佐村におりんといふ老婆があつて漁獵をして居た。或日たこ捕りに出た所、珍しい大だこがおりんの船の中へ其の足を一本差込んで来たので早速切り取つて引上げた。翌日亦其の場所へ行くと又大だこが足を一本船べりへ差込んで来た。おりんは大喜びで切取つて引上げた。次の日も同じ様な事があつて、八日目に最後の足を切取らうとしたら、おりんは其のたこの爲に巻込まれて遂に餌食となつて仕舞つた。おりん島の名

と共に此の物語が今尙語り傳へられてゐる。

8 龍宮 (知多郡)

師崎町の羽豆岬の尖端の海中に、漁夫も恐れて舟を近けない所がある。龍宮と稱してゐる所で若し過つて鱸や鮎を觸れると其の儘引返して来て、神職にお祓をして頂いてから再び出かけることにしてゐる。

9 海幽霊の出る日 (知多郡)

師崎町では舊曆十二月晦日に船を出せば必ず船の周圍に海幽霊が現れる。其の時は柄杓を海中へ投込むと其の幽霊も消えて仕舞ふといふ。里人は十二月晦日と七月十五日の夜は船を出さないことにしてゐる。

10 龍宮の御神火 (知多郡)

篠島村では舊師走大晦日の深更に「龍宮神の火」と云ふ怪火が現れるといひ、この怪火が内海の

場合は内海の漁夫が大漁をし、外海の場合は外海の漁夫が大漁をする兆であるといふ。

11 東島と小磯島と榮造泣かせ (知多郡)

篠島村の屬島になつてゐる東島と小磯島とは昔は相續いてゐたもので、其の間は陥没したものだといふ。此の兩島の間は潮の流れが急である。昔榮造といふ漁師が此所まで船を漕いで來たが急流のため自由にならず、遂に泣いたといふので此所を「榮造泣かせ」と呼んでゐる。

12 不正の者を住ませない篠島 (知多郡)

篠島は古來伊勢の神官領であつたので不正の者をおかず、若し盗人をするとか之を渥美郡の西の濱へ流すことにしてゐた。昔一人の盲の子があつたが、他人の物を盗む癖があつたので、其の親は涙をのんで之を西の濱へ流したと傳へられてゐる。

13 神様御上陸の跡 (知多郡)

日間賀島村の八幡社の西海岸に人の足跡を印する岩礁がある。往古神様が御上陸になつた跡だ

14 南風ヶ崎と清正の枕石 (知多郡)

篠島村の南西海岸に南風ヶ崎といふ所がある。加藤清正が名古屋城を築く時篠島から澤山の石を持つて行かれたが、此所にある一つの大きな石はどうしても運び得ず、石に枕をかつた儘残しておいたといふ。現に清正の枕石といつて篠島名所の一つになつてゐる。

15 鯨濱 (知多郡)

篠島の西海岸に鯨濱といふ海邊がある。昔或人が富士山の頂上に登つた夢を見た。此の夢は好運の前兆と言傳へられてゐるので、翌朝喜びながら牛取(篠島の南海岸)の方を散歩した。途中不思議にも下駄の鼻緒が切れた。之は不吉の前兆と言傳へられてゐるので、心面白くなく鯨濱の方へ歩き出した。鯨濱では大賑をしてゐるので急いで行くと、大鯨を捕へて大騒ぎをしてゐる最中であつた。其の人は自分が捕へる鯨であつたのを惜しいことをしたと残念がつたといふ。それ以來この濱を鯨濱といふ。

16 往古の佐久島 (幡豆郡)

佐久島は往古佐久郡と云ひ佐久の國とも呼んだ。甚だ大なる所で西に川あり東に湖があつた。此の湖は伊良湖と云ひ湖中に二島があつて、一を姫島他を男島と云つた。佐久と日間賀の間に筑前寺島があつて佐久の處屬であつたが、中古日間賀の處屬となつた。古の佐久は南は志摩、「たつぼ」に續き、北にも亦大平野を控へてゐた。然るに崇神天皇の御宇に到り、此の地方に大地震が起つて、土地の人は數知れず溺死した。其の際に伊良湖は破れて伊勢の海と渥美の湖に續き、佐久は四圍の地が陥没して島になつたと島では云ひ傳へてゐる。

17 大島 (寶飯郡)

三谷町の大島は昔何處の村のものとも決つてゐなかつたので三谷、蒲郡、形原の三村で談合の結果、自分の村から各同時に舟を漕出し最初島についた村のものとするものが決つて、三村同時に舟を漕出たが、三谷村の船が最初についたので、これから大島は三谷村のものになつたといふ。この島は、昔龍神がこの島へ上り、寶玉を口中より現はしてゐたといふ。又二羽の鳥が棲んで

ゐるが、昔から増減がないといふ。島の西端に蛇穴があり、この中には大蛇がゐて、時々竹島の辨天へお使として海を渡るのを見かけたと傳へてゐる。

18 佛 島 (寶飯郡)

三谷町沖の佛島に昔石塔を積んだ船が通りかかり、何のわけもなく沈んでしまつたので、乗つてゐた兄弟の船頭は驚いて佛島に泳ぎつかうとすると、島の上から、蒼い顔をして白いものを身にまとつた數人の人が白袖でまねいてゐたので、命からがら濱邊に泳ぎかへつた。後この島のあたりを通りかかると島の上にはいつか沈んだ筈の石塔が建つてゐたといふ。

19 姫 島 (温美郡)

片濱沖にある姫島は、昔倭姫命がこの御島に渡られ御馬を駐められ、供人等は里に歸らんとしたが、御馬飛び立ちて歸らず、そこで供人等一旦歸つて後、片濱の濱邊に來り、毎日御馬に飼料を運び養つた。命は此の島に崩御遊ばされ、供奉した伊勢山田郷の人三人と小林の人二人は遂に片濱村の祖先となつたといはれて居る。

姫島は又飛馬島ともいふ。命は蠶の業を民に教へられたので、後人蠶の祖先としてその徳を仰ぎ、三河蠶種には必ず飛馬を記すといふ。

三、河・淵・泉・井・池等の話

1 高牟の古井 (名古屋市)

東區千種町字元古井の高牟神社の境内には往昔あちらこちらに清泉が湧出してゐた。靈驗があるので應神天皇御誕生の砌に遠く之を献じたとも云ひ傳へられてゐる。

2 濁り池 (愛知郡)

豊明村大字杵掛の峠下に濁り池といふ池がある。昔山賊熊坂長範が地藏様を袈裟斬りした時、その血刀をこの池で洗つた所、今迄よく澄んでゐた池の水が忽ち濁つてしまつて爾來もう澄まなくなつたといふ。(身替地藏參照)

3 安産水 (愛知郡)

豊明村大字杵掛の村社一之御前社の境内に安産の水又は子安清水といふ泉水が湧き出てゐる。昔三河の某城主の女が御奈良院の宮女をつとめ王子を姙み、部田村祐福寺に參禱の途中、此の清水を飲んで安全に王子を産み奉つたといふ傳説がある。如何なる早天にも此の水の涸れた事無く參拜して此の水を飲み安産を祈る産婦が多い。

4 機織池 (東春日井郡)

旭村大字新居に、機織池といふのがあつた。大昔のこと、年々池水が溢れて田畠を荒した。里人はそれを怪み惑うて、筮者に占はせた所、其の占者は「五月朔日に女が機織の具を持つて、此の池の邊りを過ぎ、その女を捕へて、池中に投じて後堤を築いたならば必ず水害を免れるであらう」と言つた。里人は其の日の來るのを待つて窺つてゐると、やはり年若い女が、機織具を携へてやつて來たので、直ぐに、其の女を池に投じてやがて堤を築いた。それから間もなくこの村は、水害の厄を免れたといふ。其れから彼の女の命日にその村中で、若し機織をする者があれば必ず暴死したので、里人たちは、大いに驚いて、これは彼の女の怨恨の故として其の地に一寺を建立して其の菩提を弔つた。それが道淨寺であつたが、何時の頃にか廢れ只機織池のみが残つて

ゐる。近い頃までこの村では五月朔日には機織ることを禁じてゐたといふ。

一八

✓ 5 鞍 が 淵 (東春日井郡)

坂下町大字内津字鞍骨に、鞍が淵といふのがある。人若し膳や椀が入用の時には、何人分かを申して、その淵にお祈りして、翌朝行けば前に申した数だけの膳や椀が、水面に浮んでゐた。ところが或る時、之れを借りた人が一人分不足のまゝ返してからは、もう斯様な現象はすっかり無くなつたといふ。里人達はこの淵は龍宮へ通じてゐるとも言つてゐる。

✓ 6 鹿 乗 が 淵 (東春日井郡)

高藏寺町の燈明山高藏寺の本尊薬師如來は、玉野川の深淵から白い鹿に乗つてお上りになつた靈像ださうである。又その淵から龍が燈明を獻じたのでそれが山號になつたといふ。今其の淵を鹿乗が淵と言ひ、其所に架した大橋を鹿乗橋と言つてゐる。

7 子 取 り 池 (東春日井郡)

篠木村大字下原にある子取池に、次のやうな傳説がある。今から四百餘年前、近くの大草城主に西尾道永といふ人があつた。この人は豪農であつたので附近には廣い田畑を所有してゐた。随つて田植には多くの人手がいるので、道永はそれを見廻ることにしてゐた。ある年のこと、幼児を籠の中に入れ、それを池の堤に置いて田を植ゑてゐた夫婦があつた。所が突然鷺が來て籠の中の子供をさらつて行つたが夫婦は全くそれを知らずに居た。然し道永はそれを見て知つてゐたが、是れを知らせれば皆が仕事を休むので殊更に黙つてゐたといふ。それからその池を子取り池といふやうになつたといふ。

✓ 8 蛇 が 淵 (東春日井郡)

昔品野町に平景伴といふ人があつて、大永年中に下田川蛇が淵で釣をして家に歸り、魚籠の蓋を取らうとすると、その中には、笹の葉が數葉のみあつた。次の日も次の日も同じ始末だつたので、景伴は、之れは妖怪の仕業であらうと大いに怒つて、第四日目には弓矢を用意して行つた。すると稚子岩と呼ぶ大岩を巻いて此方を見てゐる大蛇の姿を見たので、景伴は持つてゐた大弓で漸く射止めた。川は三日三晩の間血が流れ、蛇の骨は三年の間も其所に残つてゐたといふ。それ

から此の淵を蛇が淵又は蛇が洞と呼ぶやうになつた。景伴は半之丞とも、小牧五郎とも云つて、後篠木の庄に移り住んだといひ傳へてゐる。

○ 昔品野村大字中品野の禰宜某が、或る日蛇が洞邊りで釣をしたが、よく釣れ喜んで歸途についた。途中で魚を入れた籠の蓋を開いて見ると、魚は皆笹の葉と化してゐた。怪んで翌日更に釣に赴くと、川邊の岩上に見なれぬ一羽の白い鳩がゐた。これこそ自分を欺いた怪物の姿であらうと思つて、その場で射殺すと忽ちそれが大蛇と化し、その血が三日三晩流れて血の川をなした。依つて其の川を花川と呼んだが後、訛つて半田川と稱するやうになつたといふ。

9 竹藪の冷泉 (西春日井郡)

萩野村大字光音寺の西北端に竹藪がある。此處は日本武尊が蝦夷征伐の御砌に此の地をお通りになり、劍を御埋めになつた所だといふ、以來時々白装束の武士が来て來ると言ひ傳へてゐる。今は竹藪となつてゐるが其の下から湧出する泉は附近に例なき冷泉である。

10 蛇池 (西春日井郡)

山田村大字比良字野市場に蛇池といふのがある。昔から此の池に蛇が棲んでゐると云ひ傳へてゐる。織田眞記に、

「清洲の東に比良城あり佐々内藏助成政之に居る。城東に堤あり南北甚だ長し堤東渺茫葭茂生す。時に福徳の里人又左衛門といふ者あり。比良の郷より大野木村に往き、此の堤上をさまよふ。日暮れて雨甚だし。大蛇あり體は堤上に在り首は池に臨めるを見る。人聲を聞き首を廻らしたる面は鹿の如く、眼は星の如く、舌紅にして火の如し。又左衛門驚き悸れて逃れ去る。信長之を聞き。又左衛門を召して之を問ひ、翌日蛇を打たんと欲し比良及安食味鏡諸邑の農夫に命じ鋤鋤畚屨等を持ちて池を浚へしむ。數刻に及ぶも水猶涸れず。信長怒つて水底に入り蛇を見んと欲し刀を口に銜み直ち池中に没す。少らくして浮び出て曰く、蛇を見ずと、鵜右衛門といふ者善く水を洩ぐ、之をして水中に入らしむ、然れども亦蛇を見ず。信長清洲に還る。故に此池を名づけて蛇池といふ。」とある。

○ 11 鞍 が 淵 (丹羽郡)

池ノ村大字安樂寺と神尾との間に鞍が淵といふのがある。昔神尾の奥の山姥が、美しい螺鈿の鞍と化してこの淵に浮んでゐた。所が通りがけの人が其れを見て慾心を起すが最後、その人は手も足も離れくくの鬮籠の淺間しい姿とならねばならなかつた。里人はそれを非常に恐れてゐた。

✓ 12 城 井 戸 (丹羽郡)

扶桑村南山那の大門前に城井戸といふのがある。昔この邊に城があつたといふ。この井戸は小兒の夜泣き止めを祈願すると叶へて下さるといつてゐる。此の井戸には、長さ六尺餘の白蛇が二百尾位も棲んでゐて、夏の夜明け頃にはそれが井戸のまはりに出てゐるさうである。その井戸の中は未だ見た人がないといふ。

○ 13 草 の 井 (葉栗郡)

草井村に美しい井戸があつた。近くの本曾川の水がどんなに濁つても、この井戸は常に澄んで

ゐた。又この井水を呑むと諸病が癒えるので、里人は長壽の水として尊んだ。この井を草の井と稱して、後尾張三井の一に數へられたと言ふ。今草井の大善寺の地蔵様は、この草の井から掘出された靈像であると言ひ傳へてゐる。

14 鴨 ケ 池 (葉栗郡)

草井村鹿子島に鴨ヶ池といふのがある。今は地名になつてゐるが、かつては鴨の浮き棲む美しい池だつた。昔このあたりが水害のために極度に疲弊してゐた頃の話に、ある夏の日一人の婆さんが、草井の里へ米買ひにと、鴨ヶ池の側を横切らうとすると、池の蛙が婆さんのみすぼらしい姿を、「はだかだー」と笑つた。今度は婆さんが米を求めて歸つて來ると、「けでくく」と嘲つた。けでといふのは此の邊の方言で、間に合せ其場限りといふ意味である。婆さんはぶりぶりして家へ歸つたといふ。この他愛もない傳説の中に、鹿子島全民の、働けど樂にならぬくらしに對する怨嗟がこめられてあるといふ。

15 や ろ か 水 (葉栗郡)

草井村小淵の里は木曾川に近かつた。或る年の夏。降り続く雨に河の水は刻々に増して、今にも堤が切れさうになつた。小淵の里に住む一農夫が堤防に立つた時、濁水の流れと共に「やろかー」「やろかー」と聞えて来た。そこで農夫は業を煮やして、「よこさばよこせ」と叫んだ。さあ大變、暫くして鹽を打ちあげたやうな水は一時に堤防を缺潰して、恐しい濁水は田畑を呑んだ。其の後この里では、「やろかの水」を警戒する様になつたといふ。

16 血止めの井戸 (葉栗郡)

北方村の狐塚梶浦又三郎の舊宅に古井があつた。之れを血止めの井戸といふ。昔岐阜攻めの時武士が此處まで来て休憩し、この井戸で刀を洗つたと言ひ傳へてゐる。梶浦氏が家屋改築の時に其の井戸を埋めた。

17 姫取ヶ池 (葉栗郡)

北方村の青塚神社の北裏に、昔姫取ヶ池といふのがあつた。この池には妖怪がゐた。里人がこれを頼めば膳椀等何人前でも出して貸し與へてくれた。後或る一人がこれを借りたまゝ返さなかつたので、それからは借りることが出来なくなつたといふ。

18 藤五郎橋 (葉栗郡)

草井村の小杵の大堤防を横切つて忠兵衛猿尾へ出る畑中に一條の清川がある。其の小川を渡る四、五筋の畑道に石橋がかけてある。之は小杵の藤五郎といふ人が毎年勤行した淨財で村人の便利の爲にと懸けた橋で、誰言ふとなく藤五郎橋と言ふやうになつたといふ。

19 東淺井の池 (葉栗郡)

淺井村東淺井に昔池があつたが今から五六十年前にこの池が埋められることになつた。その時この池の主である、丈餘の鯉が同地の林平さんの枕上に立つて「自分の棲んでゐた池がいよ／＼つぶされることになつた。今後はあなたの池において下さい」と丁寧に頼んだ。それから暫く経て雨の降る日に見た事もない異様な風をした男が豆紋りの手拭をかぶつて通つた。村人が怪しんで其の後をつけて行くと東淺井の池の端まで来たとき急に火の玉になつて池の中に飛び込んださうである。今でも淺井の池には主がゐると言ひ傳へてゐる。

又一説に淺井の池の主は大蛇だとも言つてゐる。今から四十年程前、或る人が林の中を通つて高山に來たとき水田の中に周り尺餘の松の大木が倒れてゐるので不思議に思つてよく見ると、大蛇であつたので驚いて逃げ歸つたが、間もなく熱にうかされて人心地はなかつたといふ。昭和三年の頃池の中で物すごい唸り聲が時々起つた。人々は「池の中の大蛇が腹が減るのでうめくのだ」と信じ、その噂さは忽ち四方に傳つて、其の唸り聲を聞きに多數の人々が來て大へんな噪ぎをした。

又百年程前、村に源兵衛といふ人があつた。この人が淺井の池へ毎日々々釣に行つた。或る日のこと源兵衛さんが釣をしてゐると池の中から一匹の蜘蛛が出て來た。じつと見てゐると源兵衛さんの足にくるくると絲を巻いて池の中へ入つた。こんな事が一週間も續いたので源兵衛さんは蜘蛛に向つて「お前は俺の足に絲を巻いては行く。其れが今日でもう七日になる。お前はたゞの蜘蛛ではあるまい。性あるものならば形を現せ、現はさぬと殺してしまふぞ」と言つて、其の蜘蛛を池の中へ逃してやつた。源兵衛さんが池の面をじつと見つめてゐると周り數丈もあらうと思は

れるすつぽんがぬつと現れた。見るからに數千年を経たらしく耳まで生えてゐた。源兵衛さんは「貴様はよくも蜘蛛に化けていたづらをしたな。今後の見せしめに耳を切つてやらう」と言つて片耳を切つてしまつた。それから數年を経てこの村の貝一さんがこの池の端に行くと池の中から片耳のない蛇の様な怪物が頭を出してじろりとらんだ。それからこの人は間もなく熱が出て死んでしまつたといふ。更に數年を経た或る夏のこと時之島の鬼十といふ人がこの池の近くの田に行くと稻が五本ばかり浮き上つて枯れてゐた。不思議に思つてよく見ると柳の大木が横たはつてゐた。するとその柳と思つたのは怪物で白い腹を見せてむづくと動き出した。それを見た鬼十さんは其れから間もなく發熱して死んだと言ふ。

20 川中の古杭（葉栗郡）

木曾川町大字黒田の黒田城址の西方の古川の中に周圍四尺程の古杭がある。これは黒田城のあつた當時の橋杭であるといふ。里人はこの杭を掘出せば病氣其他の災厄に罹ると言つて恐れてゐる。

21 白鷺の寶刀と日光川 (中島郡)

萩原町の小笠原家に父祖傳來の寶刀があつた。その名を白鷺といつた。或る夜一童子が現はれて「白鷺の名劍は世を忍ぶ家には不要なれば明日日光川へ投ぜよ。さすれば靈藥を授けん」と告げた。その通りにすると安養寺の裏まで流れて行くと忽ちその劍が水中に卷込まれると見るや一個の壺が浮上つて來た。其れから小笠原家の屋敷田畑には白鷺頭が咲いた。いつか不思議な童子の言つた事を思ひ出してそれを産後の婦人に服用させたら大へん効能があつた。水中から出た壺は今尙同家に秘藏されてゐるといふ。

22 笠取 沼 (中島郡)

萩原町西宮重に笠沼といふ所がある。昔この沼へ一人の獵師が鴨をうちにやつて來たが、葦原の中へ段々と深く踏みこんで遂に姿を没してしまつた。そしてあとには笠だけが残つてゐた。村人達は先日の獵師の死を憐んだ。そしてそれからこの沼を笠取沼といふやうになつたといふ。この沼には昔龜が棲んでゐた。沼を埋立てると必ず祟りがあつた。

23 片葉の蘆 (中島郡)

今伊勢村宮山の酒見神社の西に、昔神戸氏といふ豪家があつた。主人が京から若い僧を伴ひ歸つて、近くの某寺のお弟子にした。ところがこの若い僧が神戸氏の家に入中する中に、神戸家の姫君が懸想した。或る日、「今夜池の端の柳の影で待つてゐるが、萬一お出でがないと身投げをする。」との意味を紙片に認めて若僧に渡したが、その夜になつても若僧は戒律を守つて行かなかつた。そこで姫君は遂に池に身を投げて死んだ。若僧は翌日神戸家に出て夫れとなく挨拶を小さい白木の位牌を懐にして京へ向つて出立した。この僧は後に高僧になられたといふ。今は神戸氏も大寺もないが酒見神社の裏手の池には、今も尙水藻の中に長い髪の毛が浮いてゐるのをよく見るといふ。又その邊一帶の蘆は片葉になつてゐるといふ。これは姫の片思ひの執念が残つてゐるからだといふ。

24 蛭が池 (中島郡)

大和村大字刈安賀の城址の東一町程の所に小池があつて蓮を生じてゐる。昔刈安賀城主淺井田

宮丸が長島城中で謀殺された時、田宮丸の姫が悲みの餘りこの池に身を投げ魂魄となつて父の仇を報ぜようとした。それからこの池を中心として水蛭が多く農夫を苦しめた。村人達は姫の怨靈が水蛭と化したのだと云ひ傳へてゐる。

25 首池 (中島郡)

朝日村大字東加賀野井に加賀野井彌八といふ豪傑が住んでゐた。其の頃伊吹山に山賊が住んでゐて近所の村々を荒し廻つたが誰一人としてこれを平げる者は無かつた。彌八は義に勇んで賊を平げに單身伊吹山に向つた。そして酒宴の最中を見すまして賊の首をとつて歸つた。首を蓮池で洗つてからその池を首池といふやうになつた。山賊の執念が今尙残つて此の池に蛭が澤山住んでゐて人の生血を吸ふと言はれてゐる。

26 蛇池 (中島郡)

朝日村大字上祖父江に蛇池といふのがある。この池は昔乙姫様が住まれたと言ひ傳へ、小祠を建て、乙姫様を祀つた。

27 龍池 (中島郡)

朝日村大字上祖父江に龍池といふ池がある。昔この池の周圍に老松が茂り合つてゐたが一夜のうちその影を失つた。村人達は其の松こそ龍の精が變形したものであつたが、風を呼び雨を誘つて昇天したのだと言ひ傳へてゐる。

28 鍬柄池 (海部郡)

立田村大字森川の鍬柄池は、元龜元年小木江城合戦の時、城主織田信興戦死の後寄手本願寺一揆の農民等は兵器として用ひた鍬の柄を、此の池に投捨てたものといふ。

29 甲掛清水 (知多郡)

河和町大字豊丘字五寶に甲掛清水弘法の舊跡がある。今向きれいな泉が湧出してゐる。昔弘法大師當地に御巡錫あり、此所の泉水で甲掛をお洗ひになつたといふ。又大師は當地の人々が蛭のために困るを御覧になり、之を封ぜられたので此の泉水附近の田圃には蛭が居ないのだといふ。

30 血池 (知多郡)

野間村大御堂寺の血池は源義朝の首を洗つた池だといひ、國家に大事變ある時は前兆として水色が赤くなるといふ。今も正月七日には大御堂寺の僧侶により仁王經を讀經して國家鎮護の祈をなす。

31 戀の水神 (知多郡)

野間村大字奥田字中白澤(舊字知澤)に方三尺許の泉がある。如何なる大旱魃にも水の涸れたことがないといふ。傍に神祠があり戀の水神といふ。昔允恭天皇大和國城上郡三輪大神の神託により藤原仲奥といふ者を尾張國熱田神宮に遣はせ給ひ、神水の所在由來をお尋ねになつた。神司知らず乃て仲奥は神宮に祈願をこめ其の夢のお告に「熱田神宮以南拾里の所に一小祠あり其の傍より神水湧出す」とあつたのではるばる尋ねて當地に来て此の神水を得た。土地の人に地名を尋ねたが誰も知らぬといふので、仲奥は「知らぬ澤」と名付け「尾張なる野間の知らぬ澤踏み分けて君が戀し、水を汲む哉」と詠じたといふ。因て後人神水を戀の水と言ひ、神祠を戀の水神といふ

やうになつた。

後聖武天皇の皇后光明宮と申された時、赤帶下を患はれ玄昉僧正を遣はされて神水を求めさせられた。玄昉當地に来て「千早振る神の御跡は知らぬ澤の戀の井水をたづねてぞ汲む」と詠ず。歸つて此の神水を献じた所病は忽ち癒えたといふ。

現に此の神祠に祈願する者が多い。

32 粟たきの清水 (知多郡)

知多郡鬼崎村の八幡社へ徳川家康が戦争に負けて逃げて來た。追手が次第に迫つて來たので、とある大木の洞の中に隠れた。追手の一人は其の洞の中に入り遂に見付けた。家康はひそかに好條件を與へて見逃しを哀願した處、敵は承知し態と刀に蜘蛛の巣を巻き付けて出て仲間者に、木の中は蜘蛛の巣ばかりであつたと告げ、一同立去つた。

家康は早速附近の百姓家へ行つて食事を乞うたが其の家では、粟の飯を三楠山の麓から出る清水を汲んで来て炊いて饗應した。それから此の清水を粟たきの清水といふやうになつたといふ。

其後家康は當地の八幡社へ幾らかの田地を献上したが、三代家光の頃役人が調査に來た際、神

主が偽役人と思つて面會しなかつたので取上げられてしまつたといふ事である。

三四

33 北の池 (知多郡)

三和村大字矢田に北の池といふ大きい用水池がある。昔戸田八郎左衛門といふ殿様の召使に喜太郎といふ者があつた。馬屋勤めをしてゐたが役退きに當り殿様から何か望むことがあれば申せと云はれた。喜太郎は「當村は良田多きに水利不排水不足なれば大なる池を築かれたし」と願つた。早速許されて造られたのが今の北の池だといふ。初め喜太郎池と呼んでゐたのを、なまつて北の池といふやうになつたといふ。

34 蘆澤の井 (知多郡)

大府町大字藤原景清の屋敷址と傳へられてゐる傍に蘆澤の井がある。景清の潜居中眼病を煩ひ此の井の水で全治したといひ、今でも此の井の水をつければ眼病が癒るといふ。

(社と寺の部藤原景清の観音經參照)

35 眞古酌井 (知多郡)

龜崎町大字有脇字眞古酌に藥師堂がある。昔此の附近に大楠あり、その根元から湧出する水は皮膚病其他に靈驗あらたかで、遠近より藥用、浴用に汲みに來る者多く、樽に詰めて名古屋岐阜遠くは江戸方面までも輸送されたといふ。俚語にも

寺は建つゝ眞古酌はやる

殊に新田つけるげな

と語はれてゐた。

36 生路井 (知多郡)

東浦村大字生路にある井は、昔日本武尊御東征のみぎり此の地をお通りになり、渴をお感じ遊ばされ、弓で巖をお突きになつた所、忽ち清水湧き出でお召上りになつた所といふ。此の井を生路井といひ若し汚穢の者が之を汲むと俄かにその水が濁つたと傳へらる。



37 大 日 池 (知多郡)

武豊町の大日池は、今の大日堂に安置する大日如來の尊像を拾ひ上げた池だといふ。

38 お城下の主 (豊橋市)

歩兵第十八聯隊裏で豊川が折れてゐる所、吉田城址のその崖下はお城下と呼ばれてゐるが、この底には片身をそがれた大鱧が主になつてゐるといふ。毎夏この附近で溺れるものが多いが、これはこの片身の鱧の怨恨であるといふ。

39 吉田大橋 (豊橋市)

船町と下地町の間豊川に架けられた豊橋(橋名)は明治初年以前は吉田大橋と呼ばれ一萬石の所領をもつて領主に管理させてゐたといふ。或時領主松平伊豆守が橋の反り加減について將軍に伺つた時、扇を開いて反り加減の雛形を見せ、次第に扇を一聞宛パチリパチリと開いて漸次反りを高くして行つて御意を得たといふ。

40 大池の主 (豊橋市)

向山町の東方にある大池は小笠原侯の時代に水を城下の濠中に引くために造られたものであるといはれる。この池の主は雌の大蛇で、これがこの池畔に捨子をした男の嫁となつて赤子を育ててゐたが、正體を見破られたので再び池の底へ沈んだといふ。これでこの池を嫁が池ともいふ。又一説には池の主は馬の首だともいふ。

41 墓 池 (碧海郡)

櫻井村大字寺領の墓池は八歩程の小池である。昔此の邊にあつた大寺院が兵火の爲に炎上した。その時寺僧は炎々たる火中で焼け死んでしまつた。以來此の僧の靈魂が墓となつて、永く此の池に留まつて居るのであると傳へてゐる。尙この土地を無暗に耕すと病に罹かるといふ。

42 息継ぎの井戸 (碧海郡)

矢作町大字字頭に息継ぎの井戸と呼ぶ古井戸がある。昔徳川家康公が敗軍の時月見坂を下り、

此處の井戸水で息を継ぎ更に粟寺(今の東柵塚)を過ぎて大樹寺に逃れたとのことで、この井戸を息継ぎの井戸と呼ぶのはこれ以来のことであるといふ。

43 龍宮井 (碧海郡)

櫻井村大字野寺、本證寺境内の蓮濠に龍宮井の址と云はれる深い所がある。慶圓上人が今の幡豆郡醍醐山麓の「龍宮」から野寺へ移られてからのことであるが、本證寺に來客ある時は此の客に馳走の爲、井戸に客何人前の用意を望むとの事を認めて入れると、直ちに膳部が出來上つて彼の龍宮から送り届けられたさうである。此の井戸は龍宮に通じてゐたものだと言はれる。現に本證寺に残つてゐる龍椀龍錢は此の時の物であるといふ。

44 櫻井戸 (碧海郡)

櫻井村大字下谷に櫻井戸と呼ぶ古井戸がある。昔厩戸太子が當地へ御立寄の砌、櫻樹の下を御杖で御突き遊ばされたら忽ち清水が湧き出たと傳へられてゐる。

45 小園池の主 (幡豆郡)

三和村の碧海幡豆入交の地に小園池と云ふ池があつた。以前は相當大きな池であつたが、次第に埋め立てられて御國神社の附近一部を埋め残した。その一部も此の冬は埋め立てやうと云ふ相談が持ち出された當時の事である。小園池畔に小さな小屋を結んでゐた其の日暮しの老人が、雨の烈しく降る夜半ふと物音に眼を覺ますと、誰か破れ戸を叩いて呼ぶ者がある。戸を開けて見ると立派な武士が立つてゐた。老人は早速場ぜまな吾が家に入れ來意を尋ねると、武士は「某は此の小園池に棲む池の主であるが、近來埋め立てられて住所も不自由となり加ふるに此の冬は大方埋め立てられる由村方にも相談相纏まりたる様子、名残惜しくも額田郡岩堀池に移りたきも生憎近來の埋め立に通路を塞がれて難澁致して居る。汝御苦勞なれど明早朝某を廣田川に放ち呉れよ」と言ひ置いて立ち去つた。老人が明朝早く池を一廻すると、鰻程もある鱒が鬼蓮の葉に半身を乗り出してゐるのを見つけた。早速桶に入れて廣田川に放つと、今まで小さな魚であつた鱒が俄に數尺の大魚となつて漲り流れてゐる廣田川の濁流を攪き亂して遡行してしまつた。其の夜亦老人の家へ昨夜の武士が訪ねて來て、今日の謝禮だからと一つの樽を呉れ「お前は此の樽を用

ひて酒を商へ。此の樽に半分酒を購ひ、半分は廣田川の水を混じて賣れば必ず繁昌する」と言つて立ち去つた。老人は其の通り酒を商つたが、次第に有福の身となつたと傳へられる。

46 無縁者の井戸 (額田郡)

豊富村大字檜山かしやまに無縁者の井戸と云ふ古井戸がある。昔飢饉の時餓死する者が非常に多かつたので、此の井戸に投げ入れたのであると云ふ。

47 釣鐘淵 (額田郡)

形埜村大字櫻形さくらがたの阿彌陀寺から川沿ひに數町上ると一の深淵がある。川岸に大岩屹立し、附近は鬱蒼たる深林である。昔盜賊が阿彌陀寺の梵鐘を盗み、此處にさしかゝつた所俄かに鐘の重量が増して一步も歩けなくなつた。彼の盜賊も如何ともなし得ず、鐘を淵に遺棄して逃走したと。以後此の淵に投身する者が急に多くなつたので占つてみると、之は鐘が水底で仰向きに沈んでゐるが爲と判明した。早速屈強な若者數十人が苦心の結果、遂に鐘を水底に俯する事に成功した。果して以來入水者はばつたり跡を絶つた。其後岸に峭立する岩上で、奇怪な老婆が絲を紡いで居

るのを見た者が有るといふ。若し此の老婆の姿を見る時は、病になるか又は家が滅亡すると云ひ傳へ里人は今でも恐ろしがつてゐる。

48 椀貸池 (西加茂郡)

保見村大字八草やちぐさにある富瀬池は又の名を椀貸池といふ。傳説によれば昔八草のみならず近郷の者でも祭祀や婚禮等の時若し椀が不足したならば、其の理由と數とを書いて池に投じて頼めば翌朝必ずその數だけ浮び上つて居たとのことである。其の後山口村やまぐちの某家に婚禮のあつた時、椀が不足したから借りるやうに依頼して置いた。翌朝その數だけ浮び上つてゐたので悦んで之を背負つて歸宅したが、途中で誤つて二の椀(汁椀)を一箇破損した。然し別に詫びることもなく、秘して不足のまま返済した。それ以後は池中から何處ともなく椀を數へる聲ばかりが聞えて、決して椀を貸さなかつたといふ。因にこの椀を誤つて破損した坂は八草から山口に越す所で、今以て此の坂を二の椀坂といふ。

49 梅ヶ井淵 (北設楽郡)

河・淵・泉・井・池等の話

段嶺村大字田峯にある梅ヶ井淵は、昔田峯城が落ちた時、梅ヶ井といふ姫が身を投じた所だと
す。

又一説に、或夜城主の夢枕に阿彌陀如來が現れ、淵に沈んでゐることを告げたので、翌朝その
淵より尊像を引上げ、一字を建て安置した。これで夢ヶ淵と呼んでゐたが、いつか梅ヶ井淵とか
はつたともいふ。

50 田峯の鮎(北設楽郡)

段嶺村大字田峯には昔城があつた。城主が城下まで鮎を上らせようとして、寒狭川の二の瀧を
壊かんとしたが、或夜龍神が夢枕に現はれ「田峯に城があるかぎり鮎を上らせる」と告げたので、
瀧を壊くことをやめた。それから田峯の川にも鮎が上るやうになつた。そのとき築をかけたとい
ふ所を今も築瀨と呼んでゐる。

51 くらがへ淵(北設楽郡)

名倉村大字大名倉の發電所の下にくらがへ淵と呼ばれる淵がある。昔大名倉の馬喰某が田口か

らの歸途ここにかかる、馬の鞍が荷をつけたまゝひつくり返つたので、付け直さうと困つてゐ
た。そこへ美女が現はれ「私がつけて上げやう」と馬を河原へ引いて行くので、馬喰は驚いて持
つてゐた針と帛紗を馬の背中にあてがふと、美女は一塊の固となつて淵中へ飛び込んでしまつた
とす。

52 椀かせ淵(北設楽郡)

下津具村中之澤の某が仕事を終えたので馬を川へ洗ひに行くと、河から河童が飛出して来て馬
の尾に喰ひつき離れなかつた。仕方なく家まで馬を牽いて歸へつた。それでも未だはなれないの
で怒つて打ち殺さうとした。河童は驚ろいて、馬から離れ「命を助けて下されば、椀を貸します」
といつてもとの淵へもぐりこんだ。これから村人は椀の入用の時はこの淵で借りて居たが、或時
一つ壊しかへさなかつたので、これから貸してくれなくなつた。そこを椀かせ淵といふ。

53 びわ淵(北設楽郡)

振草村大字古戸の川合から下津具へ出る山道を、昔七人の盲の旅人が来て、「さんど」まで来る

と道が別れてゐたので困つてゐた。其所へ來合はせた津具の人が、相手が盲人だったので惡戯に水無山の山道の方を教へた。その道がつきるびわ淵にまで來た盲人は、みなこの淵にはまつて死んでしまつた。それから後この淵に立つと何處からともなく悲しい聲が聞えて來たといふ。村人はこれをあはれんで今でもお祭をしてゐる。

54 青 淵 (北設樂郡)

上津具村、津具川古町の裏に青淵とて深い淵がある。そこには廻り尺餘の青大將が棲むといふ。昔津具で牛程の大きさのある金の鑛石を見つけ、前祝にと酒宴を張つたが、俄に大雨となり、その鑛石はこの淵へ沈んでしまつた。然しその後池の主を恐れてとり出すものがないといふ。

55 機 織 淵 (北設樂郡)

上津具村金龍寺の下に機織淵といふ淵があるが、ここに立つと機を織る音が聞えて來たのでその名があるといふ。

56 葛淵の大蛇 (北設樂郡)

豊根村大字坂字猪古里の葛淵には昔雄の大蛇が居て、この淵は字日余澤の箱淵と字川字連の鼓ヶ淵へ通じて居り、夜になると雌の大蛇を慕つてこの穴を通つたといふ。今でもこの淵へ石を投げ入れると大蛇の怒に觸れて雨を催すといふ。

57 機 織 淵 (北設樂郡)

豊根村大字下黒川字寺平に機織淵といふ淵がある。昔お姫様がこの淵のそばで機を織つてゐた。そしてその傍の橋を渡る人が櫛を持つてゐるとその齒が一枚づつ缺けたといふ。今姫が腰掛けたといふ岩が残つてゐる。

58 ト ノ 淵 (北設樂郡)

豊根村大字上黒川字川合のトノ淵にはもと池大明神が祀つてあつたが、今は川合の村中に移した。この池は昔は大へん大きかつたさうで、トノ淵だけはいくら大水が出て池一面砂をかぶつて

も淵がうまらないので、村人はここに主がすんでゐるといふ。

59 御池様 (北設楽郡)

豊根村大字古真立字曾川に、大入川の岸に岩に囲まれた深い淵があり、村人はお池様と呼んで崇めてゐる。そこはその地の尾山神社の奥の院といはれた處であるといふが、このお池の主は大蛇であるともいひ、この地域を汚すと大きな祟りがあるといふ。明治の初頃まではここで雨乞をした。その頃晴天つづきの一日、池の水が眞黄に濁つたことがあつたので、祟りを恐れて村人は春秋の彼岸にお祭をしてゐる。この池についていろいろな言傳へがある。

- 一、よごれた足をこの池で洗はうとしたら足に創を受けた。
- 一、山から出した木材を池の傍に積み重ねておいたら、一夜のうちに黒焦げになつた。
- 一、道路工事の人夫が村人の注意をきかず、汚れた草鞋のまゝ附近の工事にかかる、腰がつばつて来て動けなくなつた。驚いて神域を汚した罪をわびて、新しい草鞋で仕事を始めたら、元氣よく動ける様になつた。
- 一、池の傍を通りすがりに、小蛇をまたいだ村人が、歸宅してから、先の蛇が氣になり、それ

が大蛇の化身に思へて遂に病死した。

- 一、病氣をこの池に祈ると癒る。

60 お椀淵 (北設楽郡)

武節村大字御所貝津字笹平に、納庫川に注ぐ小川の中程にお椀淵といふ淵がある。村人は慶事弔事の時、お椀を何人前借りたいとこの淵に願つて、翌朝行つて見ると、そろつてあつた。或時ここで椀を借りた村人の一人が用済みになつてもすぐ返さず、後れて返したので、それからは決して貸してくれなくなつた。

61 チンチン瀧 (北設楽郡)

武節村大字御所貝津字笹平にチンチン瀧と呼ばれる瀧がある。これは長雨がつづいて、水が落ちる時、風鈴の如くチンチンと静かな音がするのでその名があるといふ。又一説には昔武士が追はれて此處まで来たが、逃れることが出来ず、この瀧口で自刃した。その血が瀧となつて数日流れてゐたので血の瀧といつてゐたが、後チンチン瀧とかはつたともいふ。

62 井の淵 (北設楽郡)

稻橋村大字稻橋字大井平の道下、名倉川に井の淵といふ淵がある。ここは今から二百年程前の卯の年に観音の石像が涌き出たので、村人が河原の大石上に安置し、涌き出た日を祭日として信仰してゐた。その観音は今同村の瑞龍寺山門傍に安置してある。

63 お姫井戸 (北設楽郡)

武節村の中村にお姫井戸とて、武節城山城主菅沼某が亡ぼされた時、そのお姫様が身を投げたといふ井戸がある。この井戸は蟲齒の時木綿針に糸をつけてつるしておくといふと直ぐ治るとて今も井戸の中に多くの針が下がつてゐる。

64 古井戸 (北設楽郡)

稻橋村大字押山の塚田某の前の古井戸は源氏の家來が逃げて来て水を呑んだ井戸で、不淨な婦人が汲みに行くと、水が急に濁るといふ。

65 お瀧 (北設楽郡)

武節村大字川手、名倉川が矢矧川にそゞ所にお瀧と村人に崇められる瀧があり、傍に不動明王がお祀りしてある。昔この瀧には大蛇が住んでゐて、川を十餘町遡る萬野に血穴といふ岩窟があり、大蛇はこの岩窟で冬ごもりをするので、大蛇の通つた跡は途中の叢が右左に分れてゐるさうだ。今から八十年程前の卯の年の洪水にお瀧が土砂で埋まつてから、住み場を失つて大蛇は何處かへ行つてしまつたといふ。今は瀧壺は又もとの様に深くなつてゐる。

この土地で人よせがあつて、膳部の入用な時には、程近い大慈院の和尚に膳部の入用なおもむきを話すと、和尚は紙に認めて、上流からお瀧に流しこむ。するとお瀧の淵に求める膳椀が浮び出たといふ。

66 入道淵 (北設楽郡)

武節村大字小田木に入道淵といふ淵がある。昔この村で正月に門松を立てると、入道小僧が淵から出て来て「ヤイ門松を立てんなよ」と叫び歩いたので小田木では門松を立てなくなつた。

今はこの風もすたれて立てるやうになつたが、淵の附近では今でも立てない。

五〇

67 よばり淵 (北設楽郡)

名倉村を流れる名倉川の上流石原瀬川の上より淵は昔は深い淵だつた。そしてこの淵には主が棲んでゐて膳椀を貸してくれた。村に事があつて膳椀が入用な時には、この淵に行つて主にたのむと水面に浮いて来た。用がすんだ時はこの淵に浮べると渦巻が起つて水中に没してしまつた。又この淵には大蔵寺の寶の釜が沈んでゐたが、いつか下流の川手の瀧壺に移つた。それはこの淵底と川手の瀧壺とは洞穴が通じてゐるさうだ。今でも川手の瀧壺に行つて深夜耳を澄すと川底から「毎日米の磨汁を三年つづけてよばり淵へ流してくれればよばり淵へ歸ることが出来るになあ」と訴へるといふ。

又この淵で漁つた魚は家へ持つてかへると木の葉にかはつてゐるさうだ。

68 和倉ヶ淵 (北設楽郡)

名倉村大字東納庫字湯谷に和倉ヶ淵といふ深い淵がある。昔ここに大蛇が居て村人の乞ふにま

かせて膳椀を貸してくれたが、村人の一人過つて椀の一つを缺かしたまゝ黙つて返したので、大蛇の怒にふれ、それからは決して貸してくれなくなつたといふ。

69 血澤 (北設楽郡)

名倉村大字東納庫字猪之澤から八橋に通ずる道の傍、字中道の杉林の中から湧出る小澤を血澤といふ。昔このあたりで大激戦があり、死屍の山を築き、血汐が流れて河をなしたのでその名がついたといふ。

又一説に猪之澤ももと血澤といつてゐた由。

70 座頭岩と座頭淵 (北設楽郡)

名倉村大字東納庫字寺屋敷、湯谷川の上流、段戸山に至る道の下に座頭岩、座頭淵がある。昔一人の盲がこのあたりで道に迷ひ、村人に尋ねたが、その村人が心のよくない人だつたのでわざと険しい道を教へた。盲は教へられたまゝを行つて山道に迷ひこの岩まで来たが、進むにも退くにも道がない。遂にこの淵に身を投げて死んだ。それからこの名がついた。

71 蝦 墓 淵 (北設楽郡)

振草村大字神田、鞍掛山の西麓に蝦墓淵といふ淵がある。昔ここに居た大蛇何か大きな物を呑んで苦しんでゐるところを通り會した娘に助けられたので「われはこの淵の主である。如何な願事もききとどけるから、今日の事を他言するな」と、娘が家に歸つたところ、顔色が蒼いので家人にとがめられ遂に包み切れず一切を語つた。娘は間もなく死んでしまつたといふ。

72 双 子 淵 (北設楽郡)

振草村大字神田に双子淵とて昔、この附近の寺の尼僧が不倫の子を宿し双子を産み、恥ぢてその子を投じたといふ淵がある。

73 女郎淵と辨天淵 (北設楽郡)

振草村大字神田を流れる神田川に女郎淵、辨天淵と呼ばれる淵がある。天正三年、武田勝頼が家康信長に追はれ逃れた時、勝頼の伯父望月某も園村大字御園まで逃れ土民に殺された。その室

は主人に後れ海老より馬を雇ひ佛坂を越え神田に入つたが、金を多く持つ事を知られた土民に殺され、神田川の淵に投ぜられた。ここを女郎淵といふ。又その時腕が川下に流れついた所に祟事があつたので、里人、かの女郎の祟なりと辨天を祀る。そこを辨天淵といふ。

74 な り 淵 (北設楽郡)

振草村大字下栗代字底瀬地先の振草川になり淵といふ淵がある。この淵は遠雷の如き音がする時は天氣がよく、鳴らない時は雨が降ると言ひ傳へられてゐる。

75 同道のかま (北設楽郡)

振草村大字上栗代字同道の振草川に同道のかまといふ淵がある。この淵は大字小林の膳棚瀧に通じてゐて、入用の膳の敷を紙に書いて投げ入れると淵の主が膳を貸してくれたさうだ。

76 膳 棚 淵 (北設楽郡)

振草村大字小林の振草川に膳棚瀧といふ瀧がある。この瀧は昔、村人膳棚が入用な時、白紙に

認めて瀧壺中に投げ入れると、必要なだけ膳椀が浮んできた。使用したらすぐその瀧へかへしたが、村人の一人一個を破損し、代りの品を交へて返したので、それから浮ばなくなつたといふ。

77 オホトビ淵 (北設楽郡)

振草村川合に鴨山川にそうてオホトビ淵といふ所がある。昔武士が對岸の岩に飛びうつらうとし過つて足をすべらして轉び、運悪く腰の刀が抜けて腹につきささつて死んださうだ。それでその名がついたといふ。

78 から池 (北設楽郡)

本郷町大字本郷、大森の腰、上小田にから池がある。この池の主は蟹で、大きな姿を時々現はし人々を驚かしたさうで、強い人がそれを退治すると針を池に投げこむと不思議にも水がすんすん減つてなくなり、蟹は穴をあけて何處かへ逃げて行つてしまつたさうな。

79 葛の淵 (北設楽郡)

下川村金紫の南で振草川が瀧となり、その下が葛の淵となる。この淵は龍宮へ續いてゐるといはれる程深い。この淵の北三町にある長養院で膳椀が入用の時には、住職が膳椀何人前入用と書いて淵に投げ入れると、忽ちその品々が浮き上つたといふ。或時過つて膳椀の一部を破損したまま淵に返したので、それから龍神の怒にふれ貸してくれないやうになつたといふ。

81 櫃淵 (北設楽郡)

園村大字足込字吐原に櫃淵とて深い淵がある。この淵と大字東蘭目のアヅカリ淵とは續いてゐて蛇神が棲むといふ。あるときおはんといふ女がこの淵へ馬のくつを落し氣にやんで死んだ。それからこの淵へ不潔物を入れることを忌んでゐる。又この川へ材木を流す時過つてこの淵へ流し込むと黒く焼けたやうになるといふ。

82 預り淵 (北設楽郡)

園村大字東蘭目の振草川に預り瀧、その下に預り淵といふ淵がある。この岩の上に淵の主として水神様をお祀りしてある。この瀧を材木を流す時は必ず神様に神酒を捧げてお祀りをする。昔

ある横着なヒョー(材木を流す人)がお祀をせず材木を瀧から流した。ところが一本も淵に浮き上らない。恐れて次の日神酒を水神様に供へておわびをしたら材木は皆浮き上つたが、一本のこらず黒焦げになつてゐたといふ。材木を一晩預かつた淵といふので、預り淵の名がついたといふ。

83 血の澤 (北設楽郡)

園村大字西蘭目の小田敷に血の澤といふ小澤がある。ここは昔武士が血刀を洗つた所で、その後毎日三度この澤へ血が流れたのでこの名があるといふ。

84 牛の龍 (賣飯郡)

一宮村東上字瀧にある常龍瀧一名黄牛瀧は俗に牛の瀧と呼ばれる雄瀧で、之れより二間程下つて雌瀧がありここは深い淵になつてゐる。

享保年中のこと東上の六左衛門が何時ものやうに雌瀧の壺に潜つて魚を捕へてゐると、水が逆流して淵の中から黄牛が飛び出し六左衛門に對つて來たので驚いて家へ逃げ歸つた。それから三日目に謠言など言ひながら死んでしまつたといふ。

85 清水弘法 (賣飯郡)

牛久保町大字下長山宮下にある清水弘法は、昔弘法大師がこの地に來り御杖を立てたところに清水が湧き出たところで、この水が流れて弘法川となつたといふ。

86 葵が池 (賣飯郡)

小坂井町大字伊奈の伊奈城趾東北二町程の田の中に中江川に通じた數坪の小池がある。この池を葵ヶ池又花ヶ池とも言つて、昔城主の産湯の水を汲んだ池だといふ。

享祿二年徳川清康、吉田城、田原城を攻め東三河を平げ伊奈に凱旋した時、城主本多正忠は迎へ入れ祝宴を張つた。その時花ヶ池の三葉の葵を藉いて肴を献じた。清康喜び「葵は正忠の家紋なり。今度の戦正忠の助力あり、大勝せり。」とてそれより三葉葵を家紋と定められたといふ。

87 權現の池 (賣飯郡)

前芝村大字日色野にある權現の池は、昔熊野から神々が船で着かれたところといふ。

88 いづみ澤 (寶飯郡)

八幡村大字平尾字「いづみ」のいづみ澤に昔は酒が沸いてゐて、村人がそれをのんでは晩の樂としてゐたが、或人が徳利を持つて行つて汲んでから酒が沸かなくなつたといふ。

89 流霞清水 (寶飯郡)

國府町大字國府字流霞には昔三つの泉があつたといふ。今泉畔に石の祠があるが、この清水は建久年中源頼朝上洛の際、茶を汲んだところと傳へられてゐる。

90 鞘ヶ淵 (寶飯郡)

蒲郡町大字水竹字大坪天神社南に鞘ヶ淵といふ所がある。天正年間、清田山から東海道に通ずる中路の椿澤に大蛇が棲んでゐて通行人を悩ましてゐたが、牧野九郎といふ武士が之を退治した。時に暴風雨となり九郎所持の鞘が流れてこの淵についた。それから鞘ヶ淵とも九郎三ヶ淵ともいふ。

91 熊ヶ池の田螺 (寶飯郡)

蒲郡町大字神ノ郷字城山にある熊ヶ池の田螺は皆口紅をさしてゐる。それは永祿五年神ノ郷城落城の時、姫この池に身を投じて死んだからだといふ。

92 硯川 (寶飯郡)

三谷町正眼寺の西を流れる小川を硯川といふ。これは家康公が駿河へお立ちの時この川の水を硯に入れて用ひられたによつてその名があるといふ。

93 錫杖井戸 (寶飯郡)

豊川町大字豊川の徳城寺に錫杖井戸といふのがある。それは弘法大師この地に巡錫の際、水を望まれたので寺主遠方まで水を取りに行き大師に献じたので、大師は水に不自由の里と知り、「この地を穿ち水を得べし」と錫杖で指し示された。その地を掘ると果して冷水涌出した。今に到るも水を絶たない。

94 三河三水鑪水 (寶飯郡)

一宮村大字大木字鑪水の西漸寺東に三河三水鑪水の石標がある。この地は昔井水なく村人が困つてゐたところへ弘法大師が來られ、御手の杖で地を打ち突くとそこから鑪泉が迸り出たといふ。大師は西漸寺を開き立ち去られたが、それから人呼んで弘法の水、鑪水といった。残された櫻の御杖はやがて芽ぐんで花が咲いたが、倒にさされたので人は倒櫻とよんだ。

三河三水とは外に八名井の今水、稻木の吉水をいふ。

95 貝鞍の淵 (八名郡)

八名村大字一鉢田の貝鞍の淵は龍宮へ續いてゐるといふ。昔村人が膳椀が入用の時は紙に書いて淵の主に頼むと必ず浮び上つた。或時某が誤つて椀を破損しそのまゝ返したので其後はいくら頼んでも浮かばなくなつたといふ。海倉淵とも書く。

96 鐘が淵 (八名郡)

八名村大字庭野腕拔山の下字原川の鐘が淵は、昔腕拔山から大鐘が落ち埋まつた所といふ。今は小川が流れてゐる。

97 八ッ井戸 (八名郡)

八名村大字八名井には大井戸、小井戸、兒井戸、岩井戸、藤井戸、柳井戸、龜井戸、櫻井戸と呼ばれる八つの古井戸が散在してゐる。この井戸は昔弘法大師が巡錫して來られ、この地の吉祥山中腹の今水に今水寺を創められた頃、旱天が續いて里人が飲水に大いに難儀をしてゐたので、大師は里に下られこの八つ井戸を掘つて里人の苦難を救はれた。

今はこの井戸の湮滅を懼れ里人大師の座像を建て石柱に井戸の名を刻む。春秋の彼岸には八ッ井戸を順拜するものが多い。

四、治水傳説其の他

1 十五の森 (東春日井郡)

鳥居松村大字松河戸に十五の森といふのがあつた。この地は常に冷泉が湧出で、稲作の被害に
なやまされてゐた。それで里人達は神佛に祈つたが更に其の甲斐がなかつた。或る日のこと、偶
偶陰陽師がこの村を過ぎて、若し齡十五の女を生きたながら冷泉下に埋めるならば、必ず厄を免れ
ようと言ひすて、立去つた。そこで里人達は一村の安危のかゝれることとて、里中に十五の女を
求めて三人を得たが、遂に矢野氏の女に白羽の矢が立つた。一村の爲とて親子も承諾した。そこ
で日を定めてその女を長持に入れて冷泉の地深く埋めた。それから三日を経て、不思議にも其の
冷泉が絶え、やがて里人達は耕田の豊穰を喜んだ。後村人はこの尊い犠牲の爲に、同地の観音寺
に薬師如來を祀つて少女の冥福を祈つた。毎年十月八日を如來の命日として供養を怠らなかつた。

2 小田井人足 (西春日井郡)

西琵琶島町小田井あたりでは、昔庄内川が出水して堤防が危くなると、尾張藩士が直ちに出張
して、小田井近傍の里民を使役して、名古屋城下を保護せんが爲に、庄内川の西堤を切つて落さ
せるのだつたが、此の人足等は、自分達の田畑家屋を犠牲とせねばならぬので、怠慢を極めたも
のである。それで今でも怠り勝ちでよく働かぬ人夫のことを、小田井人足といふやうになつたと
す。

3 神明裏の人柱 (葉栗郡)

宮田町の神明裏に二重堤がある。昔この邊は洪水の度毎に決潰したので村人達は思案の果に諸
國行脚の修業者を不意打にしてそれを人柱として今の大明神社の裏手に埋めたといふ。其の後數
年の間は雨や闇の夜などにはこの附近に其の亡靈が現はれたり、又堤の石が不意に轉び出などし
て行人を驚かしたといふ。明治初年までは登狩りの子供も六尺坊主が出ると言つて近寄らなかつ
たさうである。

4 忠兵衛猿尾 (葉栗郡)

草井村の草井の渡を下り鹿子島の村境に來ると此處が忠兵衛猿尾である。昔この邊りは洪水の度毎に木曾川の堤防が崩潰して悲慘を極めた。この里の忠兵衛は何とかして之れを防がねばならぬと家を捨て友を捨てて築堤の大事に没頭した。或る年連日の雨に刻々増水した濁流は今にも折角大工事をした猿尾を乗越えようとした。忠兵衛は必死になつて其れを防いだが如何ともする能はず遂に猿尾は押流され瞬く中に忠兵衛の姿も見えなくなつた。其後修築された猿尾は忠兵衛の人柱によつてどんな洪水にも堪へて現在に至つてゐる。これを千間猿尾とも言ふ。

5 一本松 (中島郡)

長岡村大字馬飼の木曾川の堤上に一本の老松がある。これは昔伊勢の皇太神宮から授つたものだといふ。其の頃木曾川がよく氾濫したがこの松を迎へて來てから其の憂がなくなつたといふ。

6 木曾川霽止址 (中島郡)

萩原町大字戸刈にある。吉野朝時代には木曾川の分流が屢々氾濫した。村人達は申合せて洪水の危難を免れるやうに、天照皇太神宮を堤上に奉祀したところ、其の後忽ち災厄を遁れることが出來た。よつてこれを記念する爲に松一本を植ゑ靈木として尊崇したといふ。

7 正瑞寺傳説 (中島郡)

萩原町の正瑞寺は淺野の末孫が没落して住職となつた。この寺には「鬼神了戒波平安」と銘打つた寶刀を傳へてゐたが龍宮神がこれを瀕りに請はれ遂に寺の下婢に憑依して「劍を朝日村阿古井の池に投ぜよ。然らざれば汝が子の命を貰ふ。又投げ入れれば水難除けとして「淺野末孫正瑞寺」といふ呪文を與へる」とのお告げの通りに早速彼の池に劍を投げこんだ。それからこの寺から水難除けの符を出すやうになつたといふ。

8 底なしの池 (海部郡)

富田村大字前田、圓盛寺の北側にある池は昔大洪水のあつた際出來たと傳へられ、其の時此所に鎮座しました薬師如來様は流失して不明となり、其の代り或る主が住むやうになり、それか

ら此の池の水は如何なる早魃にも涸渴せず如何に流出しても底を見ることが出来ないといふ。

9 堰の工事 (北設楽郡)

名倉村大字西納庫字清水の水田を灌漑してゐる用水は川口原で堰きこまれてゐる。昔この堰は難工事で、何度も大雨のため壊かれてしまつたので、村人が相談の結果、人柱を立てるか有難い経巻を埋めるかといふことになり、経巻を井臺の下に埋めたところ工事が捗り、出来上つた。それからこの井堰の日には、どんな晴天であつてもたとへ三滴でも雨が降るといふ。

10 録止 (北設楽郡)

豊根村大字三澤に昔山津浪があつた時、その神様に村人が「今後六月と七月の八日には山野で録を用ひませんから村を救つて下さい」と願をかけ、その難から助かつたので、村中申合せてそれから、その日には録を用ひなくなつたといふ。

11 水弘法 (寶飯郡)

形原町の音羽港に水弘法と呼ばれる小祠がある。昔このあたりに津浪があつた時、みすぼらしい小僧が現はれ、海に向つて讀經し何處かへ去つた。すると津浪はしづまつた。それから數日後海邊に清水が噴出して、その水煙の中に輪が現はれその中に過日の僧の姿があつた。村人はこれこそ弘法大師の御姿であると、その報恩のため御堂を建て大師の像を安置した。それから水弘法とて、そのお水を貰ひに来るものが多いといふ。

五、石・地藏・石塔等の話

1 紫式部の墓 (名古屋市)

中區鐵砲町の本通から、住吉町二丁目に出る東西の筋の南側に、傳光院といふ寺がある。寺中の五輪の塔は紫式部の墓といふ。又このあたりに紫川といふ川があつた。今は地名にのこつてゐる。昔或る舊家に一人の娘があつて紫式部の源氏物語を愛讀し、光源氏に想をよせ病床に就いた。その果遂に狂人となつて、或る夜村崎川(後に紫川)に身を投じて死んでしまつた。翌朝、村崎川の深淵に娘の美しい小袖が浮んでゐた。土地の手鞠唄に、

村崎川に身を投げて、身は身で沈む、小袖は小袖で、浮いて行く。

といふのがある。

2 龍神石 (一宮市)

市内眞清田神社にあつた龍神石は、轉々と人手に渡つたが、不思議なことに、この石を手に入れた人の家庭には不幸が絶えなかつた。其の後昭和五年一月に名古屋市の覺王山の位牌堂に祀られることになつた。眞清田神社の雨乞が維新後御利益が無くなつたのはこの石を神社から出したからだとも言はれてゐる。

3 身替地藏 (愛知郡)

豊明村大字沓掛の二村山に地藏堂がある。昔此の山の岩窟に熊坂長範といふ山賊が居て村人や往來の人々を苦しめてゐた。或夜長範が旅人と思つて金品衣類を掠奪し更に斬殺して後檢べてみたら人には非ず石のお地藏様であつた。

それから此所の地藏様を身替地藏又は袈裟切地藏といふやうになつたといふ。

4 椀貸し岩 (東春日井郡)

品野町大字品野字鳥原に椀かし岩と稱するものがある。昔淨源寺で人が集る折に、若し膳椀が不足なれば、住職がこの岩へ行つて、膳椀を何人前お貸し下され度しとお願ひすると、翌朝必ず

石・地藏・石塔等の話

願ひ通り膳椀が取揃へて岩の上に置いてあつたと言ふ。さて返す時は元の通りに取揃へて岩上に置き、お禮を言上すれば其の翌朝には、最早や其の膳椀は片附けられてあつた。所が或る時淨源寺に人集があつた時、膳椀を借り受けたが、過つて一個を破損したが、不足のまゝ返したことがある。其れからはこの岩に願ひ出ても願が叶へられなくなつたといふ。

5 お 潮 水 (東春日井郡)

坂下町大字内津奥の宮の巖上に、お潮水といふのがある。二箇の凹穴に雨水がたまつて、どんな早天でも絶えたことがない。眼病に罹つた者は、その水で洗眼すれば、不思議に効驗があると
54。

6 疣 取 り 石 (東春日井郡)

志段味村大字吉根の観音寺門に、五輪の塔がある。その上端が窪んでそれに蓋がある。その凹みに雨水がたまつて、年中絶えない。里人は之れを地獄の水といつて、疣につければ直ぐ取れると信じてゐる。彼岸の中日には、その蓋を取り、除けるが、水中に何か音が聞える。それを地獄

の釜の音だと言ひ傳へてゐる。今でも疣取りにこの水を用ひてゐる。

7 聾 石 (東春日井郡)

旭村大字新居字八瀬之木に、聾石といふ所がある。小石を持ち行きて念すれば、耳の遠いのが忽ち癒えると信じられてゐる。聾石の所在地の側に御成街道といふのがある。これは昔尾州様が代々定光寺へ御参詣の節、通行なされた道筋である。昔名古屋築城の際、水野村定光寺あたりから、諸大名が分擔して石材を搬出した。ところが、或る大名がその重量に堪へかねて遂に聾石の地に一個の石を捨て、里人に向つて言ふには、「若し後日城普請の役人が石のことを吟味をしに尋ね來ても、汝等は皆聾者を装つて、何事も答へるな、若し事實を告げたら、一村の者を盡く斬り殺すぞ。」と威嚇して立去つたが、翌日果して役人が來て尋ねたところ、一村皆聾者をまねて答へなかつたので、役人はあきれて、さても聾者の多い村である、と言つてそのまゝ歸つたといふ。それからこの石を其處に置いて、聾石といふやうになつたと言ひ傳へてゐる。

8 天狐の腫岩 (東春日井郡)

旭村大字稻葉の白山の殆んど頂上に、直經約三尺程の古い石がある。これを天狗の踵岩と言つてゐる。石の中央に東面した大きな足の踵のやうな形の窪がある。昔この白山に住んでゐた天狗が、一夜所用があつて、猿投山に行かうとして、この石の上に乗し、踏臺にして東を指して一飛びに飛んだ時の跡だと言ひ傳へられてゐる。里人たちは、今尙白山に、天狗が住んでゐて、雨の暗い夜などは天狗の火が見えるなどと言つてゐる。

9 眼 鼻 石 (東春日井郡)

水野村下水野十軒家と入尾との間の水野川の中に、凹凸のある一大岩石が突出してゐる。その形が眼鼻によく似てゐるので眼鼻石と稱してゐる。これは明人陳元賛が名づけたさうである。

10 因 縁 墓 (東春日井郡)

高藏寺町庄名の玉龍寺に、因縁墓といふのがある。往昔からこの墓地に八個の穴があつて、順次交代に死者を埋葬するのを慣例としてゐた。墓地附近一帶に棲息する獸類が屢々墓を發くので、村民が大いに悲しんだが、當村の勘七といふ者が、延寶の頃高野山へ參詣の途次、一僧に逢

つて偶々この墓地のことに話が及ぶと、その僧は、高野山上の土を持參して墓地に撒布すれば其の憂が已むと教へたので、勘七がその通りにしたら、其の後は全く獸類の害を免れたといふ。

11 阿半長右衛門の墓 (東春日井郡)

高藏寺町氣噴のドドミキ橋の下流の四辻にある五輪の塔を、里人は阿半長右衛門の墓だと言ひ傳へてゐる。昔から土地では、疝を病む者は、たとへどんな重症でも、この墓前に一片の卒塔婆を奉獻して祈願すれば必ず靈驗があると言つて、遠近からの參詣がある。

12 海 丸 の 穴 (東春日井郡)

水野村大字下水野の八幡社の裏にある岩窟に、大昔海丸といふ世捨人が住居してゐて、和歌をよくした。人々が蕎麥や大根を與へると、短冊に和歌を書いて返禮した。故に此の穴を海丸の穴と言つた。

13 鏡 石 (東春日井郡)

石・地藏・石塔等の話

高藏寺町大字大留の冬至弘法の境内にある鏡石は、往昔は字荒子の冷泉場にあつたものである。約六百年前、尾張宿禰員元が、宗良親王に供奉してこの村に來た折に命名した由、傳へて崇敬してゐる。昔はこゝで篠木合宿の上郷の馬の塔が集合したので、一名を馬寄場とも言つたといふ。

14 首切地蔵 (西春日井郡)

楠村大字味鏡に首切地蔵といふのがある。味鏡字一ノ會、五左の池の地に、往年一の會五左衛門といふ郷士があつた。同家の女中某が厚く此の地蔵に歸依してゐた。然るに、女中が主人の命に従はないで、主人が不満に思つてゐた折、適々女中に過失のあつたのにつけこんで、或る夜主人が女中の熟睡中を切付けた。確に手應へがあつたが、女中は微傷だもなかつた。そして翌朝この地蔵に参拜したら尊體が袈裟切りになつて居つた。女中は大いに驚いて歸つて主人に告げたら、主人も大いに愕いて前非を悔いて、一家悉くが地蔵に歸依するやうになつたといふ。縣道の開通の節、一時此の像を西方寺の境内に移したら、其年に悪疫が流行したので元の地に移したといふ。彼の大賊鐵五郎が少年の頃、其の傍で線香を賣つて生計を立ててゐたといふ。

15 唸石 (西春日井郡)

師勝村大字鹿田に唸石といふのがある。夜な〜ぶう〜と唸つて里人を驚かした。明治の初頃西春日大字徳重の農夫が二人で夜中に正體を調べようと、鋤鎌を以て其の石の邊を掘りにかゝると、案に違はずぶう〜と唸り出したので、鋤鎌を其場に捨て置き家に逃げ歸つた。すると其の夜から二人共病に取付かれて床に就いた。

其後他の農夫が其を聞き又其の塚を掘つたが、やはりぶう〜と唸り出したので驚いて家に歸つたが、そのまゝ病氣に取付かれたといふ。

16 東岸居士の墓 (西春日井郡)

庄内町大字下堀越地内の二十坪程の塚の上に東岸居士の墓碑といふのがある。居士が諸國説法のため馬に乗り念佛誦をなしつゝこの地に來られたが、圖らずも病を獲て往生を遂げられた。何時の頃からか疣神様と稱して信仰された。附近の薄は葉が一方へのみ出てゐた。若しこれを折取らうものなら必ず祟りがあつたといふ。



17 乙女岩 (丹羽郡)

犬山町の木曾川の中程に乙女岩といふのがある。その岩の周が急流になつてゐる。或る年一人の乙女が毎日その岩の上で歌を唄つてゐたが、折から其所を通りかゝつた船頭が乙女の聲に心を奪はれて、其の岩に近づいたかと思ふと急流に吞まれた。するとその乙女は川に跳び込んで人の血を吸つたと云はれてゐる。

18 八王子社内の石 (丹羽郡)

扶桑村高木ではふくのみや八王子社内にある石を借りて来て、蠶を飼ふ家に置く。そして蠶が済むと返す。さうすると蠶をねずみが取らないといふ。

19 石頭山の鏡岩 (丹羽郡)

犬山町内田の里へ杖を止めた一人の僧形があつた。初めは里人も乞食坊主と思つてゐたが次第にその徳に服した。やがてその僧は漂然と草庵を捨て、立ち去つた。これを知つた村人は内田橋

渡まで後を慕つてついで行つた。僧は靜かに手を拂つて「それ程わしを思ふなら、わしの姿をあの山に止めて置かう。」と云つて前面に持つ石頭山を指した。不思議や僧の姿はまさまじとうつつた。里人は瞑目合掌や久しくしたが、やがて目を開くともう僧の姿は見えなかつた。これが石頭山鏡岩の由來である。

20 天狗岩 (丹羽郡)

城東村の東方に黒平山といふのがある。その山中に八曾瀧といふのがある。瀧の上手に天狗岩といふのがある。夜その邊で大きな木の枝を折るやうな音がする。翌朝行つて見ても何等それらしいあとはない。人々は天狗の仕業だといつてゐる。犬山町上野の某が軸を買つて大切に持ち歸る途中、八幡森のあたりまで來ると、急に體が震へて來たので、急いで家へ歸つたが肝心の軸がない。それが不思議なことには、黒平山の秋葉社の神前にあつた。人々はこれは八曾の天狗の仕業だと云つてゐる。

21 夜泣き岩 (葉栗郡)

石・地蔵・石塔等の話

木曾川町大字黒田の白山社の境内の外に夜泣き岩といふのがある。この岩は始め境内にあつたが、往昔のこと夜更けて丑満時になれば夜毎々々に泣くので、村人達は大いに恐れてその附近を通る者も絶えた。後村人達は「境内にある爲にかくも泣くのである。若し外に出せば或ひは泣き止むであらう」と考へて或る日これを掘出して境内の外へ移した。それからは、すつかり泣き止んだといふ。

22 判官石 (葉栗郡)

木曾川町の判官石は昔の鎌倉街道の側にある。これは小栗判官が下向の砌に休まれた所だと言ひ傳へてゐる。里人達はこの石を忌み憚つて近寄らない。昔からこの石に觸れたり近くの草を刈ると必ず祟りがあると信ぜられてゐる。

23 胴體岩 (葉栗郡)

淺井町大字黒岩の石刀神社は一名石刀塚と稱せられ社殿などは無くて御神體は巨石である。そしてこの東方一町餘りの所にある石とは地獄になる大きな岩だと言はれてゐる。御神體石は胴體

石と呼ばれて昔からこの石に小石を投げつけて當れば力を得ると言ひ傳へてゐる、

24 七つ石 (中島郡)

大和村大字戸塚に巨石が澤山ある。日本武尊がこゝで劍をお磨きになつたといひ一名砥塚ともいつてゐる。

25 親鸞上人腰掛石 (海部郡)

蟹江町の水田中に老松のある小丘があつて、小祠の傍に親鸞上人腰掛石といふ石がある。貞永年中上人諸國巡錫の砌、知多郡横須賀より船で當地に上陸せられ小憩の折に御用ひになつたものだといふ。

26 六地藏 (海部郡)

七寶村大字桂の六地藏は、昔戦争のあつた時六人の武士が割腹戦死したのを葬つたものだといふ。

(雨乞の話の部雨乞經參照)

27 來 迎 石 (知多郡)

知多郡大野町の海音寺の境内に來迎石といふ四五尺の古びた石が祀つてある。昔海中より薬師如來御出現の際、乗つて居られた石だと傳ふ。

(社と寺の話の部漢乘師參照)

28 弘法の腰掛石 (知多郡)

内海町の岩屋寺奥の院に弘法の腰掛石といふのがある。之に觸れるとオコリをふるふといひ、之を拜むと諸病が癒るといふ。

29 礫岩と伊勢山 (知多郡)

内海町の伊勢山の岩石はその質が附近のものとは異り、伊勢の産のものと同じだといふので此の名がある。又その麓の海岸に散在する巨石は、天照大神様が伊勢から戯れにお擲けになつた石

であるといふ。

30 姥撻谷の姥撻石と金王丸足跡石 (知多郡)

長田忠致が野間で源義朝を殺さうとするに當り、義朝の臣金王丸が附いてゐては邪魔であつたので、漁獵をすゝめて海濱に行かした。金王丸は後で何事か異變のあつた事を聞き急いで歸途につき、内海町別所(舊馬場村)の今の姥撻谷に來た時一人の老婆に出會つた。實否を尋ねた所義朝變死の事實であることを答へたので、金王丸は逆上し思はず拳を振上げて老婆を撻つた。すると不思議や老婆は消えて石と化してしまつたといふ。此の石を姥撻石といひ此の谷を姥撻谷といふやうになつた。又此の時金王丸が踏んでゐた凹みのある石を金王丸足跡石といふ。

31 いば地蔵 (知多郡)

鬼崎村大字榎戸龍雲寺の境内に石地藏がある。昔から「いば」の出來た者が取れるやうにお願ひすると靈驗あらたかであるといふ。けれども其のお禮として小石百個と百粒の團子とを持つて行つてお禮参りしないと折角無くなつた「いば」が又出來るといふ。

石・地藏・石塔等の話

32 五右衛門地蔵 (知多郡)

岡田町奥組に五右衛門地蔵といつて、觸ると麻疹に罹ると怖れられてゐる石地蔵がある。之は昔五右衛門といふ六部が此の地へ移住して来て毎日酒を飲んでゐた。晩年自ら穴を掘つて里人に「僕は今日生きながら此の穴に埋つて定に入るが鉦の音が止つたなら入定したと思つて呉れ」といつて日頃愛玩してゐた一升徳利を携へ、鉦を鳴らしながら自若として穴に埋められた。地の底からかすかな鉦の音が聞え暫くにして止んだ。里人が其の心を憐んで此の石地蔵を建てたのだといふ。今も五右衛門の爲に奥組の老人連が相寄つて念佛を申すことにしてゐる。

33 オコリ佛 (知多郡)

成岩町本板山にオコリ佛といふ塚がある。縦三間横五間位の塚で五輪の塔が立ててある。オコリをふるつた時草履か草鞋をはいて参拜しそれを此の塔に懸けて來ると癒るといふ。かつて某氏が此の塔に御堂を建て、祀つた所、急に腹痛を患ひ苦んだので遂に取毀したといふ。

34 無實の難を救はせ給ふ長益上人 (知多郡)

上野村加家の寶國寺に長益上人の碑がある。上人については次の様に傳へられてゐる。

慶長年間近郷の庄屋共相集り、或公訴の件に關し姦計を企て當時上下共に徳望高き長益上人に其の公訴の目安を願つた。何も知らない上人は快く承諾されたが其後果して公難起り、公訴の事に關つた者は悉く處刑される事になつた。彼等は連判して斯の目安を立てた者は上人のみで公事の張本人であると申立てた。上人は冤罪なる由を述べられたが所詮多數の姦者を相手では駄目とあきらめられ、「我正に無實の難に遭へり。其の心外言ふべからず。是によりて我諸人の爲に無實の罪あらん者は其の罪より逃れしめ且諸願ある者は必ず其の願望を滿さすべし」と従容として死に服された。首を討つや首飛んで畑中に落ち血潮は四方に飛散したといふ。其後首を討つた者は間もなく死し、姦計を謀つた一族一門悉く疫病に罹つて死んだといふ。

里人等上人の屍を集めて塚となし丁寧な法會を營む。爾來願望ある者参詣すれば必ず成就するといふ。(現に災難除・商賣繁昌・萬病平癒・武運長久・勝訴・試験合格等に祈願する者多く、甚しきは壯丁検査抽籤逃れの祈願をする非國民さへあるといふ)

53 大石燈籠 (豊橋市)

西新町にある大石燈籠は文化二年に出来たものであるが、こゝろ母の石屋が造り上げ船でせきや關屋河岸まで持つて来た所が注文主が分らないので、代金も貰はず河岸に捨てておいた。それを誰かが城門外の現在の地に建てたものといふ。石屋は間もなく身代限をしたといふ。

36 東照公御腰石 (豊橋市)

中八町縣社神明社にある東照公御腰石と呼ばれる石は、明治初年まで舊鎮座地(宮下町)社前の古松の根元にあつたが、この石は家康公がまだ竹千代と稱した頃、吉田城にあつて一日例祭に参拜しこの石に腰かけて鬼祭の神事を御覽なされたものといふ。

37 天降石 (豊橋市)

關屋町にある縣社吉田神社社頭に天から降つたといふ石がある。祟りを恐れて動かすことが出来ないで石垣をめぐらし参道がその石をよけてゐる。

38 神石 (豊橋市)

多米町俗に多米手洗の山に麓、中腹、頂上と大岩が三つあり、その間に小岩が數個散在してゐる。この石は昔神様が麓の岩から頂の岩へ岩傳ひに山を越えられたものといふ。頂の岩には獅子岩の名がある。

39 首斬地藏 (豊橋市)

上傳馬町の藤三郎といふもの妻との間に二子をもうけ不自由なく暮してゐたが、或夜火事を出して家を焼き續いて二子も失つたので、妻は日頃歸依してゐた小池の潮みちの觀音に毎夜参詣してゐた。しばらくして藤三郎は妻を疑ひ或夜ひそかに妻の後をつけて行くと、歸路妻は中柴の地藏庵に立ち寄つた。中には妻を待つ人影があつた。藤三郎は怒つて一刀兩斷にして去つた。暫くして何事もないうちに妻が戻つて来たので、驚いて妻と共に地藏庵まで行くと地藏様の首が地に落ちてゐた。藤三郎は妻の身代りに立たれた地藏尊の有難さが肝に銘じ夫婦共に信心がいよいよ堅固になつたといふ。それから人呼んで石斬藤三といつた。

○ 40 千體骨地藏 (豊橋市)

花田町の正林寺に祀られてある千體骨地藏の縁起についてはこんな話が傳へられてゐる。

平家の末期に九州筑紫の大守原田次郎種直は平家に味方して範頼軍と葦屋浦で合戦して敗れた。父種直が捕へられ鎌倉の土牢に入れられてから生れた花若丸は十三歳の時家來の藤土丸を伴ひ、父の戦蹟葦屋浦に来て一門郎黨の枯骨を集め、土をねつて千體の地藏尊を作つた。而してこれを厨司に納め藤王丸の肩に負はせて遙々鎌倉に下り、町中を巡錫して歩いた。この美しい花若丸の容姿は地藏菩薩の化身だと噂された。このことが頼朝の耳に入つたので、花若丸は召出されて佛教の法悦を釋いたところ、深く感じた頼朝は何なりと褒美にやらうといつた。花若丸は土牢の父の赦免を願つた。頼朝は孝心にめで、種直を赦免しその上三河國足助庄を賜はつた。これ佛恩であると、五年を経て花若丸の母は花ヶ崎(現柳生橋附近)が筑紫の海岸に似てゐるので、前の千體骨地藏尊を本尊として一寺を建てた。それが現在の正林寺で、開山の春岳榮陽尼こそ花若丸の母である。

○ 41 政八地藏尊 (碧海郡)

安城町大字安城字三本木の地藏尊は、未だ此の土地が開墾されない昔から、此處においでになつた。明治用水が出来て盛に開墾された頃、即ち明治二十年舊三月、此の土地へ仕事に来て居た某が悪戯半分に、備中敏で此の地藏尊の頭を割つてしまつた。すると立所に兩眼が激しく痛み出し、地圓駄踏んで苦しんだ。某は自分の罪を心から懺悔して一心に祈願をこめたので、一眼だけは助かつたが間もなく病死した。それから五年程過ぎて池浦村の政八といふ者が重い眼病にかゝり、既に失明するばかりの時、岩津の眞福寺へ平癒を祈願した。或る夜薬師如來が夢枕に立たれ「政八、此の地藏尊を頼め」と告げられた。夢が覺めると不思議にも永の眼病が痕形もなく全快して居たといふ。政八地藏と呼ばれるのは此後のことである。

42 桑子のおこり石 (碧海郡)

矢作町大字桑子字宮地の桑子神社の西に、村人の「おこり石」と傳へる靈石がある。元妙源寺内太子堂の西北に有つたもので、これに觸れると忽ち「おこり」に罹かるといふ。昔此の地に一頭の

石・地藏・石塔等の話

犬が居て村中を荒し廻はり、村民は大層困つてゐた。或る時村の大家が蠶を育て、ゐたところ、其の犬が来て蠶を皆食ひ盡してしまつた。主人が大いに怒つて犬を投げつけると、犬の口から美麗な絹糸を澤山吐出し、やがて息が絶えた。主人は早速其の糸を朝廷に献上したが、犬はそのまま此の石になつたものであると。

43 村積山の毒石 (額田郡)

岩津村の村積山頂、村積神社の右傍の石柵中に一古岩がある。此の岩は古く那須野が原の殺生石の破片が此處に飛んで來たもので、若し此の岩に觸れた者は必ず病に罹ると傳へられ、里人は決して近寄らない。

44 抱地蔵 (額田郡)

岩津町惠田小學校の東方約二百米、駒立に至る山路の辻に小さな御堂があつて、其の中に彫刻の餘りはつきりしない地藏様が祀つてある。この地藏様は今から凡そ二百年前の彫刻と傳へられ一名抱地藏と呼ばれる。この地藏様にお祈して誠心込めて抱けば、若し思が叶ふ時は輕々と抱き

上げる事が出来るが、若し叶はぬ時には如何にしても持ち上げられぬと傳へて今尙多くの信者がある。

45 うなり石 (額田郡)

福岡町土呂八幡宮境内に竹垣の中に立つてゐる小石がある。此の石は昔唸つてゐたと云ふので、うなり石と呼んでゐる。

46 石佛 (西加茂郡)

高橋村大字南古瀬間に石佛と稱する佛がある。おこり病を治すと傳へられ、人に見られぬやうに鏡一文を佛の前に落して、又人に會はぬやうに歸れば病を根治すると云ふ。

47 鶏石 (西加茂郡)

保見村大字田畑の路傍に鶏石と呼ぶ巨岩がある。昔加納武知といふ人が初めて此の土地に來、山野を開墾して稲田を作つたが、毎年良く稔つたので田畑と稱したといふ。武知が或日朝早くか

ら田を耕作してゐたが、將に太陽が登らんとした頃傍らの樹間で鶏鳴が起きたので、不思議に思つて近寄つて見たら、樹間の巨岩が頻りに時を作つてゐた。近隣の人々もこれ聞き傳へ、その鳴き聲を聞かんものと競つて早起をした。

以來村民は朝早くから農耕に精出したので、村は益々榮えた。其後何者か此の靈石に禱を乾したことが有つたが、それからは鶏鳴も絶えたと傳へられてゐる。

今でも此石に參拜する時は頭痛や齒痛が治るといつて里人の崇拜が厚い。

48 駒が蹄 (西加茂郡)

高橋村大字上野山から古瀬間へ通ずる道路を東へ二十町程這入ると小川があつて、其の傍の大岩に馬の蹄の形が四つ刻んであり、俗に駒が蹄と呼ぶ。昔此の土地に悪性の眼病が流行して人々が頗る困難をした。その頃白髪の翁が現はれて此の岩に駒の蹄四つ刻み、此の中に溜つた水を目につければ眼病が治ると云ひ置いて何れへか立ち去つた。人々がその通りに試ると忽ち拭ふやうに治り、流石に流行を極めた眼病も遂に根絶したと傳へられてゐる。一説には昔日本武尊が御東征の時、一武者が敵に追はれて猿投山から此の地に飛び、其の時の馬の蹄の跡であるとも云ふ。

49 おとぼ様 (北設楽郡)

名倉村大字川向の村社東堂神社の拜殿の傍におとぼ様とて高さ五六尺の岩が祀られ、腰から下の病によくきくといはれる。昔この村の兄弟が仲が悪く、兄は弓で川向にゐる弟の腰を射たので、弟はそれから病を得て遂に死んだ。それで兄は村にも居れず伊勢へ走つたが、村人は弟を神の傍に葬つた。それで腰から下の病の神になつたといふ。

50 天狗の手洗鉢 (北設楽郡)

上津具村の天狗棚にある大岩の上に三十ばかり凹みがあり、夏の大旱時でも清水を湛へてゐる。村人は昔から天狗の手洗鉢というて、この水を用ひない。

51 御所岩 (北設楽郡)

豊根村大字坂字場字川字連の御所平に御所岩とて、尹良親王が賊軍に追はれて落延び給ふ時、この岩の上で休まれ、碁を打たれたといふ。又の名を碁盤石ともいふ。

52 オシヤグリ様 (北設楽郡)

稲橋村大字稲橋、稲橋小學校の裏手にオシヤグリ様とて高さ一尺程の丸石があつた。そこは數年前まで雑木が茂り、中央に高さ四丈程の大木があつたが、この木に觸れると、全身に吹出物が出來たり、腫れ上つたりしたといふ。今は木も切られ、石も神社へ移してしまつた。

53 もち洗石 (北設楽郡)

武節村大字黒田正壽寺の裏山にもち洗石とて尹良親王が小鳥を採るため鶴をつかれたといふ石がある。

54 休み石 (北設楽郡)

名倉村大字西納庫字清水と川口の境から月ヶ平に行く道の傍に休み石とて、昔弘法大師が御巡錫の際、この岩上で休まれその足跡をのこして行かれたといふ岩がある。岩上に人の足跡のやうな凹みが數ヶ所ある。

55 赤子岩 (北設楽郡)

名倉村大字東納庫字寺脇の廣畑に大岩があり、その側面に赤子の足跡のやうな凹みが數ヶ所あるので赤子岩といふ。子供の夜泣はこの岩に祈れば癒ると。

56 行者岩 (北設楽郡)

名倉村大字東納庫字市之瀬の路傍に行者岩とて川に臨んだ奇岩がある。役の行者を祀り、碁盤石山の登山道も此處を一合目としてゐる。昔、深夜にこの岩上に行者が現はれ修業して居たが、人の目にふれると姿をかくしたので、誰もその顔を見たものがなかつた。もし行者の修業中の姿を見たものはその忌諱にふれ悉く病んだといふ。

57 物見石 (北設楽郡)

振草村大字小林の粟代境の山中に物見岩とて、昔、村の若者をこの岩上に立たせ村の入口を警戒させたといふ岩がある。

58 大屋地の五輪塔 (北設楽郡)

振草村大字小林宇大屋地の墓地に五輪の塔がある。これは昔、武田勝頼長篠城を攻めた時、鳳來寺の陣屋も危くなつたので、同寺の住職、一婦人に同寺の重寶、古書と茶席茶釜一個を小林村大屋地の宮太夫方へ預け方を命じた。婦人は命を奉じ同家に来り食客として過ぐるうちに死んだので、同家で婦人のために、五輪塔を建てたのがそれであるといふ。

59 成長する石 (北設楽郡)

振草村大字古戸宇下に大きくなるといふ石がある。だんだん成長し重くなると下に落ち、すると何か天災地變が起るといふが、落ちた石は何時の間にか元の場所へかへつてゐるさうだ。

60 鬼の足跡と手跡 (北設楽郡)

振草村大字古戸宇日向の切粉淵の澤中の岩に大きな足跡の形がある。これは昔ここに鬼が出て足をついた跡ださうな。

又川合のはづれ、下津具村に通づる道の奥の小流に押腕澤といふ所があるが、里人が鬼をここまで追込んで、この岩上に手をついたと、手の跡のやうな凹みがある岩がある。

61 ひめ 岩 (北設楽郡)

御殿村大字中設楽字的場の畑にひめ岩とて五尺位の長さの岩があるが、何度起しても倒れるので今はそのまゝ地に埋まり、その一部が現はれてゐるだけである。昔この地の城山の城が亡びる時、お姫様が逃れてここまで来ると、川向ふから射た弓に當つて死んだ。それで村人がその場にお姫様を埋葬してその墓印に立てたのがこのひめ岩だといふ。

62 じよろう岩 (北設楽郡)

三輪村大字川合にあるじよろう岩は、昔京で宮仕の女官がこの地へ落ちて来て、この岩へ入つたので名がついたといふ。もとはこの岩穴の中へ行くと金の筭が落ちてゐたが、それを家に持つてかへると木の葉になつてしまつたと言ひ傳へてゐる。

63 百六岩 (北設楽郡)

三輪村大字川合にある百六岩は、昔武田勝頼の兵が負けて逃げて来て、この岩の中に入った百六人が往生したとも、又岩に入ったために命が助かつたともいふ。

64 殿岩 (北設楽郡)

三輪村大字奈根字深谷夕立岩の麓に殿岩又の名をとのこやといはれる岩がある。二間四方位の岩盤になつてゐて、上からも屋根のやうに岩がかぶさつてゐる。ここは昔遠山土佐守といふ人が住んだ所と傳へられ、八柱神社には土佐守が奉納したといふ兩刀が寶物になつて藏されてゐる。

65 足神様 (北設楽郡)

三輪村大字奈根字深谷に足神様とて小祠があり、その中に地神と刻まれた石がある。昔遠山土佐守が馬で深谷へ来たが、馬が脚を病み死んだので、ここへ葬り、自分は殿小屋へのぼつたといふ。この馬を祀つたのが足神様で、今でも馬も人も足に怪我したり腫物が出来た時は馬のくつや

人間の草鞋を供へて祈ると癒るといふ。

66 よらぎ地藏と八つ田 (北設楽郡)

本郷町の與良木峠の六基のよらぎ地藏は、今この峠から中在家へ通ずる道へ移されたがこの附近で

よらぎ地藏様いくさに負けて

今じゃ八つ田の田の中に

と俗謡に唄はれてゐる。これは昔この地藏が武田の軍勢のため峠から蹴落されて赤谷の八つ田の中に埋つた。この田の上に疊一枚位芝の生えない所があるが、それは地藏が峠から落ちる時一度ここに落ち、それから田の中へころげこんだからだといふ。八つ田の地藏を田から出してあげると本郷へ白水が流れるやうにしてやるといふたげなども傳へられてゐる。(白水が流れるとは米の多くとれる富んだ村のこと)

又八つ田の名は、峠から地藏様の首がころげ落とされそれをさがして掘るうちに田が八枚出来たと、尙この田を女入れずの田といふのは、地藏様の入られた田だから不淨を忌むのだといふ。

石・地藏・石塔等の話

67 赤子石 (北設楽郡)

園村大字足込に赤子石が祀つてある。昔旅の女の子供を負ひ道に迷つて足込に來たが、女は賊に殺され、赤子は淵に捨てられた。だが赤子は母を慕つて淵から這ひ出した。その時淵の岩のいくつかに赤子の足跡がついた。その後この淵のあたりを通る村人の耳に、乳を求め赤子の泣聲が夜な／＼聞えた。村人の一人がその聲をさがすと、それは赤子の足跡のある岩によせる波であつた。その後村人の手によつて、その足跡石の一つを程近い場所へ引上げてお祀りした。それから赤子の泣聲は聞えなくなつた。今でも赤子が夜泣すると、この赤子石に祈ればなほるといふ。

68 女籠石 (寶飯郡)

赤坂町長福寺の後山にある女籠石は、大江定基が任滿ちて都へかへる時、その籠をうけてゐた赤坂の長者の娘力壽が悲しみのあまり舌を噛み切つて死んだ、その熱心が凝つて石になつたものといふ。

この定基と力壽の傳説は今昔物語に次のやうに載つてゐる。

參河守大江定基出家語

今は昔、圓融院の天皇の御代に、參河守大江の定基と云ふ人有り、參議左大辨式部大輔濟光と云ひける博士の子也、心に慈悲有て身の才人に勝れたりける、藏人の巡に參河の守に任ず。而る間本より棲ける妻の上に、若く盛にして形も端正也ける女に思ひ付て、極て難去く思て有けるを、本の妻強に此れを嫉妬して、忽に夫婦の契を忘れて相ひ離にけり、然ば定基此の女を妻として過ぐる間に、相具して任國に下りにけり。而る間此の女國にして身に重き病を受けて久く憊み煩けるに、定基心を盡して歎き悲むで、様々の祈禱を至すと云へども、其の病の癒る事無くして、日來を經るに隨て、女的美丽也し形も衰へ持て行く、定基此れを見るに、悲の心譬へむ方無し、而るに女遂に病重く成て死にぬ、其後定基悲び心に不堪して、久く葬送する事無くして、抱て臥たりけるを、日來を經るに口を吸けるに、女の口より奇異き臭き香の出で來たりけるに、疎む心出で來て泣く／＼葬してけり、其後定基世は疎き物也けりと思ひ取て、忽に道心を發してけり。而る間其國にして國の者共風祭と云事をして、猪を捕生け乍ら下してけるを見て、彌よ道心を發して、速に此國を去なむと思ふ心付きぬ。亦雉を生け乍ら捕て人の持來れるを、守の云く「去來此の鳥の生乍ら造て食はむ、今少し味や美きと試む」と、守の心に入らむと思ひたる、物も不思議

ぬ郎等共、此れを聞て云く、「極く侍りけむ、何でか味ひ増らぬ様は有む」と勸め云ければ、物の心少知たる者共は、奇異しき態をも爲むするやなど思ひけり、而るに雉を生乍ら持來て捕にするに、暫くはふたくと爲るを引かへて、只捕りに捕れば、鳥目より血の涙を垂れて目をしば叩きて、彼れ此れが貌を見るを見て、不堪して立去く者も有けり、鳥此く泣よとて喚て、情無氣に捕る者も有りけり、捕り畢へてつれば下せけるに、刀に隨て血つぶくと出で來けるを、刀を打巾ひ打巾ひ下しければ、奇異く堪へ難氣なる音を出して死に畢にければ、下し畢て煎り焼などして試せければ、事の外に侍れりけり、死たるを下して煎り焼たるには事の外に増たりと云ひけるを、守つくくと見聞居て、目より大なる涙を落して音を放て泣けるに、味ひ甘しと云つる者は恐れてぞ有ける、守其の日の内に國府を出て京に上りにけり、道心堅く發りにければ、髻を切て法師と成りにけり、名を寂照と云ふ、世に參河の入道と云ふ此れ也。(今昔物語本朝の部卷第十九の第二)

69 神力石 (寶飯郡)

赤坂町の八幡社に夫婦楠とて二本の大楠がある。昔このあたりに持統天皇が參河に行幸あそばされた時、大神宮を奉迎し、座して四方拜を遊ばされたといふ石があつて、神力石と稱してゐ

た。重たちこの石上に上ると神詞があたるので寶曆年間のこと、神主土中に埋め、今本社殿の下にあるといふ。今もこの石のあつた楠のあたりで、わる遊をする子供は楠にはりついて離れないことがあるといふ。

70 地藏堂 (寶飯郡)

赤坂町の東端より東海道に添つて數町西して、北に入ると、音羽川畔に弘法大師作といふ地藏尊を祀る地藏堂がある。昔倉橋某病み、その子看病に疲れ眠る夢中に地藏尊現はれ給ひ「われ空海一刀三禮して刻む像なり。年久しく柳の根本に埋れ衆生結縁の便なし。我を掘出し安置せば汝の父の病を癒し、衆生を濟度せん」と、そこで柳を目あてとして地を掘ると、果して尊像を見つけたので、父の病を斬ると忽ち父の病が癒えた。そこで一字を建て尊像を祀つたのが今の地藏堂である。このあたりを地藏堂町と名づく。

71 淨瑠璃姫腰掛石 (寶飯郡)

長澤から宮路山に登る舊道の傍に淨瑠璃姫腰掛石といはれる岩がある。これは昔矢作の長者の

娘淨瑠璃姫が、奥州下向の義経を慕ひこの地まで来てその姿を見失ひ、途方にくれて腰掛けた岩といふ。姫は泣く泣く歸つて河に投じて死んだといふ。

72 彈 琴 石 (寶飯郡)

赤坂町宮路山の溪谷にあつた彈琴石は、太政大臣藤原師長公尾張へ配流の時、配所の徒然に宮路山に入り、虎の皮を敷いて琵琶を掻き鳴らした岩といふ。今谷より引上げ「宮路山聖跡」の標柱の臺石としてある。

この師長と宮路山の傳説は源平盛衰記に次のやうに載つてゐる。

師長熱田の社琵琶の事

師長(中略)此大臣配所の徒然を慰まんとて宮路山へ分入り給ひつゝ木々の紅葉を遊覽あり。比は十月廿日餘の事なれば梢まばらにして落葉道を埋み白霧山を阻て、鳥聲幽なり山又山の奥なれば旅寢の里も見えざりけり。後は松山岨々として白石瀧の水流れ出で苔石面に生ひて嵐尾上に冷し。誠に石上珍泉の便を得たる勝地あり。御心の澄みければ上玄の曲を調べつべくぞ覺しける。岩の上に虎の皮の御敷皮を打しき紫藤の甲の御琵琶一面を掻きすべて撥をとり絃を打鳴し給

へり。四絃彈の中には宮商彈を宗とし五絃彈の中には玉しやう彈を先とす。軽く櫛し慢く撥りて撥ひ復挑げ初て霓裳を爲す後には六么す大絃は嘈々として村雨の如く小絃に竊々として私語の如し。第一第二の絃の聲は素々たり。春の鶯關々として花の本に滑なり。第三第四の絃の聲は竊々たり。閑泉幽咽して氷の下に眠れ鳳凰鶯の和鳴の聲を添へすといへども事の體山祇感をたれ給ふらんと覺えたり。さびしき梢なれども秋花啄木は空に玲瓏の響を送る。其時水の底より青黒色の鬼神出現して膝拍子を打て和に嚴しき音を以て御琵琶に付きて唱歌せり。何者の仕業なるらんと覺束なし。曲終り撥を納め給ふ時我は是れ此水の底に多くの年月を経しかども未だ是れほどの面白く目出たき御事をば承り及ばず此御悦には今日の内歸洛せさせ奉らんと申しも終らず掻消す様にぞ失せにける。水神の所行といちじるし。此等の事を思し召し合するにも惡縁は即ち善縁の始なりけりと今さら思ひ知り給ふ。されば明神の御託宣水神の悦申の驗にや第五箇日と申すに歸洛の奉書を下されたり。管絃の音曲を極めて當代までも妙音院の大相國と申すは此大臣の御事なり。(下略)(源平盛衰記第十二卷)

73 岩屋穴觀音 (寶飯郡)

石・地藏・石塔等の話

御津町大字豊澤字石堂野の大岩寺岩屋穴観音の岩屋は、武烈天皇の御宇火の雨降ると諸國に岩屋を築きたる時造れるものといふ。

74 火穴の石 (寶飯郡)

萩村字長根に火穴といふところがある。これは武烈天皇の御宇、或年の十二月二十六日諸國に火の雨降るとの御達あり、土民災厄を避けんと掘つた穴といふ。今は火穴を築いたといはれる大石數個がのこつてゐる。

75 腹痛を治した地藏 (寶飯郡)

萩村字萩澤奥の山頂近くに覺道地藏がある。天保の昔一人の六部が隣村宮崎村大代を過ぎる頃、疲れはて民家に休息と藥餌を求めたが村人は萩村界まで追立てるやうに連れて來たので、六部は仕方なく附近の松の根元に苦しんでゐた。それを見た萩村の某が親切に看護したがやがて死んだ。そこでこの地に葬り、地藏尊を建てた。後この附近で草刈をしてゐた人が急に腹痛を覺えたが、この地藏尊に祈ると不思議にすぐ全快したといふ。

76 龜石 (寶飯郡)

八幡村大字平尾字駒場の中屋敷の庭に龜石といふ大石があつてこれを動かすとおこりをふるふといはれてゐたが、近年荒神様の石垣に積みこまれてしまつた。

77 焼け地蔵 (寶飯郡)

國府町大字白鳥字下郷中の墓地に焼け地蔵と呼ばれる地蔵がある。これは昔から雨の夜時々火が地中より立のぼり、石像が火中にある、それで近よると火は消えるのでその名がある。

78 笠神山の石 (寶飯郡)

大塚村大字大塚字下長尾の説教場に藥師如來が合祀してあるが、ここより西北三町程の所に笠神山といふ小丘がある。昔ここに小石があつたが、村童が戯に帷下におとし、後からその場所へ行つて見ると、元の場所にその小石がもどつてゐた。何度か繰返してもこの不思議がつづくので村人は藥師如來因縁の石として祀るやうになつた。

79 人を呼ぶ地藏 (寶飯郡)

御油町大通寺の池畔に地藏尊が祀つてあつたが、このあたりは寂しい所なので、この地藏が通行人を呼ぶ。すると池にはまつて人々が死ぬ。そんな噂が立つたので、今では新町の東林寺山門の傍へ移してしまつた。

80 長瀬石採場 (寶飯郡)

西浦村字橋田大山長瀬の岩に鑿のあとがあるが、これは大阪城を築いた時石垣用の石材を採つたあとといふ。

81 弘法大師御足跡岩 (寶飯郡)

西浦村字日中無量寺に弘法大師御足跡岩と呼ばれる石があるが、これは大師が無量寺より幡豆郡沖島辨天に向はれる途中海岩の岩上に立ち「わが巡錫のかたみに足跡をとどむ」といはれ、岩上に草鞋の跡をとどめられたものといふ。

82 占石 (寶飯郡)

牛久保町上善寺の馬頭観音は家康公が長篠出陣の際三日の間祈願をこめられ、ここにある占石を提げて重い時には不吉であると出陣を見合せ、軽い時は戦に勝つと出陣せられたといふ。

83 鏡岩 (渥美郡)

二川町大字谷川字雲谷普門寺の西小丘に高さ六尺幅五尺程の鏡の如き岩が南面してゐる。人呼んで鏡岩といふ。昔この地方の女たちは鏡に用ひたといふが、日に輝いて遠く海の魚が恐れて海岸に近づかず、漁夫達が困つてゐた。或時一漁夫が潮水を注ぎ掛けてから光を失ひ、以後鏡の用はなさなくなつたが、魚が多くとれるやうになつたといふ。

84 五輪の地藏 (渥美郡)

二川町大字谷川字原、二ツ堂の大樹の下に五輪の地藏あり。以前は梶の大木が繁つてゐたが今は枯れて、その跡に藁木を生じ又大木となつてゐる。

85 石船と腰掛石 (渥美郡)

老津村字若宮の海中にある石船といふ岩は昔諸神が海を渡つて來られた時乗り捨てられた船で、今は海底に沈んでゐるが以前はその舳と見える時分が舊三月節句頃の大潮には海上に現れてゐたといふ。

この村に來られた神々は中北の七兵衛の家に立寄られたが、その時休まれたといふ腰掛岩と稱する石が今も同家にある。

○ 86 海上りの地藏 (渥美郡)

谷熊村寶樹寺の地藏菩薩は寛正二年六月商船渡海の時、海上に浮び上つたので船主が戯れに「菩薩よ我國に到りて衆生を教化せんとならば此處にて歸船を待たれよ」と、後五日を経て其所を通つたが、菩薩先の如く海上に浮ばれてゐたので、船主は靈像を奉持して歸村し白衣舎に安置してゐた。一夜夢枕に立ち「清淨の佛舎に入りたし」と、そこで一字を構へ願王山寶樹庵と號しそこに菩薩を安置し奉つた。それより今に至る四百餘年、海上りの地藏とて世人の信仰が厚い。

87 膳 貸 岩 (渥美郡)

泉村大字伊川津杵の山中福江町泉福寺に通ずる山道の谷間に臨むところに膳貸岩と呼ぶ縦横いづれも十數間の大岩がある。昔里人が佛事慶事に用ひる膳は、前日この岩に來り「明日は何々のため膳何人前入用につき借して下され」と頼むと、次の朝必ずその數だけ用意してあつた。里人はそれを借りて使用し、後必ず前の場所に返しておいた。或時欲深な里人が數を偽りその一部を返さなかつたので、それから誰にも膳を貸してくれなくなつたといふ。

88 鵝 石 (渥美郡)

泉村の縣道より岐れて二十町程南し、馬伏の山道を五六町登ると三方山に圍まれ溪流に臨むところに鵝石と呼ぶ巨岩がある。高さ五間巾六間ばかり断面平滑の岩壁をなしてゐるが、聲樂をそのまま反響する。昔この地の豪士渥美大夫の娘玉榮許婚の主馬之助の變心を恨み、母から貰つた唐竹の横笛を銜へて岩下に身を投じて死んだ。それから笛の音だけは決して響かぬといふ。

89 瀧山崩れ (八名郡)

八名村大字中宇利地内丸山に人がさはるとおこりをふるふといふ石があつて、ここを瀧山崩れといふ。この場所の城跡で、女の城主が居たが何時の時代にか城兵が皆討死したといふ。この城をびにく城と呼んでゐる。

90 田植地藏 (八名郡)

八名村大字小畑の延命寺に昔一頭の白馬が飼はれてゐたが、或年の早天に近在の農夫が困つてゐると、この地藏が二人の弟子と共に、この白馬を連れ出し、一夜のうちに附近の田植をすました。翌朝村人は寺裏より水の湧出で、田に植付が出来てゐたのを見て、地藏がしてくれたことを知り、それから田植地藏とあがめた。

91 六つ石 (八名郡)

八名村大字小畑内笠峠山へ行く途中の山腹に六つ石といふ所がある。昔はここに大石が六つあ

つてその名があるが、山婆がその中一つを片手で投げて今は五つしかない。投げた石は村神といふ所の澤に近い道端にあるが、その岩には指のあとがついてゐる。

92 座禪石 (八名郡)

八名村大字小畑の延命寺奥の山に座禪石といふ石がある。昔僧侶この石上にて座禪をしてその名があるといふ。

93 夜泣石 (八名郡)

八名村大原のお堂から南に一町程行くと左手に塚がある、その上に夜泣石とて、夜泣きをする幼児には、この石の破片を持つて来て机の下に入れておくと夜泣が止むといふ石が祀られてゐる。この石は始はセセナギの原の石橋といつて、橋の石材であつたが、嘉永頃のこと、他の石材にかへようと掘り起して見ると上に梵字下に碑文様の刻みがあつたので、さはりを恐れてそのまま納めておいた。後洞雲寺の住職に讀解を請はんと再び掘り出すと今度は文字の形蹟もないので村人は、この石は他に移されるのを厭つて不思議を現はしたのだらうといつた。このごろ村の青

年によつて今の位置に祀られるやうになつた。

94 礫 石 (八名郡)

石巻山の十町程北に礫石といふ高さ一丈程の大岩がある。この岩は昔石巻山と本宮山の神が山の高低を争つて双方で投合つた時落ちた礫であると、今一つは當山の南谷菖蒲澤に落ちたといふ。

六、城址・屋敷址等の話

1 師長誦居址 (名古屋市)

南區瑞穂町(昔は井戸田)にある。治承三年に太政大臣藤原師長がこの地に左遷されたといふ。月の明るい夜、師長は熱田神宮前で得意の琵琶の秘曲を弾ぜられた。その時、神明感應に堪へず寶殿が大いに震動された。師長は身の不遇を忘れて、「平家の悪行がなかつたら、今この瑞相をどうして拜することが出来よう。」といつて感涙を流されたといふ。

2 頼朝誕生地 (名古屋市)

南區熱田旗屋町誓願寺境内は頼朝誕生地であるといふ。頼朝の生母は大宮司千秋季範の女といふ。又熱田の近くの瑞穂、井戸田の片垂といふ所に頼朝誕生地といふのがある。附近の龜井泉を産湯に用ひられたと傳へられてゐる。元井戸田の若宮八幡は頼朝の産土神であつて社傳に治承年

間に頼朝が此の社を相州鎌倉鶴ヶ岡に遷祀し、今の鶴ヶ岡の下宮が是だといふ。又一説に、頼朝は井戸田に生れて七夜に七水を用ひられたが、中にも龜井は名水で、將軍上洛の折は二十五人の人夫をして熱田西御殿に運ばせたといふ。

3 池 殿 屋 敷 (名古屋市)

南區熱田の誓願寺の邊に、熱田大宮司季範の伯母にあたる池禪尼が住んでゐた。後世其處を池殿屋敷と云つたといふ。

4 義經元服の地 (名古屋市)

南區熱田は義經が舍那王といつた時奥州に下る途次熱田大宮司方に逗留し元服されたといふ。この時大宮司から烏帽子を奉り左馬頭九郎義經と名乗られたといふ。

5 景清屋敷址 (名古屋市)

南區熱田には悪七兵衛景清の宅址と稱するものが二箇所もある。景清は大宮司家の縁の者で、

こゝに身を寄せてゐたといふ。謡曲では熱田で遊女と相馴れて一子を擧げたと云つてゐる。神庫には景清が奉納したと云はれる鬘丸の名刀があるといふ。又熱田神戸町には景清社といふのがあつて、此所は景清が住んでゐた だといふ。又古渡に七塚があつて、其の一つに景清塚といふのがあつたが、今は其の所在がわからなくなつた。門前町淨久寺に景清の守本尊千手觀音、並に位牌がある。又景清は熱田に隠れてゐた頃眼病にかゝり、馬島の明眼院の療治で快氣を得て、同院に鎧一領を送つたといふ。

6 八百比丘尼 (二宮市)

市内に八百比丘尼の出生地といふのがある。尾張名所圖會に、「金光寺村。八百比丘尼出生地。」とあり、又尾張田之眞清水に、

若狭國小濱邊の里民の傳説に比丘尼は尾張國一宮の金光寺といふ所の出生のよしいへりと彼國人語れり。扱中島郡眞清水田の社の東の方に金光寺町と呼ぶ地ありて、さる寺院今はなしといへども、其あたりにて生れたる婦女のよし一宮人もいひ傳へたり。

とあり、又、探桃集や鹽尻にも出てゐる。今日尙口碑に遺つてゐることである。

7 沓掛磐址 (愛知郡)

豊明村大字沓掛清城にあつて、永祿三年、沓掛城主近藤景春の築いたものだといふ。

8 西行堂跡 (東春日井郡)

小牧町大字南外山に西行堂跡といふのがある。大山街道に沿うた所で近くに西行堂橋といふのもある。里傳によると、昔西行がこの地に行脚して来た折、伯父にあたる恭榮といふ坊さんが住してゐた春日寺に、暫く滞留してゐたことがあつた。その折の歌といはれるものが傳つてゐる。西行はこゝで徒然のまゝに自像を木作して、やがて此の地を去つた。後里人で西行を慕ふ人がこの像を安置して西行堂といつたが後廢れた。今像は西春日井郡北里村大字市之久田常普請の本光寺に藏されてゐる。

9 道風屋敷跡 (東春日井郡)

鳥居松村大字松河戸は小野道風の誕生地と傳へられてゐる。道風の父葛絃がこの地に謫されて

ゐた折、里人の女を娶つて生んだのが道風だと言はれてゐる。この地には往昔から道風屋敷跡や小野社といふのがある。明治の中頃一時この邊を小野村とも言つた。

10 甚蔵屋敷址 (東春日井郡)

坂下町大字西尾の宮前に甚蔵屋敷といふのがある。其所には瘡病を癒す神の碑が埋没されてゐるといふ。今は野原と化してゐるが、若し其の地を耕すとか、或ひは木を抜くものがあれば、發病すると言はれてゐる。

11 八百比丘尼の生地 (東春日井郡)

高藏寺町白山の圓福寺山内に、比丘尼の生れた比丘尼谷といふのがあり、又山腹にその祀堂が存する。往昔此の地が、濱邊であつた頃、或る日この村の漁師が沖で一尾の奇魚を得て歸つた。それは頭が人面で他は凡て魚形であつた。漁夫達は互に顔を見合せて、食すべからずとして捨て去らうとした。丁度其所へ一旅人が通りかゝつて、「世に庚申祭なるものがある。これを行へば、悪事災難を拂ひ福德幸を得ること必定だ。」と説いて祭神の方法を教へ、先の奇魚を供へて立去つ

た。祭の終る頃其の附近に、乳母に伴はれて遊んでゐた一人の小娘があつた。口が賤しくて人の知らぬ間に彼の奇魚をそつと失敬して食べた。扱て其の娘が成長するに従つて、人一倍美しくなり十七八歳になるといよいよ秀麗を極めて、村の青年達の熱い血潮を湧かせた。不思議なことに、この娘の容姿はいつまで経つても變ることなく、何時の間にか數百年は經た。その間に二世を契つた夫もつぎ／＼と逝き、山姿水容徒らに改まり、親族故舊の顔も見えなくなつたのに、自分の姿のみが昔のまゝに若々としてゐるので、娘は大いに恥ぢた。遂に浮世を厭つて髪を剃つて比丘尼となり、諸國遍歴の旅を重ねて終に若狭の國に辿りついた。その時は齡八百を數へてゐたが、それでも尙死なぬので、生きながら洞窟の中に入つて姿を没したといふ。今尙圓福寺山内の比丘尼の小祠は、長壽延命及び縁結びの靈神として遠近よりの賽客が絶えない。

12 山の田の孝女 (東春日井郡)

旭村あさひの山やまの田たに一人の孝女があつた。年が來ても嫁せず、病む母を親切に介抱してゐた。極暑に蚊帳を吊らうとしても家が貧しくてそれが叶はず、毎夜寝ずに扇いでゐたが、その地は殊に蚊の多い所であつたから、堪へられず遂に近くの洞光院の本尊釋迦如來に、蚊軍の退散を祈ると、

忽ち蚊が來ないやうになつたといふ。孝女の住んだ屋敷と言はれる所は、今は水田になつてゐるが今尙極暑の折でも、蚊は一匹も來ないさうである。里人は孝女の徳であると言ひ傳へてゐる。

13 秀吉の生地 (西春日井郡)

清洲町きよす朝日あさひは秀吉の生地だと云ふ。秀吉公の生母朝日殿は朝日の莊にゐたが生來頗る美人で都に上り御殿女中として働く中、貴人の胤を宿したので當時の掟により早速生地にかへり分娩することになつた。そこでどうかしてよき男兒を得んものと氏神である日吉神社に日參して時の到るを待つた。天文五年正月元朝に玉のやうな男兒を産んだ、依つて氏神様に因み日吉丸と命名した。彼の木下彌右衛門の子としたのは「父無し子」のそしりを免がれんが爲であるといふ。後秀吉は生母の病篤く平癒覺束なき時、最後の手段として日吉神社に祈願をこめたのも之によるといふ。

14 秀吉の生地 (西春日井郡)

清洲町御園神社の東に越戸こしといふ地名が残つて居るが、英雄秀吉がこゝに生れて産湯せし所と言ひ傳へられてゐる。

15 女郎屋敷 (西春日井郡)

豊山村青山に「女郎屋敷」と云ふ地名がある。これは往古遊廓のあつた所だといふ。古老の言によると畑中には古井戸らしいものがあつたさうである。

16 朝日殿の宅址 (西春日井郡)

清州町大字朝日には豊臣秀吉の生母朝日殿の宅址があつて、現在は後藤桑次郎氏の宅になつてゐる。俳人「旭里」は朝日殿の正系と言はれてゐるが、今はその後は絶えた。

17 晴明屋敷 (丹羽郡)

羽黒村の晴明屋敷は今はその地點を明らかにしないが、昔一代の陰陽博士安部晴明が善師野宿に行通つた時、羽黒村民が茶汁をもてなしたが、その野菜に茶蟲がついてゐたので、晴明は「これは如何。」と尋ねた。主人は「當村の茶は悉く蟲がついて迷惑してゐる。」と答へたので、晴明は「我をその畑へ案内せよ。祭事をせよ。」と云へば、主人は悦んで、「畑までは道が遠いので先づ

この屋敷の内を祭つて下さい。」と言ふので、そのやうにした。その地を晴明屋敷といつて、今も尙作物に蟲が附かないといふ。村民は今もこの地の上を少しづつ取つて菜畑にまいて、蟲よけのまじなひとしてゐる。

18 八百比丘尼 (丹羽郡)

犬山町五郎丸字萬願寺に八百比丘尼が住んでゐた。この八百比丘尼が入定した大椿は七枝に分れてゐて、昔からお化の椿といふ。明治三十三年の春、若狭の國から五郎丸へ傳説を聞きに來たことがある。若狭にある八百比丘尼の入定地にも大椿があつて、やはりお化椿といつてゐるさうである。八百比丘尼の位牌は五郎丸の庚申堂にあつたと傳へられてゐる。

19 山王小太郎の屋敷址 (葉栗郡)

淺井町大字小日比野字本郷の山王社の附近は昔から山王小太郎の屋敷址と言はれてゐる。今は畑になつてゐるが數尺の下を掘ると立派な石壘になつてゐるさうである。しかし其の下を掘つたり土砂を取る者は忽ち病氣になるといつて村人は恐れてゐる。

20 小寒神社の八百尼 (葉栗郡)

淺井町大字尾關にある小寒神社は一名舟付大明神ともいふ。その由來は口碑によると昔黒岩の某氏が若狭の八百尼へ参詣した折「八百尼は尾張尾關の出身で尾張へ来た頃は若狭から尾關へ船を著けたが、百年に一里づゝ埋つて今では宮(熱田)のボタといふ所に船がつくさうだ」との話を聞いて歸村してからさう言ふやうになつたといふ。明治維新當時に八百媛大明神を祈つた。

21 中島宮舊址 (中島郡)

萩原町の中島宮の舊址は垂仁天皇の御代に倭姫命が天照大神の御靈代たる神器を奉持して諸國を巡幸せられた途次に美濃の國大野郡伊久良河宮からこゝに遷座あそばされ、三箇月の間お留りになつて後伊勢に向はせられ桑名郡野代宮に御遷幸になつたと傳へられてゐる。中島宮址は大字中島八劍社の西方の畑中の標柱の建つてゐる所である。

22 お高屋敷 (中島郡)

萩原町にお高騒動といふ事件があつた。弘化の末この村にお高と呼ぶ美少女があつた。十七歳

の頃傳來の古文書によつて自分の家が近江佐々木の末流であることを發見して家格を誇つた。弟九左門は酒色に溺れて家財を蕩盡したので二人は生活に窮した。お高は或夜、さる大名の局になつて榮華を極め弟九左門も姉の權勢を以て殿中に威を張ると言ふ奇異な夢を見た。お高はそのまふら〜と家を出て江戸を指し、幕府にお取立を訴へ出たが老中はじめ彼を狂女として嘲笑した。それから間もなく彼は名古屋藩の牢舎に繋がる身となつた。もうかうなつては西宮重の若衆達の美望は裏切られた。お高は後赦されて郷里に歸つたがやがて二十四歳の若さで果敢なく最期を遂げた。この一件は唄にされて世に流布された。今お高屋敷といふのがこのつてゐる。

23 備前屋敷 (海部郡)

蟹江町に寶曆年間の頃、清六にお勝といふ夫婦があつた。屋敷近くに清六池といふ池があつて、名古屋藩士伊奈備前守が屢々魚釣に來られた。その度毎にお勝は自分の仕事を止めて歡待したので、備前守はお禮として池の北方に聳え立つ松の陰さす地域一帯を賞與し、その證文まで下さつた。それから此の屋敷を備前屋敷といふやうになつたといふ。

24 深田城 (海部郡)

大治村大字中島字深田には織田伊賀守の城があつた。清洲の城主と戦つたことがあるといふ。

25 御姫屋敷 (知多郡)

日間賀島村の今の郵便局附近の一带を御姫屋敷といふ。昔豪族鈴木五太夫の領で、北方に御殿風の家があつてお姫様がかくまつてあつたといふ。

26 鎌田政家の居城址 (知多郡)

豊濱町乙方の正迄寺の地は鎌田兵衛政家(源義朝の臣で長田忠致の宅で討死す)の居城があつたといふ。現に附近に大門、御門坂、殿街道等の地名がある。

加増、セツ山、刀田等は、舅長田より鎌田への掣引出物としての土産であつたといふ。

27 天神山 (知多郡)

昌泰年間に菅原道真公筑紫に左遷せられた時公の第三子英比磨は、知多郡阿久比の里に謫居されたが後英比磨は勅赦され知多郡を領せられることになった。菅家はもと土師の家柄であつて英比磨の従者梅太夫は殊に製陶の技に長じてゐた。梅太夫は英比磨の命で常滑に來り今の寶樹院の地小學校の東方にある小丘に窯を築いて土器を製してゐたといふ。此所を天神山といひ天神の祠を建て、陶器窯の守護神として奉祀してゐた。(現に此の天神山に常滑陶器の恩人鯉江方壽翁の陶像が建つてゐる。)

28 在原業平の御所 (知多郡)

在原業平は美男子であつた。女官に惚れられて京都には居られなくなり、遂に逃げ出したが女官も亦後を追つかけた。逃れ／＼て知多郡上野村富田に來た時すで見付けられようとしたので、とある椎の大木に急ぎ登つて身を隠す。女は此所彼所と探すも姿見えす椎の木の下に在る野井戸を覗くと業平の姿が水鏡に寫つて見えたので、戀人業平は井戸中に居ると大いに喜び、飛込んで遂に死んでしまつた。

其後業平は當地に住んだといふ。(當村寶珠寺に業平朝臣の木像存し、業平の住める所を現に御

所といひ、葬つた所を業平といふ。(塚の話の部業平塚参照)

29 大草城址 (知多郡)

旭村大字大草に城山といつて現に内壕も外壕も残つてゐる城址がある。戦國時代に織田長益(織田源吾入道有樂)は始め宮山城(三和村)に居たが、其所は山が高く水が乏しく不便であるので、此の大草に移らうと普請に取かゝつた。其の構へは甚だ理想的なものであつたらしいが、僅か地形が大體出来上つた時、又世が亂れて此所に居られなくなり、遂に放棄してしまつたものだといふ。

30 藩士山 (知多郡)

小鈴谷村大字大谷字輪の内の藩士山と稱する所は昔岸田重治といふ者の居城址だといふ。

31 杉城 (知多郡)

小鈴谷村上野間の田圃の中に昔の城址だと傳へられる小丘がある。二三本の杉の古木があつて

其の間に小祠が祀られ杉代様すぎしろと呼ばれてゐる。昔大蛇が棲んでゐたといふ。(現に附近から布目瓦や古瓦の破片が出る)

32 景清の隠れ藪 (知多郡)

岡田町里組の利三郎氏の屋敷内に「景清の隠れ藪」といふのがあつた。(今は織布工場になつてゐる)。平家が滅亡した時、悪七兵衛景清は頼朝を討たうとして東國に向ひ、野に伏し山に寝て岡田まで來り、此の藪に身を隠れ半ヶ月も居て後、知多郡大府町の半月へ行つたといふ。(地名の由來半月の所参照)

33 馬場城残し (知多郡)

成岩町に城残と呼ばれてゐる所がある。昔城があつた所だと傳へられ此の城の北方に馬場があつたといふ。現在も西馬場、東馬場といふ。此の城主は刈谷の城主と戦つて敗れ、城内にあつた寶物を城より七八町南方、今の古塚(蔭多様)に埋めて戦死したといひ、城残し附近で刀の「メヌキ」等を拾つた者は急死又は病死したので村人は大層恐れてゐる。

34 金 矮 鶏 (岡崎市)

大平町に今奥屋と云ふ地名がある。昔此處に奥屋と呼ぶ鑄物長者があつて、其の邸宅は豪壯を極め「神の木」と呼ぶ大樹が空高く聳えてゐたが、或年火難に遇うてからは家運次第に傾いて遂に絶家した。「神の木」も勿論家と運命を共にしたが、其の根元には奥屋秘藏の金矮鶏が埋めてあつて、毎年正月元日の未明に唯一聲鳴くと云はれ、若し此の聲を聞く者があれば長者になると傳へてゐる。此の金矮鶏の發掘を試みたところ何れも途中で病氣に罹つたり死んだりしたので、今では此の地に近寄る者もない。

35 公文所址 (碧海郡)

上郷村大字渡刈鹿島大明神の東南接續地に公文所の遺跡がある。附近一町六反歩の地を今以て公文所と呼ぶ。昔北條時頼公が諸國巡行の際此の公文所に立寄られ、鹿島大明神へも參詣になり「鹿島大明神」の御神號を染筆されたといふ。猶其當時公文所に時頼公が宿泊すべき客殿が無かつたので、隣松寺本坊で宿泊致されしとのことである。

36 長者屋敷 (碧海郡)

和銅年間志貴之庄和志取の郷(今の矢作町附近)に豊阿彌長者が居住したと傳へられ、其の屋敷址なるものが現に存在して長者屋敷と呼ばれてゐる。長者屋敷に深さ一丈程の古井戸がある。水は腰位であるが之を吸み干すことが出来ない。土地の若者達が時々試してみるが不思議に水が湧き出て根負けして中止するといふ。井戸底の中央に大石が有つて、この下に何か不思議が有るのでは無いかと云はれる。昔この長者屋敷で鶏の鳴き聲を聞いた者があると傳へられる。

37 北野廢寺 (碧海郡)

矢作町大字北野に天平時代の寺院址と稱する所がある。昔其の一隅で十二月卅一日には必ず金の鶏が鳴いたと云はれ、その鳴聲を聞いた者は福を得ると言ひ傳へられてゐる。

38 小野小町の居住跡 (幡豆郡)

幡豆町大字西幡豆小野谷三の澤に小野小町の居住址と傳へられる一廓が在つて、數個の礎石様城址・屋敷址等の跡

のものが残つてゐる。

39 宮崎城址 (額田郡)

宮崎村大字石原の宮崎城址は稻荷屋敷とも呼び、奥平監物貞昌の築城で、後曲淵甲斐守の居城となつた。甲斐守は貧弱な城主で時折里人に物を貰つたといふ。殊に正月に餅を搗くことすら出来ず、百姓から取り上げた。故に近所の者は餅搗きの音が立たぬやうに、臼の下に藁や藎を敷いて餅を搗いたと傳へられる。

40 釜屋敷 (北設楽郡)

武節村大字御所貝津の「ミツクサ」といふ所に尹良親王が信濃波合で戦死なされる前、暫く留まられた御殿跡があるが、そのほとりに釜屋敷又の名を御鹽場といふ當時の井戸がある、この井戸はどんな大雨でも長雨でも水が溜らないが、長雨で人々が困つてゐる時、急に水が溢れるやうになると天気になるといふ。

41 岩山の城址 (北設楽郡)

御殿村大字中設楽字尾籠にある岩山は全山岩石で被はれ、今は頂上の岩上に行者様を祀つてゐる。昔この岩山は衛門太郎の城址で、特に大木の根が残つてゐるのは、城の鬼門除に植ゑた木だつたと傳へられてゐる。

42 宮平の城址 (北設楽郡)

本郷町大字本郷、宮平の城は長篠の戦の頃に落ちた。ここにのこる池の跡は城主愛玩の鶴を飼つた所である。なほ殿ヶ井戸の跡もある。毎年七月頃から鈴虫の聲をここできくが誰も姿を見ない。これは城を退く時奥方が籠に愛でてゐた鈴虫を放したものだといふ。尙城址の下に泉があるが、ここは血刀を洗つた所なので、この水を飲んだり使つたりすると、できものが出来ると。

43 尾藤源内屋敷址 (南設楽郡)

作手村赤羽根と同村見代との間に昔、尾藤源内といふ者の住んだ屋敷址がある。今は田になつ

てゐるが、中一ヶ所そそきばの茂つてゐる所がある。ここは手をつけるとはげしいおこりをふるふといふので今に誰も手をつけない。

44 重松城址 (寶飯郡)

御津町大字廣石と字茂松との境にある重松城址といふは、昔二老松が重なつてゐたので重松の名があるといふ。このうち一本の松を村人が伐採した時、その伐口から血が吹出たので、驚いて他の一本を切り残した。それで村を一本松とも言つた。

七、塚 の 話

1 爲 朝 塚 (名古屋市)

中區正木町泰雲寺の境内に大きな石があつて、その上に小祠を安んじて爲朝を祀つた。そしてそれを爲朝塚といつてゐる。

○

南區尾頭の元興寺の裏畑に、爲朝塚といふのがあるといふ。或ひは、義次が父爲朝の菩提の爲に、爰に墳を築いて追福をした所ではないかともいふ。義次は古渡の人で、熱田東町字澤上の俗稱城島といふ所は、其の居住地だと傳へられてゐる。

2 白 鳥 山 (名古屋市)

南區熱田白鳥町の北側に在る白鳥陵は、日本武尊の御陵と言ふ。舊名は龜山といつてゐた。日

本武尊の御衣を埋めて祭つたといふ。白鳥御陵碑に、本居宣長の

しき島のやまとこひしみ白とりのかけりいましゝあとゝころこれ
といふ歌が刻されてある。

3 御 輿 塚 (名古屋市)

南區熱田^{あつた}旗屋^{はたせ}町の藤秀氏の宅地内にある。往昔熱田神宮の神輿を掘出した所と言ひ傳へてゐる。

4 小 首 塚 (名古屋市)

東區武平^{たけひら}町二丁目の北側にあつた。これは小子部連鉏鉤の墓だと云ひ傳へてゐる。又このあたりからチイサコベノクグツの石塔を掘出したことがある。

5 お とも の 塚 (名古屋市)

東區撞木^{つちき}町の内鐵砲塚町と坂下筋の内にあつて、古來おともの塚と云つてゐた。或る記には大友皇子の古墳ではないかといつてゐる。

6 鍙 塚 (名古屋市)

中區正木^{ただき}町八幡社の境内にあつて、昔から義次又は爲朝の武具を埋めた所だと言つてゐる。

7 金 塚 (名古屋市)

中區正木^{ただき}町及び古渡町にある。義兼の塚だといはれてゐるが、一説に昔元興寺の堂宇に金銀の鶏を上げ置いたところ、照り輝いて漁獵の妨になつたので、火を懸けて焼亡し其の鶏を埋めた所だといふ。今其所に榎の大樹一株がのこつてゐる。

8 片 葉 塚 (名古屋市)

中區古渡^{ふるわた}町にあつて、昔は一間四方もあつたが、後には至つて小さい塚になつたといふ。古來片葉の蘆が生ひ立つてゐたのでその名が出たといふ。

9 將 軍 塚 (名古屋市)

南區熱田旗屋町にある將軍塚は、上様塚ともいふ。熱田御大工頭岡部又右衛門の先祖が、織田信長に仕へて恩顧を蒙つてゐたが、信長の死後公の袴(一に袴に作る)を埋めて塚を築いたといふ。一説には、信長妾某が女子を産んだが、卑賤の身であるので、大工岡部又右衛門の女とし、岡部を熱田社の匠司としたともいふ。

10 太郎塚 (名古屋市)

東區千種町字馬走にある。中古古井太郎といふ者が住んでゐた。近くに軍事があつて援兵を乞ふたが、性怯で兵を出す勇氣もなく、人夫を集めて塚を築き土木の役に托して之に應ぜなかつたといふ。この地を馬走塚とも太郎塚ともいふ。

11 平將門の首塚 (名古屋市)

南區熱田の本宮に朝廷が平將門の誅伏を御祈願になつたことがある。神人等本宮の神輿を飾つて南門からお出し申したが、神輿の轅に血が著いてゐた。丁度この日に相馬にて將門は誅に伏し

たといふ。偏に神威の致す所だと云つてゐる。將門の首は都へ送る途中此の地に埋めたといふ。地點については諸説がある。言ひ傳へには相馬にて生捕りにした者は熱田で皆追放した。後世の八月八日放生會は是から始まるといふ。

さて曩の神輿は之を本宮に還さず、別に大福神社と名づけたが、毎年八月八日の神事は將門追伐の遺風をうつしたものだといふ。熱田表大瀬古に三狐神の社があるが、俗に將門が靈を祀ると傳へてゐる。近くの扇川に米嶺といふのがあるが將門の首を此の流れで洗つたといふ。この地名は狂歌「將門は米かみよりぞきられけり俵藤太がはかりごとにて」からとつたものだといはれてゐる。

12 小袖塚 (名古屋市)

中區鍛冶屋町筋にて袋町と本重町との間に小袖松といふ古木がある。師長公が井戸田より歸洛の時、年頃馴れ仕へた女が土器野まで送つて來たが、惜別の情に堪へず松が枝に小袖を脱ぎ掛けて入水して失せた。そこへ一人の長者が、娘の行方を悲しみ探して來たが、彼の女の小袖がこの松の枝に掛つてゐたので、其所に小袖を埋めてから、小袖塚と呼ぶやうになつたといふ。

13 お塚様 (名古屋市)

中區廣井中町三藏筋から南へ二軒目、東側の平尾源右衛門が奥の間の椽の下に塚があつた。嘗て之を發かうとしたが、一夜夢に美女が現はれて、「私は廣井の女王である。我が墓を發いて呉れるな。」と告げて姿を消した。後崇りがあつたので、源右衛門は姫を屋敷内に祀つて、お塚様と崇めたといふ。一説には別の所に女王塚といふものがあつたともいふ。

14 お猿塚 (東春日井郡)

小牧町大字小牧字林こまき東に小さい塚がある。近年そこに小祠が營まれた。昔は尾張藩祖が大變に猿を愛されて、其の飼養を小牧村に托し、同時に若干の山林を附けられたことがあつた。ところがこの愛猿が死んだので葬つたのがこの猿塚である。義直は愛猿のゆかりを以つて、自ら猿の畫を描いて「こまき」と題してこれを小牧村におくられた。當時里人はこれを旗に装ひ、猿供養として毎年飾馬を熱田神宮に奉納したといふ。此の畫は江崎氏方に傳はり猿の碑は西林寺内に存してゐる。

15 帯塚 (東春日井郡)

味岡村大字岩崎あじおかに、帯塚といふがある。近くの田縣の宮の玉姫の命が御帯を解かれた場所であると傳へられてゐる。これに祈れば、皮膚病平癒の靈驗が顯著であるといつて、參詣する人がある。

16 衣掛塚 (東春日井郡)

味岡村大字久保一色の田縣神社の西方にある古塚を、衣掛塚一名荒田の塚とも言つてゐる。こゝは田縣様(玉姫の命)が御他界になつた所で、命が御衣をお掛けになつた衣掛松があつた所だと言ひ傳へてゐる。

17 白鳥塚 (東春日井郡)

志段味村大字上志段味字白鳥しだまにある。日本武尊が伊吹山の麓で、小蛇に御足をかまれ遊ばした。この小蛇こそ大毒蛇であつたが、尊の威に恐れて大蛇となることが出來ず、其の尾部にて御

足を嚙んだのであつた。そこで尊は水戸川で御足をお洗ひになつたが、その時一羽の白鳥が御前に来た。尊が白鳥に向つて、「汝白鳥よ、天性あらば吾を尾張まで見送れ。」と仰つた。すると白鳥がうなづいて直に尊を翼に御乗せ申して尾張の東谷山の麓に至り、こゝに下りたが間もなく死んだ。尊は白鳥をこゝに葬られたので、白鳥塚と呼ぶやうになつたと言ふ。

18 親王塚 (東春日井郡)

高藏寺町大字大留に圓形の塚がある。これは宗良親王の遺物を收めた由言ひ傳へてゐる。又當地神明社の攝社の白日靈社は、宗良親王と護良親王の御二方が祭神になつてゐる。親王がこの地に御滞留になつてから、王留と稱するやうになつたとも言ふ。

19 外堀塚 (西春日井郡)

北里村にあつて今では俗稱をうほれと云つてゐる。そこは小木と船津との境界線になつてゐる。小牧役の外堀の跡であるといふことである。或る人の説では、小木に織田某の城があつたが現存はしない。

20 小野道風筆塚 (西春日井郡)

師勝村大字高田寺の醫王山高田寺境内にある。往昔道風は高田寺の薬師如來に筆道の上達を祈願して三蹟の名手となつた。そこで奉養のため醫王山の額字及び平常用ひた古筆を奉納されたといふ。後人がその筆を境内に埋めて供養した址を古來筆塚と稱したさうである。その地點については諸説が區々である。一説に同寺境内の東に隣した山の神と大山祇神を祠つた社森の境内にあつたとも又塔中實相坊屋敷にあつたとも言傳へてゐる。道風書の板額は今尙同寺に傳へてゐる。

21 駿河塚 (西春日井郡)

新川町の西清洲街道の並木の南の方にある。永祿三年に信長が今川義元の首を此處でさらし、後使僧を立て、首を駿河に送らせたといふ。その跡に塚を築いて駿河塚と呼んだ。この塚の老松を一名首實檢の松とも言つた。信長は千部の經を誦せしめて厚く義元の靈を弔つたので、世の人は信長を情ある大將と敬つたといふことである。

22 琵琶塚辨財天 (西春日井郡)

西琵琶島町小場塚新田の辨財天は、高倉天皇の治承三年に、太政大臣藤原師長公が當國井戸田の里に配流になつてゐたが、赦免になつて都にお上りになる砌に、彼の里の娘で公に寵愛を受けた姨御前に、御形見として手馴れの白菊といふ琵琶と御守本尊の辨財天とをお渡しになつた。女は別れを悲しんで、

四つの緒の調べにかけて三瀬川沈み果しと君につたへよ

と一首の和歌を詠じて、あたりの池に身を投げてやがて空しくなつた。其後彼の女を葬つた姨塚の上に、師長公の守本尊であつた辨財天を勧請した。これが、琵琶塚辨財天の由來である。

23 機織塚 (丹羽郡)

犬山町上野字八幡の大門といふ所に機織塚といふがある。夜塚の附近を通ると女が機織をしてゐるやうな音がする。そこで機織塚といふやうになつた。

24 磨墨塚 (丹羽郡)

羽黒村に磨墨塚といふのがある。昔この村の長谷部佐膳の女が梶原家に仕へ、隅の方といつて敬はれてゐた。梶原家の人々は、没落後は隅の方の生地羽黒村に至つてそこに安住の地を求めた。即ち建仁元年の八月には、梶原景高の一子豊丸君を主とし、御母君の隅の方七臣、愛馬一匹凡て拾餘人が羽黒村に引越した。豊丸は成人して梶原平九郎景親と名乗り御館と敬はれた。隅の方は壽を以つて死去されたが、連れて來た名馬磨墨も同日に死んだので、人々は其の縁によつて隅の方の墓の傍に葬つた。その墓は今尙熊笹の繁る中にある。里人はその笹葉を黒燒にして、腫物の藥にしてゐる。時折華や線香を立てる者も多い。又羽黒村には梶原屋敷といふのがあつた。

25 葉森塚 (丹羽郡)

扶桑村の高雄小學校の裏手に、葉森塚といふのがある。何でも天正小牧合戦の時、或武將が立往生を遂げた跡だといふ。その武將は、首から上の何處かを鐵砲で打たれて無念さうに、「俺は此處で死ぬ。者共首から上の病は何でもなほしてやる。」といつて死んだ。明治四十三年に、近隣の

高木内蔵七といふ人によつて、小碑が建つた。此の塚のあたりの木を切つたり掘つたりすれば、必ず祟りがあるといふ。靈驗があるので参拜者が多い。

26 庚申塚 (中島郡)

萩原町二子の庚申塚は昔信長が美濃に兵を進めんとしたとき勢揃をした事がある。その折は天に沖する烽火や法螺の音がかまびしく、馬の嘶き、林立する旗差物は大變な壯觀を呈したと傳へられてゐる。

○ 27 猫塚の金蔓 (中島郡)

大和村大字毛受に昔に悪猫が棲んでゐて村人を苦しめた。そこで村人はこの猫を退治して其の骸を字正寺に埋めたが、それからは毎夜天空に向つて一條の白光が立ち昇つた。その状恰も鎖のやうで「猫塚の金蔓」といつた。

28 王塚 (中島郡)

祖父江町にある塚で、往昔天武天皇が伊勢から美濃の國へお越しになる時、暫く閑居遊ばした所だといふ。又一説には後醍醐天皇の皇子の墓陵とも云ひ傳へてゐる。附近の草木を刈ると必ず祟りがあるといふ。

○ 29 蛇塚 (中島郡)

萩原町の萩原山に一匹の大蛇が棲んでゐて、荒子の田圃を荒し廻つた。そこで村人達は大蛇を退治することにしたが、たゞ寶光寺の法印はそれに反対した。一同が大舉して彼の大蛇を退治した。それが蛇塚となつてのこつた。しかし寶光寺の法印の畏れは適中して、荒子は總て死滅の厄を蒙つたといふ。

30 尼ヶ塚 (海部郡)

大治村西條・千音寺・三本木に圍まれた地域を尼ヶ塚といふ。昔高貴な尼が住んで居られ其の塚があつたといふ。(今は塚の址不明)

31 小町塚 (海部郡)

甚目寺町大字新居屋の小町塚は、昔小野小町東下りの途、當地で死去されたので葬つたものだと云ふ。

32 莠の恩人晴明の塚 (海部郡)

昔安部晴明といふ人、甚目寺町大字新居屋の地に來て農民の爲に田圃の莠を除くことに盡力された。後世此の地の水田に莠の害の無いのは氏の恩恵であるとし、塚を築いて祀つたのだといふ。

33 太閤塚 (知多郡)

大野町の南西、鬼崎村西之口の西方の海中に昔太閤塚があつたといふ。元祿十二年に記された大野村由緒記に次の如く書かれてゐる。

太閤塚と申す塚大野内宮之浦と蒲池(鬼崎村)外之浦の間に御座候由申傳候今者磯之浪打際より三四丁計沖に罷成候大野の町よりは南に當申候近き昔まで此塚の四五丁沖も汐干鴻之由

老人之物語に仕候此塚凡六十餘年以前野分の高浪に餘程崩申事御座候其時此塚之内に小さき眞焼の瓶有之其中に齒骨多く詰て御座候を遙に見申候老人今も物語候此塚豊臣秀吉薨去之時大野谷之寺に御弔申築候塚の様に申事も有之候得共左程近き昔の塚に御座候者今之老人の内にて遙に承知仕者も數多可有之候左様之事も無御座候大昔之儀と必定仕候様に奉存候五十年前後は塚の形も見え由申候

34 塚の越の古墳 (知多郡)

日間賀島村の塚の越に石室がある。古老の説に昔より我が國に三つの古墳がある。何れも金の鶏二番と朱壺十二個を埋藏してゐて、朝日も入日もよく照る所にあるといふ。其中二ヶ所は發見されたが、今一ヶ所は我が塚の越の石室がそれであるといふのである。

35 櫻姫の墓 (知多郡)

野間村大字奥田に櫻姫の墓といふのがある。昔大納言櫻町成範の女に櫻姫といふ美人があつた。家臣青町といふ者と密かに相通じそれが露顯して居られなくなり、山城國愛宕郡北山村に潛

れた。偶々青町は發斑の重症に罹つたので姫は大いに悲しみかねて聞いてゐた靈驗あらたかな戀の神水を尋ねて當地に來り、その所在を問ふ。土地の人戯れて偽つて「是より東方尙三十五里」と教へたので、姫は落膽遂に此の地に頓死してしまつた。此の塚はその墳墓だといふ。(河淵泉池等の話の部 知譯戀の水と戀の水神參照)

36 城 塚 (知多郡)

小鈴谷村上野間に城塚といつて小丘をなす一つの塚があり碑も立つてゐる。昔越智伊賀守正中公の居城址だといふ。(正中の子を時中といひ、父子共に文武兩道に通じ京都に出て塾を開き子弟を教養したと傳へられる)

37 業 平 塚 (知多郡)

上野村富田の俗稱業平といふ所に古色蒼然たる石碑が五六基ある。業平が登つた椎の木のあつた所で、業平を葬つた塚だといはれてゐる。(屋敷址の部 在原業平參照)

38 今川義元の墓 (知多郡)

横須賀町大字高横須賀字戌亥屋敷に俗稱今川さんと呼ぶ古い五輪の塔がある。その傍に今川義元の墓と刻んだ碑がある。古傳に桶狭間合戦の後、今川の殘黨は大將の死骸を守つて當地の永昌院(今は名古屋に移る)に來り葬り、墓を守るためその一部の者は當地に残つて百姓となり今の早川氏、北川氏の祖先となつたといふ。(一部の者は遠く伊勢地へ逃れたといふ。) 此の塚はオコリに罹つた時お詣りすると癒るといつて信仰されてゐる。

39 惣五郎塚 (知多郡)

横須賀町大字養父字北堀畑に在る惣五郎塚は又名弓掬松とも云ふ。昔此の鉾の城主花井惣五郎といふ者不意を討たれて殺されようとする時「若し我に弓持ち居たらんにはかく悲惨なる最期は遂げざるものを」と残念がつて死んだといふ。之は此の城主を葬つた塚でこの塚の老松に觸れると眼病を患ふといひ今は伸びる儘に放置してある。

40 正官墳 (知多郡)

大府町大字吉田の正官墳は、昔山武士が齒痛のため此所で苦しみ死んだ所と傳へられ、齒の痛む時此所にお詣りすれば直ちに平癒すといふ。全快した時は豆の黒焼を齒の敷だけ供へてお禮参りをするのである。

41 六部塚 (知多郡)

阿久比村大字阿久比地内に六部塚がある。昔當地の庄屋へ六部が來て無禮を働いたので、その庄屋が非常召集の笛を吹いた所、隣村の椋岡の人まで應じて出て來た。そして椋岡の人と挟み討ちして生捕にし、首だけ出して生埋した。六部は残念がつて椋岡の人を恨み、「椋岡の戸数は將來永久に廿五戸以上には殖さないぞ」と云つて死んだといふ。

42 山伏塚 (豊橋市)

上傳馬町と坂下町(現湊町)の間に、吉田城の西の總門があつたが、この門の西側に楓樹一基の

山伏塚があつた。それは一人の修業者が住んでゐたが、或時この修業者を仇敵とねらふものが尋ね來て修業者を討取り、ここに埋めて楓一本を墓印としたものといふ。

この頃坂下町に兼房權兵衛といふ刀鍛冶があり、彼が鍛へた刀で仇を討つたので兼房の名は評判になつたに反し、やはりここに廣房といふ刀鍛冶があり、討たれた修業者の持つてゐた刀が廣房の作だつたので、人々忌み嫌つて用ひる人なく次第にその名が衰へたといふ。

43 新田義貞の首塚 (碧海郡)

六ツ美村大字宮地の精目犬頭社境内に新田義貞の首塚と云ふ古塚がある。義貞は藤島の戦に敗れて戦死し、其の首は賊の手に渡り京都に於て鼻首された。宇都宮泰藤が之を聞いて大いに怒り、京都に潜入して其の首を奪ひ領國上野に走らんとしたが、其の途路病に罹つて志を達せず、舊領三河國上和田村に據つて再起の時を待つた。さて義貞の首は精目神社境内に埋め、之を犬の首塚と流布せしめた。その理由は當時幡豆郡地方に賊軍に屬する吉良氏があり、頗る勢力があつたので之を欺かんが爲であつたと云はれる。一説に泰藤は義貞の首を携へて相模國に走り、酒匂川附近に葬つたとも傳へられてゐる。

44 猿投塚 (碧海郡)

矢作町大字橋目、俗に新井と稱する地内に猿投塚と呼ぶ塚がある。ずんど塚又はお椀貸塚とも云ひ、塚に向つて自分の欲する椀の數を祈願すれば翌朝其の通りに有り、使用後は元の位置に借りた數其の儘を返すのである。或る一人の老婆が此の椀を借りたが、借りた數よりも少なく返した爲、其の後は何人も貸して貰へなかつたといふ。

45 美會塚 (額田郡)

昔岩津町渡津通字丸塚に長者があつた。方一尺長さ三尺の純金の棒を埋め、若し後世此の棒を掘り當てた者が有つたら其の者は、必ず自分の様な長者に成るであらうと言つて死んで行つた。此の長者の墓地は美會加山(長者畑ともいふ)美會塚として残つてゐる。古老の話によれば昔は毎年盛大に祭が行はれ、其の祭典中には沸湯を火にかけてまゝ奉獻し、氏子は其の中で手を清めて舞をしたさうであるが、決して火傷をしないのみならず、いよいよ式を終了する迄は沸騰しなかつたさうである。寛保元年に此の美會塚に建てられたと云ふ阿彌陀如來は、今新道の三つ辻に移

されて居る。

46 コタネシヨイの墓 (北設楽郡)

段嶺村大字田峯字尺地にあるコタネシヨイといふ小祠は、昔この村へ蠶の種をひろめた人の墓と傳へられてゐる。

47 ふじ塚 (北設楽郡)

段嶺村大字田峯字大戸井に、今塚の形はないが、太さ三尺程の藤が茂り、その根元に石の祠があり、ふじ塚と呼んでゐる。これは田峯城主菅沼氏の先祖の墓とも言ひ、藤原氏由藤を植ゑたと傳へられてゐる。

又一説に富士講先達の墓ともいふ。

48 武田信玄の墓 (北設楽郡)

田口町大字田口福田寺境内に武田信玄の墓がある。信玄は元龜三年の戦に敗れ、微傷を負ひ野

田を引上げ、途中鳳來寺に參詣、田口福田寺まで到り、永眠したが、家來は遺命を奉じ秘して喪を發せず、甲州に引き上げたので世人之を知らなかつたと云ふ。

49 比丘尼塚 (北設樂郡)

田口町大字田口字横手玉の木附近に比丘尼塚がある。明治初年福田寺火災にあひ、尼僧過去帳を持出し逃場を失つて焼死したが、その死體の下に半焼の過去帳あり、ために武田信玄の戒名を知ることが出来たと。この尼を埋めた塚といふ。

50 信玄塚 (北設樂郡)

上津具村の村はづれの小橋信玄橋から半町ほど北の右側に信玄塚がある。武田信玄が長篠戦争に病を得て歸國の途中この地まで来て永眠したのを埋めた塚といふ。この塚から半町程はなれた所に池があるが、この池は信玄の所持品のうち國へ持歸る大切な品を洗つた所で、土地の人はこの池で手も洗はない。

51 信玄塚 (北設樂郡)

上津具村田中に五輪塔三基あり、信玄塚といふ。又落人の最後の地ともいひ、長沼城主父子追撃せられ討死したその塚ともいふ。

52 七人塚 (北設樂郡)

豊根村大字上黒川字川合に七人塚がある。昔「御園」に行く七人の旅人が、道に迷つて川下の家で道をきいて出掛けたが、終に山の窪に入り死んだ。後ここに入り山を作つてゐた人が祟られて病死したのでこの塚を建てて供養した。

53 藤塚 (北設樂郡)

稻橋村大字押山字やぐら平の藤塚は昔の人骨や、刀劍や器類が埋めてあつて、これを掘らうとすると祟があるといふ。

54 千人塚 (北設楽郡)

武節村大字富永に千人塚といふ塚がある。昔戦争があつた時、多くの戦死者を合葬した所だといふが、もとは晝三度、夜三度その塚から血が流れ出したといふ。

55 村境塚 (北設楽郡)

名倉村と上津具村の境、圓山の北麓小川のほとりに境塚とて兩村の境をする塚がある。昔まだ兩村の境がはつきりして居なかつたので、兩村の人々が談合の結果、名倉村からは牛、上津具村からは馬を引立て曉に兩村を出發して出合つた所を境にすることに決めた。その日が來て名倉の人は尋常ならば馬に負けるにきまつてゐると、早朝から牛の尻を打つて急がせたので、山を越して津具の里が見えるやうになつても津具方の人々は姿を見せない。一方津具方の人々は馬は足が早いからと油断して寝過ぎて明るくなつてから目覺めたので、周章して馬に鞭打つて駆け出した。これを見た名倉の人々は少し後戻りして圓山の北麓の小川の傍で待ち合せた。それでそこが村境に決つた。名倉村と津具村では村境がひどく津具の方に片寄つてゐるのはこんなわけがある

といふ。

56 七人塚 (北設楽郡)

振草村大字平山の七人塚は岩小屋城落城の際、城兵七人を斬り埋めた所といふ。

57 大倉大明神 (北設楽郡)

振草村大字上栗代字隠平の大倉大明神は、皮膚病に靈驗があるといふ。昔この地におくらといふ女の木地屋が居たが悪性の皮膚病にかかつたのを、村人が親切に介抱してやつたので「わしが死んだら皮膚病の人を癒してあげる」と口癖に言ひながら死んだ。村人は光淋大善尼とて小さい墓石を建てたのがそれである。

58 七人塚 (北設楽郡)

振草村大字小林字柏原の畑中の七人塚は、天正年間落武者亂入の際、村内の血氣の勇士火繩銃にて武者七人を殺し、他を退散させた、その遺骸を埋葬した所だといふ。

59 七 人 塚 (北設楽郡)

振草村大字古戸から園村大字足込に越える時に七人塚と呼ぶ塚がある。この塚は昔獵人が猪や鹿を獲るおし(おとし)を作り、七人してその重さを試さんとして、下敷になつて死んだ、その塚だといふ。

60 おきくの塚 (北設楽郡)

三輪村大字川合地内川合驛から池場へ通ずる別所街道の池場坂を登りかけた道の傍におきくの墓がある。この人は高橋きくといひ、伊勢國の生れで京の女官だつたが、落ちて来て、この附近の池場地内にある龜淵へ身を投じて死んだといふ。ここにルリといふ鳥が居て「おきく二十四」と鳴くから、おきくは二十四で死んだのだらうとも言ふ。

61 落人の塚 (北設楽郡)

三輪村大字奈根の入佛に武田方の落人の墓がある。長篠の戦争に敗れた武田方の落人が道に迷

ひ飢と疲れて倒れた。野良から歸る村人が見つけて起きすと「甲斐の國の者だ。甲斐の國の見える所へ埋めてほしい」とて息が絶えた。その頃織田方の命きびしく、落人をかくまつたり、食を與へたりすると罪人になつたので、その百姓も、埋めもせずすてておいた。二三年たつて他の村々で武田方の落人を殺したり、追ひ出したりした家に不幸が続いた。その話をきいて先の百姓は死體のことを讒言のやうに口ばしつた。その子がきいて、死體を見つけ埋葬した。そこを入佛といふやうになつた。

入佛には他にも落人の墓がある。それは舊本郷街道、今の芝居小屋の下の附近に二つならんであつたさうで、やはり落人が二人この地まで逃れ来て倒れてゐたのを、追手の徳川方の一人が見つけたが、あまりの痛々しい姿にあはれになり市原の某寺まで來たが、僧は後の迷惑を思つて狸寝をしてゐた。(その頃如何なる重罪人でも、僧が一言「お預り申す」というて袖でかくせば、罪を許されたさうである。)そこで仕方なく追手は二人を殺してその地に埋葬したといふ。その後入佛で芝居の催があるとよく雨のふるのは其の爲であると。

62 七 人 塚 (北設楽郡)

本郷町大字本郷、今秋葉の燈籠代りの電燈がついてゐる附近にもと竹藪があり、その傍に七人塚とて七つの石碑があつたさうな。なんでも長篠の戦の頃、別所の宮平の城主伊藤某城を落ちて出入りのもの本郷の田の口（屋敷名）に立寄つたが、主人は残念がつて、城主が家を出ると「腰抜け武士だ。するだけのことをせず立ち退くとは見下げた者だ」と家内に罵つた。門口でこれをきいた城主は怒つて家内七人を殺して立去つたといふ。その七人の霊を祀つたのが、この七人塚である。

63 經 塚 (北設楽郡)

本郷町大字本郷中在家の山に經塚がある。ここは三ツ瀬のお宮にあつたお經三百巻をどういふわけか、中在家の山田某がこの地に埋めた所だと。

64 藤 塚 (北設楽郡)

園村大字足込字大林にある藤塚は、昔長者が黄金を埋めた所といひ、朝日さす夕日かがやく藤塚へ

珠千貫黄金千貫葦毛の駒につけこんだ

といふ唄が残つてゐる。

65 犬 の 墓 (北設楽郡)

園村大字足込字吐原に犬の墓がある。古戸との境の七人塚に祀られた獵師の犬とも、ただよく狩に役立つた犬だともいふ。主人の死を村人に知らせて死んだともいひ、その墓には赤野屋太郎之墓と人間の如き名がつけてある。

66 望 月 様 (北設楽郡)

園村大字御園字眞地、御園峠の麓に望月様とて小石祠がある。天正三年長篠の戦に甲州軍敗れ望月右近太夫御園村に逃れ入る。食を求められ大豆を炒つて出したこの村の老婆は恩賞にあづからうと、信濃道を教へるとて欺きて山道に迷ひ入らせ、村人とかたらつて殺さうとした、望月天命の到るを知り、「我刀にて我を斬れ、死後信州風の來る所に葬らば仇することなし」と腹切つて死んだ。村人は死骸を右の百姓家の側の溝に埋め大小、金を奪つたが、その後子孫の代に祟が

あつたので、信州風の吹く今の所に埋めかへたといふ。望月夫人も夫を尋ね振草村神田に來た時殺されたといふ。

67 高松の無縁塚 (南設楽郡)

作手村大字高松字弓木地内にある無縁塚は、昔山出入で殺されたか憤死した人々を祀るものといひ、今でも春秋の申の日にはがらんまつりを行ふ。

68 經塚 (南設楽郡)

作手村大字高松字弓木の養松寺の裏に經塚とて、昔經を埋めたと傳へる塚がある。此處に白狐が住んでゐたといふ。

69 火塚 (實飯郡)

一宮村長山内地内の高所に四十餘ヶ所の火塚と呼ばれるところがある。今は填かれて僅に二ヶ所残つてゐるのみであるが、大石を蓋として、石を疊んで造り、南に小口がある。もとは火穴とも

いひ、大昔のん火の雨の降る用意の穴といふ。

70 牛長左塚 (實飯郡)

一宮村大字江島字川島に牛長左塚がある。牛長左は舟を一人で擔ぎ上げる程の力持ちだつたさうな。

71 オンメ塚 (實飯郡)

牛久保町大字牛久保字海見塚の畑中の小高い所をオンメ塚といふ。永祿六年家康公牛久保を攻められた時、討死した勇士十六人を埋めたところといふ。

72 金時塚 (實飯郡)

小坂井町大字平井字坂田に金時塚と呼ばれ、五坪ばかり樹木の生ひ繁つた處があり、昔からこの地の草を刈り木を切るとオコリをふるふと傳へられてゐる。頼光勅命により東路の賊を平げんとこの地に來り鎮守堂に參籠せられ、翌朝出發の際、金時の持念佛一寸八分の薬師如來が動か